

沖縄県文化財調査報告書 第106集

# 新空港・空港拡張建設設計画予定地内の遺跡

—新石垣空港・久米島空港拡張建設設計画予定地内の分布調査報告書—

1992年3月

沖縄県教育委員会



沖縄県文化財調査報告書 第106集

# 新空港・空港拡張建設計画予定地内の遺跡

—新石垣空港・久米島空港拡張建設計画予定地内の分布調査報告書—

1992年3月

沖縄県教育委員会



# 序

この報告書は、新空港計画および空港拡張計画が予定されている、石垣空港および久米島空港建設予定地内の文化財の分布調査の成果を記録したものです。

1972年の本土復帰に伴い、沖縄県では他府県との格差是正を図るということから、多種多様な開発が行われています。とりわけ、これまでの道路網や港湾、農用地などの整備には目をみはるものがあります。

近年の航空輸送の増加に伴い、県では久米島空港の拡張および新石垣空港の建設設計画を進めています。

計画予定地内には、周知の遺跡として北原貝塚（久米島空港）や嘉良嶽貝塚（新石垣空港）などが含まれていることより、当教育委員会では、あらかじめ予定地一帯における文化財の分布調査を実施し、空港建設設計画側との協議資料に資するとともに、これらの文化財のより適切な保護措置を講ずる目的で本書を刊行いたします。

本書が多くの方々に活用されるとともに、広く文化財への理解を深め、文化財の愛護思想につながっていけば幸いです。

末尾ながら、この調査に際し、種々便宜を供与され、多大な御協力をいただいた石垣市教育委員会や具志川村教育委員会をはじめ、関係者各位に対し、衷心より感謝の意を表する次第であります。

平成4年3月

沖縄県教育委員会

教育長 津留健二

## 凡 例

1. 本報告書は、1989～”91年度に実施した新空港・拡張空港計画のある、久米島および新石垣の両空港建設予定地内の遺跡分布調査の成果を収録したものである。
2. 本事業は「久米島空港ほか遺跡分布調査」として、国（文化庁）の補助（80%）を受けて、沖縄県教育委員会（所管：文化課）が実施した。
3. 調査に際し、拡張・新計画がある両空港の地元の教育委員会、久米島空港（具志川村教育委員会）、新石垣空港（石垣市教育委員会）の協力を得た。明記して、謝意を述べる。
4. 本書に掲載した地図は、建設省国土地理院の許可を得て、同院発行の2.5万分の1および5万分の1の地形図を複製したものである。
5. 嘉良嶽貝塚掲載遺物のうち、開元通寶と石斧は大浜永亘氏（八重山文化研究会）所蔵の資料である。本報告書を作成するにあたって、実測および拓影、写真等の掲載の意を申し上げたところ、快諾して頂いた。明記して、謝意を述べる次第である。
6. 出土遺物のうち動物遺体、石質、陶磁器については、下記の諸氏の御指導・御教示を得た。明記して、謝意を述べる次第である。

動物遺体 渡辺 誠氏（名古屋大学文学部教授）  
石 質 神谷厚昭氏（沖縄県立那覇高等学校）  
陶 磁 器 大橋康二氏（佐賀県立九州陶磁文化館）  
手塚直樹氏（鎌倉考古学研究所）  
津波古聰氏（沖縄県立博物館）
7. 本書の執筆は、下記の通りである。石垣市在住の中鉢良護氏（琉球大学民俗研究クラブOB）には、クバ御嶽（オン）に関して歴史・民俗学的立場からの玉稿を頂いた。明記して、謝意を述べる次第である。

新石垣空港建設設計画定地内の遺跡  
第1章～第7章（盛本勲）  
第8章（中鉢良護：琉球大学民俗学研究クラブOB）  
久米島空港拡張建設設計画定地内の遺跡  
第1～5章（盛本勲）
8. 本書の編集は、盛本が行った。
9. 調査によって得られた遺物および調査に関する記録類は、沖縄県教育庁文化課資料室にて保管している。

# 目 次

## 本 文 目 次

### 序

### 凡例

#### 新石垣空港建設計画予定地内の遺跡分布調査

第1章 調査に至る経緯 .....	(2)
第2章 調査地の位置と環境 .....	(5)
第1節 調査地の位置と自然環境 .....	(5)
第2節 調査地周辺の遺跡 .....	(6)
第3章 調査の経過 .....	(10)
第4章 嘉良嶽貝塚の試掘調査 .....	(11)
第1節 調査の概要 .....	(11)
第2節 層序 .....	(13)
第3節 遺物 .....	(15)
a. 石器 .....	(15)
b. 貝製品 .....	(19)
c. 開元通寶 .....	(19)
d. 動物遺体 .....	(20)
第5章 古墓群の調査 .....	(35)
第1節 調査の概要 .....	(35)
第2節 各墓の概要と遺物 .....	(35)
a. 第1号墓 .....	(35)
b. 第2号墓 .....	(37)
c. 第3号墓 .....	(38)
第6章 クバ御嶽（オン）の調査 .....	(48)
第1節 調査の概要 .....	(48)
第2節 遺構 .....	(49)
第3節 遺物 .....	(52)
a. 陶器 .....	(52)
b. サンゴ石製香炉 .....	(58)
第7章 収束 .....	(72)

第8章 クバ御嶽（オン）の歴史・民俗学的位置づけ	(75)
--------------------------	------

## 久米島空港拡張建設計画予定地内の遺跡分布調査

第1章 調査に至る経緯	(91)
第2章 調査地の位置と環境	(94)
第1節 調査地の位置と自然環境	(94)
第2節 調査地周辺の遺跡	(96)
第3章 調査の内容と成果	(100)
第4章 北原貝塚のこれまでの調査とその概要	(104)
第5章 収束	(137)

## 新石垣空港建設計画予定地内の分布調査

### 挿図目次

第1図 新石垣空港建設計画予定地図(沖縄県土木建築部1990より)	(4)
第2図 石垣島東部から東南部における遺跡分布図	(7)
第3図 グリッド配置図と貝塚の範囲	(12)
第4図 土層図	(14)
第5図 石器実測図・1 (石斧)	(16)
第6図 石器実測図・2 (1 : 石斧未製品, 2 ~ 5 : 敷打器)	(17)
第7図 石器実測図・3 (石皿)	(18)
第8図 螺蓋製敲打器実測図	(19)
第9図 開元通寶拓影・実測図	(19)
第10図 古墓群の分布位置と空港（エプロン付近）建設予定地の範囲	(36)
第11図 第2号墓主体部内より得られた遺物	(37)
第12図〃 主体部西側より得られた遺物	(38)
第13図 第3号墓主体部内および周辺より得られた遺物	(39)
第14図 クバ御嶽（オン）実測図	(50)
第15図 陶器実測図・1 (1~3·5:花生け, 4·6:器種不明の袋物)	(53)
第16図 陶器実測図・2 (1 : 瓶子, 2 ~ 6 : 碗, 7 : 鉢 (小杯), 8 : 香炉, 9 : 無釉焼き締め陶器)	(55)
第17図 陶器実測図・3 (1 · 3 : 鉢, 2 : 瀬戸・美濃系? 小碗)	(57)
第18図 サンゴ石製香炉実測図・1	(59)
第19図 サンゴ石製香炉実測図・2	(60)
第20図 桃里村関連の地名	(82)
第21図 桃里村の移動と御嶽の移動	(84)

了状態) (東より) .....	(63)
22. クバ御嶽 (オン) 石積み検出作業光景 (南西部) (南より) 同上 (南東部) (東より) 同上 (西側部) (東より) .....	(64)
23. クバ御嶽 (オン) 石積み検出作業光景 (東北部) (南西より) 同上 (東側部) (北より) 同上 (西側部) (南東より) .....	(65)
24. クバ御嶽 (オン) 検出された石積み (南西部) (南東より) 同上 (西側ライ ン) (北より) 検出された階段状遺構 (東より) .....	(66)
25. クバ御嶽 (オン) 陶器・1 .....	(67)
26. クバ御嶽 (オン) 陶器・2 .....	(68)
27. クバ御嶽 (オン) 上: 陶器・3 下: 調査参加メンバー .....	(69)
28. クバ御嶽 (オン) サンゴ石製香炉・1 .....	(70)
29. クバ御嶽 (オン) サンゴ石製香炉・2 .....	(71)
30 a. 廃村時の桃里村跡地 (左側) (正面の道は水浜に通じる) .....	(75)
30 b. 廃村時の桃里村跡地 (背景は跡形もないペーフ山の方向) .....	(75)
31. 桃里村井戸 (廃村まで使用していた) .....	(76)
32. キタスクマンゲー山とふもとのトウの地形 .....	(81)
33 a. イン田跡 (背景の森山はアゴン山) .....	(83)
33 b. イン田跡 (左側の道は水浜に通じ、写真にない右側にはアゴン山があ る) .....	(83)
34. 浜から「クバ御嶽 (オン)」への入り口を望む .....	(86)

#### 久米島空港拡張建設計画予定地内の分布調査

##### 挿図目次

第1図 久米島空港拡張建設計画予定地図 (沖縄県土木建築部) .....	(92)
第2図 北原貝塚の現存範囲と周辺の地形図 .....	(95)
第3図 具志川村における遺跡分布図 .....	(98)
第4図 旧案を含めた拡張計画案と調査地点図 .....	(101)
第5図 I 地点出土遺物実測図 .....	(102)
第6図 第III (底) 層の柱穴 (ピアソン・リチャード他1990より) .....	(104)
第7図 出土遺物・1 (ピアソン・リチャード他1990より) .....	(105)
第8図 出土遺物・1 (ピアソン・リチャード他1990より) .....	(106)
第9図 土器実測図・1 (遺構内共伴) .....	(110)
第10図 土器実測図・2 (有文土器) .....	(111)
第11図 土器実測図・3 (包含層出土の甕形 (深鉢形) 土器) .....	(112)
第12図 土器実測図・4 (包含層出土の甕形 (深鉢形) 土器) .....	(113)

第13図 土器実測図・5 (包含層出土の甕形(深鉢形)土器) .....	(114)
第14図 土器実測図・6 (包含層出土の壺形土器(1~14)と 底部) .....	(115)
第15図 土器実測図・7 (包含層出土の底部) .....	(116)
第16図 土器実測図・8 (包含層出土の底部) .....	(117)
第17図 土器実測図・9 (包含層出土の底部) .....	(118)
第18図 土器実測図・10 (包含層出土の底部) .....	(119)
第19図 石器実測図・1 (石斧) .....	(120)
第20図 石器実測図・2 (敲石) .....	(121)
第21図 石器実測図・3 (敲石) .....	(122)
第22図 石器実測図・4 (敲石兼磨石(1~2)、石皿(3)) .....	(123)
第23図 石器実測図・5 (敲石兼磨石) .....	(124)
第24図 石器実測図・6 (敲石兼磨石) .....	(125)
第25図 石器実測図・7 (敲石兼磨石) .....	(126)
第26図 石器実測図・8 (クガニイン(1~3)、球状石器(4~6)) .....	(127)
第27図 貝符(貝礼)、イモガイ製礼状製品、巻貝製装飾品、 骨製品実測図 .....	(128)
第28図 ホラガイ製容器、ゴホウラ製貝輪の失敗品実測図 .....	(129)
第29図 ヤコウガイ製杓子状製品(1~5)、匙状製品(6~8) .....	(130)
第30図 螺蓋製敲打器実測図・1 .....	(131)
第31図 螺蓋製敲打器実測図・2 .....	(132)
第32図 貝製漁網錘実測図・1 .....	(133)
第33図 貝製漁網錘実測図・2 .....	(134)
第34図 貝製漁網錘実測図・3 .....	(135)
第35図 開元通寶実測・拓影 .....	(136)

## 図版目次

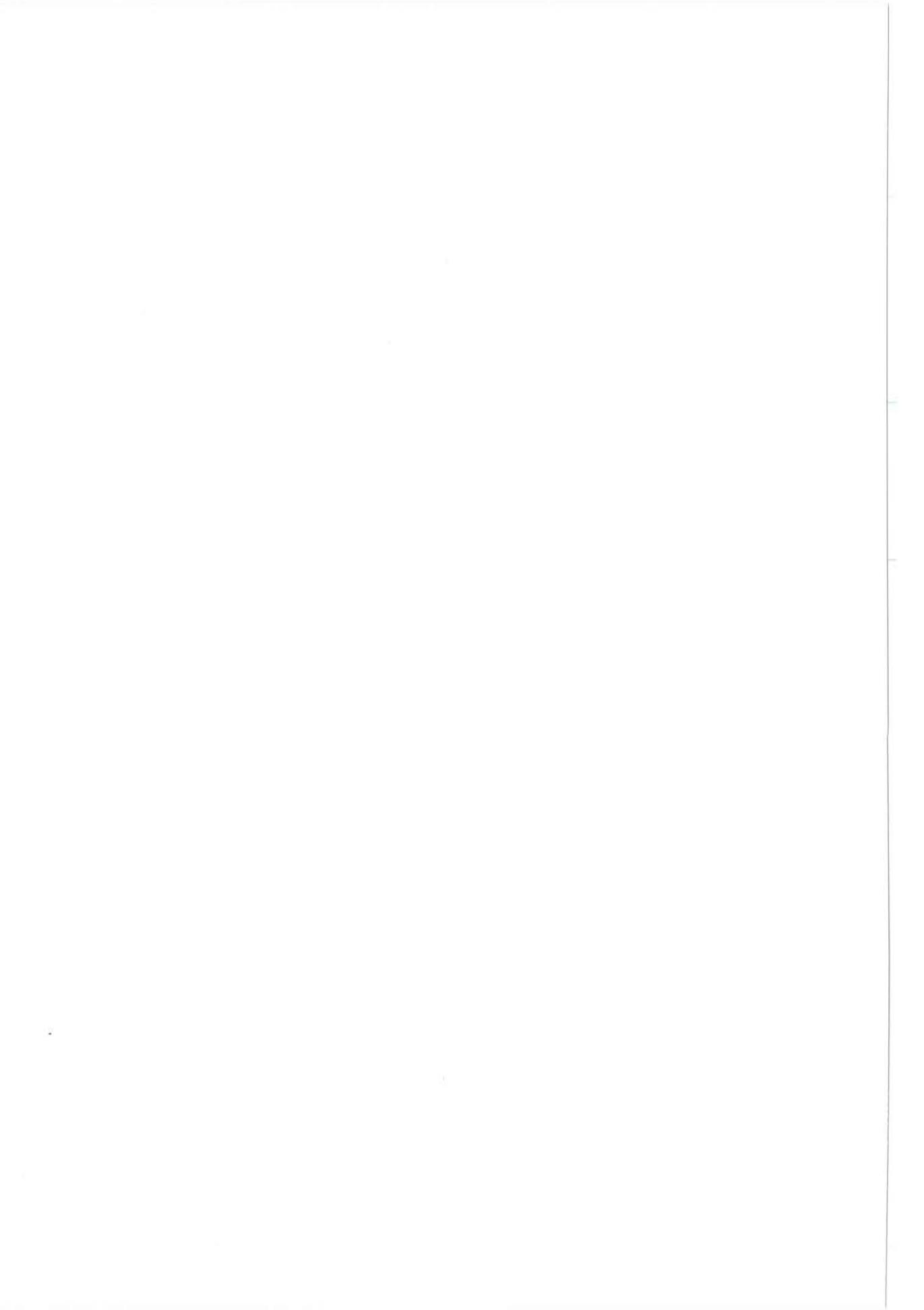
1. I 地点 近景(東より) 同上 試掘調査光景(北より) .....	(140)
2. I 地点 試掘穴・N0.3 東壁(西より) 試掘穴・N0.8 西壁(東より) 試掘穴 ・N0.9 南壁(北より) .....	(141)
3. I 地点 上:土器 下:貝類遺存体 .....	(142)
4. II 地点 近景(中央部のこんもりした部分が貝塚)(北東より) 試掘穴断面 同上 .....	(143)
5. III 地点 試掘穴断面 シライミ御嶽 .....	(144)

## 挿表目次

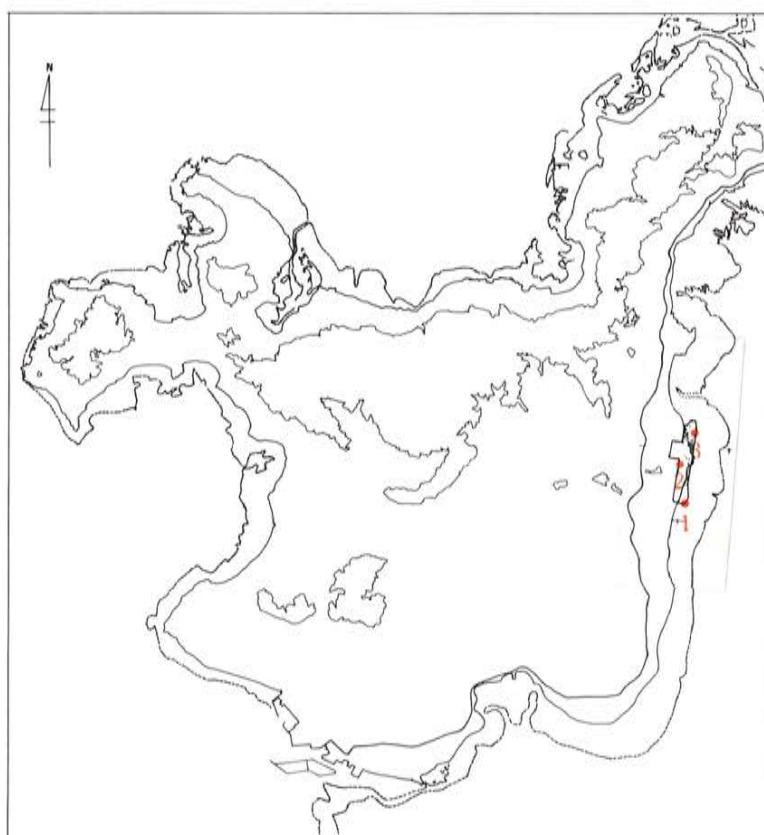
第1表 貝類組成表 ..... (23)

## 図版目次

1. 調査地遠景(南西より) 同上(西より) 同上(北西より) ..... (25)
2. 嘉良嶽貝塚 調査地遠景(北西より) 中央の白い部分一帯が貝塚 調査前の状況(西より) 同上(東より) 後方の山はカラ岳 ..... (26)
3. 嘉良嶽貝塚 調査前の状況(東より) 採砂によって破壊され、凹地となった部分(東より)(貝類などが散乱) 同上(東より) (貝類などが散乱) ..... (27)
4. 嘉良嶽貝塚 草刈り後の調査地(西より) 試掘調査光景(西より) 同上(西より) ..... (28)
5. 嘉良嶽貝塚 土層断面・1 土層断面・2 土層断面・3 ..... (29)
6. 嘉良嶽貝塚 土層断面・4 土層断面・5 土層断面・6 ..... (30)
7. 嘉良嶽貝塚 石斧 ..... (31)
8. 嘉良嶽貝塚 上: 敲石 下: 石皿 ..... (32)
9. 嘉良嶽貝塚 上: 1・螺蓋製敲打器、2・開元通寶 下: 3・イノシシ胫骨、4・ウシ上顎第2臼歯 ..... (33)
10. 嘉良嶽貝塚 上: 貝類遺存体・1(巻貝) 下: 貝類遺存体・2(二枚貝) ... (34)
11. 古墓群 調査地遠景(南西より) 同上(南西より) 同上(西より) ... (40)
12. 古墓群 調査光景(南西より) 同上(南西より) 同上(東より) ..... (41)
13. 古墓群 調査光景(南より) 同上(第2号墓周辺)(南西より) 同上(西より) ..... (42)
14. 古墓群 第1号墓(北より) 同上(南より) 同上(西より) ..... (43)
15. 古墓群 第2号墓(西より) 同上(東より) 同上(南より) ..... (44)
16. 古墓群 第3号墓(東より) 同上 同上 ..... (45)
17. 古墓群 第3号墓(西より) 同上(北より) 同上(南より) ..... (46)
18. 古墓群 上: 第2号墓(1・2 主体部内、3・4 主体部西側) 下: 第3号墓(主体部および周辺) ..... (47)
19. クバ御嶽(オン) 近景(西より) 溜め井?(北より) 踏査時に発見された花生け ..... (61)
20. クバ御嶽(オン) 散乱していたシャコガイ 踏査時に確認された石積み(東より) 同上(西より) ..... (62)
21. クバ御嶽(オン) 伐開作業光景(南より) 同上(南西より) 同上(ほぼ終)



# 新石垣空港建設計画 予定地内の遺跡分布調査



1 : 嘉良嶽貝塚 2 : 古墓群 3 クバノ御嶽（オン）



新石垣空港建設設計画予定地（写真提供：沖縄県土木建築部）

## 第1章 調査に至る経緯

石垣空港は、那覇、宮古、与那国、多良間、波照間の各路線に定期便が就航し、八重山諸島の航空交通の拠点として重要な役割を果している。

近年、海洋レジャー等を中心としたリゾートブームに伴い、県外から沖縄県への観光客は増加の一途をたどっている。また、地元住民の足や貨物輸送として、航空輸送の需要は年々増加傾向にあるようである。石垣空港においても例外でなく、資料に依れば、国内第3種空港の中で第一位の需要を誇っているらしい（沖縄県土木建築部1990）。

このようなことから、県では将来の輸送需要、輸送能力の増大に伴う八重山圏における諸産業の振興等の目的から、大型ジェット機対応の空港建設計画を進めてきた。計画にあたって、県当局は諸点から検討した結果、既存空港での拡張は不可能だと結論に至り、白保集落地先の海上を埋め立てて着工するという計画案が出されていた。その際、担当部局である県土木部は県教育委員会にて、計画地内における文化財の有無についての照会があった。県教育委員会（所管：文化課）では調査の結果、該計画は基本的に海上埋め立てであることより、海浜砂丘に立地する白保貝塚などの埋蔵文化財については支障ない旨解答した。

しかし、当該計画に対してはサンゴ礁の保全などを理由に国内外の学者や自然保護団体、地元住民等の反対運動が高まり、これが国際世論にまで発展し内外の注目を集めた。このようなことあってか、県は滑走路を2000mに短縮したのに続いて、1990年4月建設予定地を白保地区から北へ4km離れたカラ岳東地区に変更するという代替地案が打ち出された（第1図）。

新予定地の計画案（代替地案）の内容は陸地の削平約半分、海上埋め立て約半分となっており、陸地部分には周知の遺跡である嘉良嶽東貝塚などが含まれていた。そのため、県教育委員会（所管：文化課）では予定地内の文化財の分布調査を実施し、その範囲を明らかにして建設計画との協議資料に資するとともに、文化財の適切な保護措置を講ずる目的から、1989～”91年度の3年度にわたって予定地内の分布調査を行った。

調査組織は、次の通りである。

調査責任者 高良 清敏（沖縄県教育委員会教育長、1989～”90年度）  
津留 健二（ 同 上 、1991年度）

調査総括 宜保榮治郎（沖縄県教育委員会文化課課長）

上江洲 均	(同)	上	課長補佐、1989～”90年度)
知念 勇	(同)	上	課長補佐、1991年度)
安里 嗣淳	(同)	上	主幹兼埋蔵文化財係長、1989～”90年度)
大城 慧	(同)	上	埋蔵文化財係長、1991年度)
調査事務	伊佐 真一	(同)	上 課長補佐、1990～”91年度)
	仲里 哲雄	(同)	上 文化振興係長)
	新垣 昌頼	(同)	上 文化振興係主任)
	仲里 富代	(同)	上 文化振興係副主査、1989～”90年度)
	上間 尚子	(同)	上 文化振興係副主査、1989～”91年度)
調査指導	河原 純之	(文化庁文化財主任調査官)	
	渡辺 誠	(名古屋大学文学部教授・考古学)	
調査担当	盛本 熊	(沖縄県教育委員会文化課専門員)	
調査員	玉津 博克	(沖縄県教育委員会文化課充て指導主事)	
	当山 昌直	(同)	上 専門員)
	長嶺 均	(同)	上 臨任専門員、現専門員)
	城間千栄子	(同)	上 臨任専門員、1989年度)
	上地千賀子	(同)	上 臨任専門員、1990年度)
調査補助員	金城尚美・石本京子	(沖縄国際大学文学部社会学科考古学専攻生)	
調査協力者	石垣繁(八重山文化研究会会長)、石垣久雄(八重山歴史研究会)、大浜永亘(八重山文化研究会)、宮良松(石垣市宮良在住)、石垣市市史編纂室、沖縄県土木建築部空港課、沖縄県土木建築部新石垣空港建設事務所。		
調査作業員	(五十音順)		
	石垣雅之、久場島優子、佐事トヨ、崎原早苗、志喜屋八重、田場ハル、知念栄市、知念ハナ、津嘉山緑、中鉢良護、西石垣淳子、真地あかね、前石垣美和、又吉信雄、前加良シゲ、宮良富子、宮城とみ子、山口節、米盛恭子、米盛栄、米盛重弘。		

なお、資料整理および報告書作成にあたっては、下記のメンバーで行った。(五十音順)  
上原園子、大城勝江、我那覇悠子、城間千鶴子、照屋利子、当山慶子、外間瞳、仲宗根三枝子、盛本熊。



第1図 新石垣空港建設計画予定地図（沖縄県土木建築部1990より）

## 第2章 調査地の位置と環境

### 第1節 調査地の位置と自然環境

新石垣空港が建設計画されている場所は、沖縄県石垣市の市街地の東北方約13km一帯である。

石垣市は一島一市をなし、沖縄本島那覇市の西南方約430kmに位置する。島は、周囲89.89km、面積22.341km<sup>2</sup>で、略棍棒状を呈している。

島の地形は、山地と平地からなる。山地としては、北部に結晶片岩や火成岩で覆われた沖縄で最高峰の於茂登岳（525.5m）、北東部に野底岳（282m）、金武岳（218m）が聳え立っている。また西部には、川平半島の川平大岳および屋良部半島のタチ岳、崎枝大岳などの山々が連なっている。このような北東部から西南部にかけての山地形とは異なり、ほぼ中央以南および東部一帯は100～20m前後の琉球石灰岩の丘陵台地が緩傾斜をなして展開し、沖積平野へと移行している。そのためか、山岳地帯から丘陵台地および沖積平野を経て、海に注ぐ河川が多く認められる。

河川の主なものには宮良川、名蔵川、吹通川、通路川、浦川、轟川などがあり、これらの河川の周辺に多くの先史時代からスク（グスク）時代の遺跡がみられる。

新石垣空港の建設計画がある場所もカラ岳南東部の山麓に源を発した、小河川のスムジ川が東流して海に注いでいる。建設計画予定地は、このスムジ川付近を南端として北に延びた地点である。予定地最北端の北側の森林内にはウシノオン（拝所）が所在し、その東の海浜砂丘には自然湧水点（ミズハマ）があり、清水をとめどなく湧き出している。また、このミズハマから約650mほど南行したモクマオウやアダン、ススキなどが繁茂した防潮林内には、今回の調査で確認されたクバ御嶽（オン）が所在する。

調査地一帯はカラ岳の東部から東北部にあたり、カラ岳の東麓から延びてきた丘陵台地が海岸線に向けて緩傾斜をなしていき、海浜砂丘に移行していく地形をなす。このカラ岳東麓の緩傾斜をなして広がる丘陵台地上に近世の古墓群が分布している。

また、南端のスムジ川をはさんだ一帯から南へ延びる低砂丘地には、早稲田大学編年の八重山第一期（瀧口編1960）・安里嗣淳氏編年案の新石器時代後期（安里1987）に属する嘉良嶽貝塚が立地する（第2図）。該貝塚は、轟川の河口に立地する川尻貝塚の東側からスムジ川を挟んだ一帯に至るまでの砂丘地に形成された、地点貝塚のようである。貝塚の立地している一帯には、標高10～20mのコンターが走っている。

貝塚の大半はこれまでの無秩序な採砂や土壤改良（砂を取り出して土に入れ替える）などが行われ、すでに壊滅状態にある。わずかに空港建設予定地の南端ライン周辺、すなわちスムジ川の北側部分のみは旧地形をとどめ、比較的保存状態が良好である。

調査地一帯の現況は、わずかの耕作地を除いてカラ岳の裾野が広がっている一帯は、チガヤやススキなどが繁茂する草原をなす。また、東側部の海浜地帯はアダンやモンパノキやクサトベラ群落、ギンネム、ハスノハギリなどの海浜植物と、防潮林として植栽されたモクマオウ林が混交している（魚垣の会 1988）。

調査地前面の海は、珊瑚礁のへりの干瀬（ピー）と広いイノーが発達した裾礁をなし、その規模は日本最大といわれている（目崎1988）。このようなことから、先史時代以降海の幸は豊富であったことであろう。

## 第2節 調査地周辺の遺跡

新石垣空港建設予定地内に所在する遺跡の立地、あるいは往時の社会的背景を考える目的から、これまでに周知されている周辺の遺跡を概観してみたい。この場合、その範囲は空港建設予定地の北方に位置する通路川を北限とし、南端は白保集落あたりとする。

なお、この記述は大浜永亘氏の報告（魚垣の会1989）や、当真1972、当真・大城編1979などを参考にしながら、盛本自身の踏査メモをも加味して執筆した。

### 1. 桃里恩田（ペーフヤマ）遺跡

県指定史跡である。大里集落の北北東約1km、国道390号東側に所在する通称ペーフに立地するスク（グスク）時代の遺跡である。遺跡は、古生代石灰岩の小山・ペーフ山（標高40～50m）の頂部から南側斜面に形成されている。

付近一帯は採石場となり、遺跡の一部は破壊されてしまっているが、南側斜面地には保存良好な包含層がみられる（阿利・黒島編1982）。

### 2. 御嶽遺跡（ウシノオン）

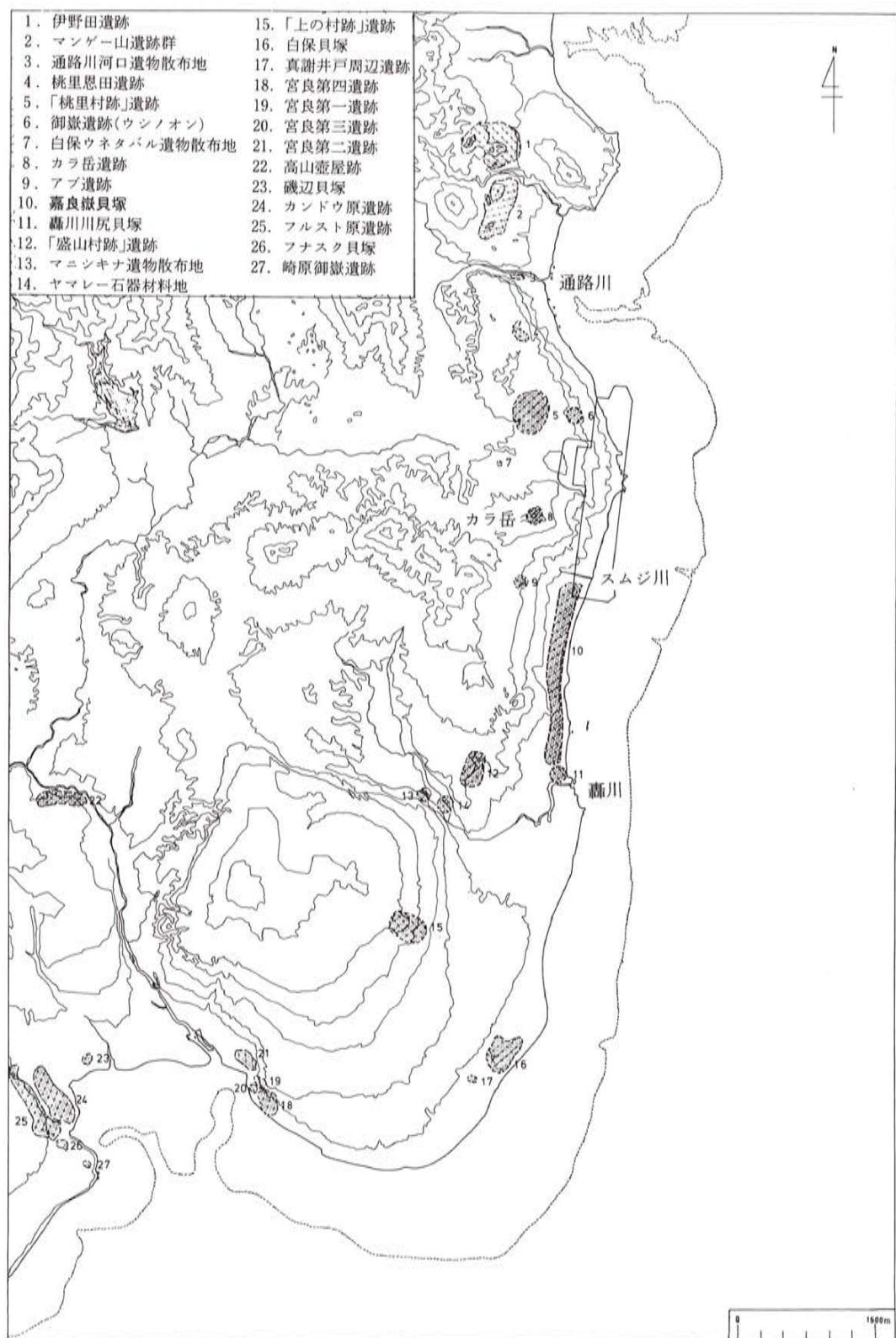
桃里・水浜の海岸寄りに、御嶽のイビだと思われる石積みの遺構がある。

### 3. 「桃里村跡」遺跡

桃里恩田（ペーフヤマ）遺跡の南東約500mに位置する、近世の集落跡である。文献記録によれば、村の創建は1732年に行われているが、1914年には廃村となっている。遺跡の現況は、チガヤやススキなどが繁茂する原野となっており、遺物の採集は困難である。

### 4. 白保ウネタバル石斧出土地

宮良川の上流、大里集落の南東約500mに位置するウネタバルの赤土の名蔵礫基盤層（標高35m）から畑地の開墾の際石斧が3点採集されている。採集地一帯において遺物包含層が確認されていないことより、祭祀遺跡かと推されている（当真1972）。



第2図 石垣島東部から東南部における遺跡分布図

## 5. カラ岳遺跡

カラ岳の頂上より微量の舶載陶磁器（中国製の青磁、白磁、褐釉陶器）などの破片が採集される。スク（グスク）時代（14世紀代～16世紀代頃まで）からの遠見台と思われる。

遺跡（カラ岳頂上：標高136m）に立つと、北方に平久保半島の東の海が、南には白保地先の海に至るまで一望できる。なお本遺跡に関して、近世の史料『八重山嶋年來記』の記録をもとに「このカラ岳もおそらく1644年段階には遠見台として設定されたものであろう」（津霸・上原編1990）としているが、上述のようにスク（グスク）時代の遺物が採集されることより、当該期まで遡って考えることも可能かと思う。

## 6. 轟川川尻貝塚

轟川川尻のモクモウ林から北側の畑にかけての低砂丘上に形成されている、八重山第一期（滝口編1960）・安里嗣淳氏編年試案の新石器時代後期（安里1987）の貝塚である。

復帰前の土地改良事業などの客土で埋められていたが、盆栽用の土取りや、採砂などで大部分が破壊された。壊滅寸前である。

## 7. 「もりやま 盛山村跡」遺跡

カラ岳の南方に所在する近世の集落跡である。記録によれば、1785年に村建てがなされるものの、32年後の1917年には廃村と化している。遺跡の現況は、ススキやチガヤなどが繁茂する草原となっていることから、遺物の採集は困難である。

## 8. ヤマレー石器材料地

轟川上流のウロンカーラからブーナカーラにかけて、緑色片岩の石材が手ごろに打剥されたものが採集される。

## 9. マニシキナ遺物散布地

スク（グスク）時代の遺物散布地である。轟川中流（マニシキナ）からは、鹿化石が発見されている（大塚・長谷川1973）。

## 10. 「上の村跡」遺跡

1771年に波照間島から強制移住させられた人たちの集落跡である。

## 11. 白保貝塚

白保集落北端の三又路付近の畑地を中心にして、北は採砂場から南は多原御嶽北側の採砂場あたりまでの砂丘上に形成されている貝塚である。

貝塚の現状は、採砂によって大部分が凹地と化し壊滅状態にある。魚垣の会 1989によれば、この新期砂丘中の埋没腐植土の放射性測定年代値は、B P 1330+85年であるという（資料採集：古川博恭琉球大学教授、測定：木越邦彦学習院大学教授）。そして、この年代値からして、貝塚を残した人々は、B P 1330+85年の新期砂丘形成後定住し、貝塚を形成したものと考えられると考察している。

多量の八重山式土器片と、少量の舶載陶磁器（中国製の青磁、白磁、褐釉陶器、須恵質のカム焼）などが採集される。また、本遺跡からは、染付や近世陶器などが採集されないことから、14世紀～15世紀にかけて形成された、スク（グスク）時代の遺跡と推される。

### 13. 白保「真謝井戸」遺跡（分布図番号17） まじゃんがー

白保集落内の真謝井戸付近から、嘉手苅御嶽の境内に至る石灰岩の風化層（マージ）に形成されている。明確な遺物包含層は確認できないものの、一帯からは八重山式土器や青磁、白磁、褐釉陶器などの輸入陶磁器などが採集される。その他に、有田や伊万里などの九州産の陶磁器、湧田焼や壺屋焼などにみられる灰釉、白釉陶器などもみられる。また、地元・八重山産かと推される無釉焼き締め陶器もみられる。

しかし、集落内であるゆえか、遺跡の保存状態は必ずしも良好とはいえず、採集遺物も小片のみである。採集遺物からして、15世紀前後～近世あるいは現代につながる集落とみられる。

## 第3章 調査の経過

調査は三次にわたる主調査と、それらの補足調査、というかたちで行なった。

第一次調査は、1989年8月28日～9月15日までの延べ19日間である。該調査では、周知の遺跡である嘉良嶽東貝塚の範囲確認調査と、予定地内南半部の踏査を行った。

調査の結果、予定地内における嘉良嶽貝塚の範囲は、最南端のスムジ川を南限とし、本来長D字形状をなしていたようである。しかし、その東側部は地主による採砂により破壊されて、凹地となり、貝類を多量に含んだ黒褐色砂の遺物包含層が散乱していた（図版三）。試掘による範囲確認調査の結果、残存部における範囲は第3図に示すような不正形をなし、その面積は約2700m<sup>2</sup>である。

踏査では、調査員2～3人で予定地南半域部をしらみ潰しに歩いて行った。その結果、駐機場（エプロン）が計画されている、予定地のほぼ中央部西端付近（カラ岳の南東裾部の緩傾斜をなした台地部）で、近世に属すると思われる古墓を一基発見した。

第二次調査は、1990年2月26日～3月16日までの延べ19日間である。該調査では、第一次調査時に発見した、古墓の調査と予定地北半域の踏査を主に行なった。古墓の所在する地点は、かつて牧場として利用されていたためか（現在でも、若干行われている）、ススキやチガヤなどが繁茂しており、作業の主体はそれらの伐開であった。また、この作業と並行して、かつての牧場主や周辺の地主などへの聞き取り調査を実施し、追加確認を行なった。その結果、新たに二基を追加確認し、後半はそれらの実測作業を行なった。

また、該調査時の後半に実施した北半域の踏査では、聞き取り調査などを基に予定地北端寄りに石積み遺構（地元、白保の住民が称しているクバ御嶽（オン））の所在を確認した。このため、該石積み検出のための伐開作業に着手したが、予想外に広範囲に延びてないことや、海浜植物のアダンや雑木、ススキなどが繁茂し作業が思うようにはかどらなかったこと、前述の古墓の調査終了後で期間が短かったことなどから、一部を終了させたのみで、その大くは次回の調査に委ねることにした。

第三次調査は、1990年8月13日～9月7日までの延べ26日間である。該次の調査主眼は、第二次調査で終了し得なかったクバ御嶽（オン）の伐開作業を完了させ、全貌を明らかにし、その範囲と性格を把握することであった。そのため、作業の主体は、伐開と石積みの根石の検出、および実測調査であった。その結果、石積みは第14図に示すように南北に延びた楕円形状をなすことが明らかになった。このクバ御嶽（オン）の性格やその位置づけについては、調査を補助していただいた中鉢良護氏（琉大民俗研究クラブOB）が検討を重ねた結果、『八重山島由来記』にみられる仲夢御嶽（オン）であろうとの結論に至っている。

## 第4章 嘉良嶽貝塚の試掘調査

### 第1節 調査の概要

第3章の「調査の経過」でも述べたように、カラ岳東貝塚の試掘調査は1989年8月28日～9月15日までの延べ19日間にわたって行った。

試掘調査を実施した地域は、新空港建設予定地の最南端部付近にあたる地点である。その地籍と調査面積は、下記の通りである。

石垣市白保 1960-175番地  $72\text{ m}^2$   
〃 〃 1960-181番地  $20\text{ m}^2$

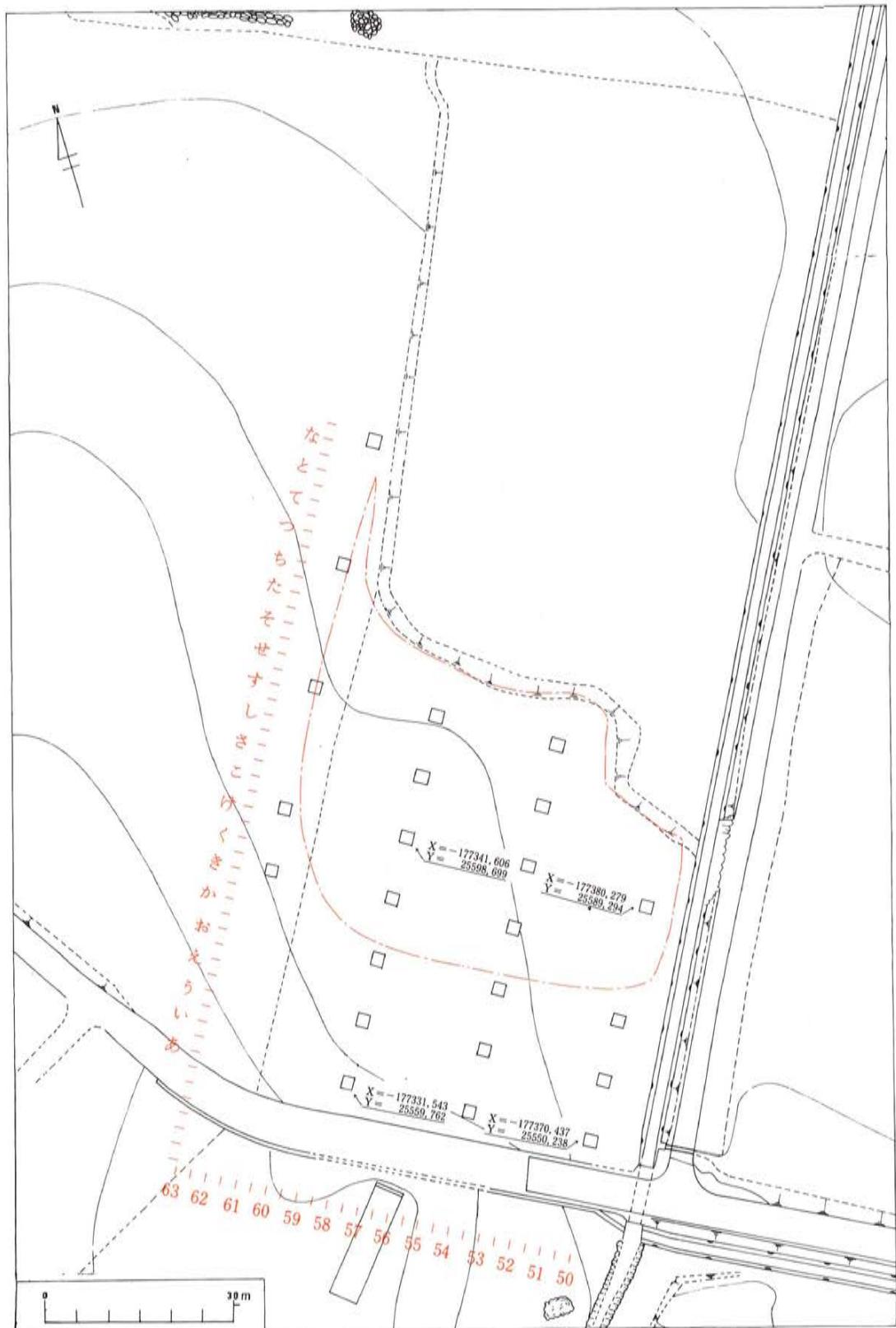
作業は、調査対象地が荒撫地および放置された砂糖キビ畑であったことより、その草刈作業を先行させ、次いでグリッド設定を行った。この草刈作業の際、えー55グリッド付近で、本章「第3節 出土遺物 a. 石器」で記している、略長方形状を呈した大型の石皿を採集した。

グリッド設定は、面積の大きい1960-175番地のスムジ川に沿った東西ラインを50ラインとし、これと直角に交差させるかたちで西側の道路際ラインをひらがなあラインとした。この点を基点として、4m四方のグリッドを対象地全域に組んだ（第3図）。

この結果、東西に50～63列、南北にあ～な列を設定し、各グリッドはこれらの算用数字とひらがなを組み合わせて用いることにした。そして、各々のグリッド名は、西北隅の交点で表した。

その後、基本的な堆積層を確認するためにあ-50、さ-50、あ-54、さ-54、た-60グリッドをテストピットとして基本土層の堆積状況を把握した。その結果、すでに採砂によって破壊されてしまっている東側部寄りでは遺物包含層の堆積が厚く、陸奥側に行くにしたがって漸次その厚みを減じていっていることが判った。また北側部については、1960-181番地の畠地の65～66ラインのグリッドには砂層の堆積がほとんど延びておらず、約20～30cm前後を掘り下げると、すぐに地山の赤土あるいは白砂層に達した。このようなことから、貝塚の広がりは1960-175番地を中心になるものと予測し作業を進めた。

試掘作業の全体進め方としては、面積の大きい1960-175番地の道路側の試掘穴を先行させ、しだいに東側へと移って行った。そして、最後に1960-181番地部分の調査を行った。



第3図 グリッド配置図と貝塚の範囲

## 第2節 層序

本貝塚の堆積層序は、第4図に示したように、基本的には基盤の白砂および土混じりの黄褐色砂層も含めて3枚に区分される。

しかし、調査区全域で同様な堆積状況を示しているわけではない。すなわち、調査区の東側部分（海岸側）では砂層の堆積が厚くなっていき、枝サンゴなどを含むのに対し、西側（陸奥側）に行くに従って、砂層の堆積は漸次厚みを減じ、その基盤も礫や土混じりの黄褐色砂層を呈していく様相を示す。このことは、一帯の基盤の地形が砂丘と旧陸地との境界ラインにあたることを示している。すなわち、かへきライン以西あたりまではかつて旧陸地の縁辺部をなし、その上に海砂が被覆し砂層を形成したようである。しかし、このラインは直線的ではなく、64ラインに沿ったあたりの基盤は赤褐色のマージ土をなしていることより、スムジ川と今回の調査地点の間は緩やかに湾入した入り江状になっていたものと推考する。

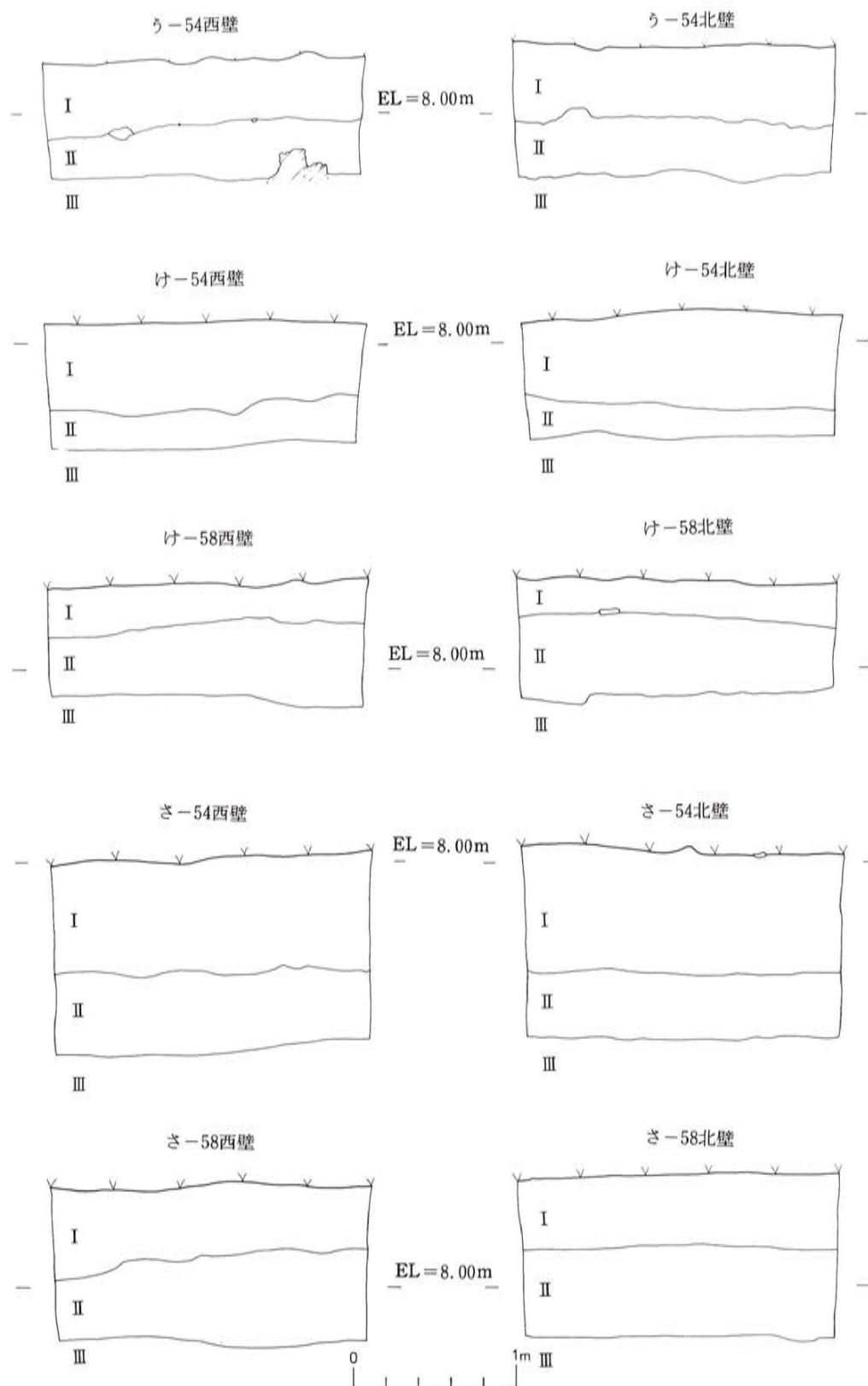
以下、各層について概述する。

I層—表土層である。調査地の大半は、荒撫地となっている。全体として、比較的硬く締まった土層をなすが、北側部分の放置された砂糖キビ畑は耕作によって頻繁に耕されたためか、比較的締まりが弱く、フワフワしている。

層厚は、薄いところで20~30cm、厚いところでは70~80cmを測る。西側の道路寄りの部分には若干の客土もみられる。遺物はほとんど含まないが、まれに現代陶磁器が見られたり、八重山式土器の底部が2片得られている。

II層—黒褐色砂層で遺物包含層である。採砂によって破壊された東側寄りでは、保存状態も良好で層厚も比較的厚いのに対し、西側に行くに従って土色もしだいに黄色みがかかった黒褐色を呈す。そして、西側寄りに行くに従ってほとんど遺物の出土はみられなくなるとともに、礫混じりの層へと変わっていく。

III層—基盤層である。上記したように、その土質は調査区の東側（海岸側）と西側（陸奥側）では違いがみられる。すなわち、かへきラインあたりを境にして、その以東は枝サンゴなどを含んだ白砂層をなすが、以西では礫を混じた黄褐色砂層を呈す。



第4図 土層図

### 第3節 遺物

#### a. 石器

石器には石斧、石皿、敲打器がある。このうち、第7図5の敲打器、1点のみが出土品で、他は表面採集品である。以下に、概述する。

##### 石斧（第5図・第6図1）

計6点がある。これらは、いずれも大浜永亘氏（八重山文化研究会）によって表採されたものである。

これらの石材について、神谷厚昭氏に同定していただいたところ、その特徴によって3タイプほどに分類可能であるが、いずれも同一系統の岩石で、石垣島内のトムル層の緑色片岩であるとの御教示を得た。

これらは、いずれも所謂局部磨製石斧に属するものである。

第5図1は、完形品である。標品は、平面觀が短冊形を呈し、両刃をなす。表裏面とも比較的広い範囲にわたって、入念な研磨が行われており、表面の刃部は弱い稜をなすほどにシャープである。最大長12.8cm、最大幅7.5cm、最大厚2.8cm、重量470gを測る。

2は、頭部の一端を欠失する。平面觀は短冊形を呈し、片刃的両刃をなす。研磨は刃部付近のみに限られ、基部上半部から頭部にかけては整形時のままである。最大長8.2cm、最大幅4.3cm、最大厚2.0cm、重量120gを測る。

3・4も、完形品である。3は、基本的には平面觀が短冊形をなすものの、右側縁上部付近には緩やかな抉りを有す。基部の断面形状は、不正な三角形状を呈す。研磨は、表面の刃部付近と裏面の刃縁付近、および基部の部分的に見られる。最大長9.0cm、最大幅4.8cm、最大厚2.6cm、重量151.5gを測る。

4は、自然礫を用いたものである。標品は、ほぼ現形の自然礫に刃のみを作出しただけのものである。表面は、刃をかなり意識して作出しているものの、裏面は刃縁端に若干の研磨を施したのみである。最大長9.0cm、最大幅4.75cm、最大厚1.1cm、重量85gを測る。

5は、頭部を欠失する。その形態は、断面形が略三角形を呈する特徴のある石斧である。研磨は、表面は刃部付近のみにかぎられるものの、裏面は部分的ではあるが基部までにおよんでいる。最大長9.5cm、最大幅2.8cm、最大厚1.75cm、重量65gを測る。

第6図1は、母岩から打ち欠きによって得られた剥片を石斧の形に整形しているものの、研磨工程は行われておらず製作途上品とみられる。下端部と上端部の両端を薄く仕上げていることより、あるいは上下端の両方に刃を意識した、上下両刃の石斧になるタイプかも知れない。最大長14.6cm、最大幅5.1cm、最大厚1.95cm、重量200gを測る。



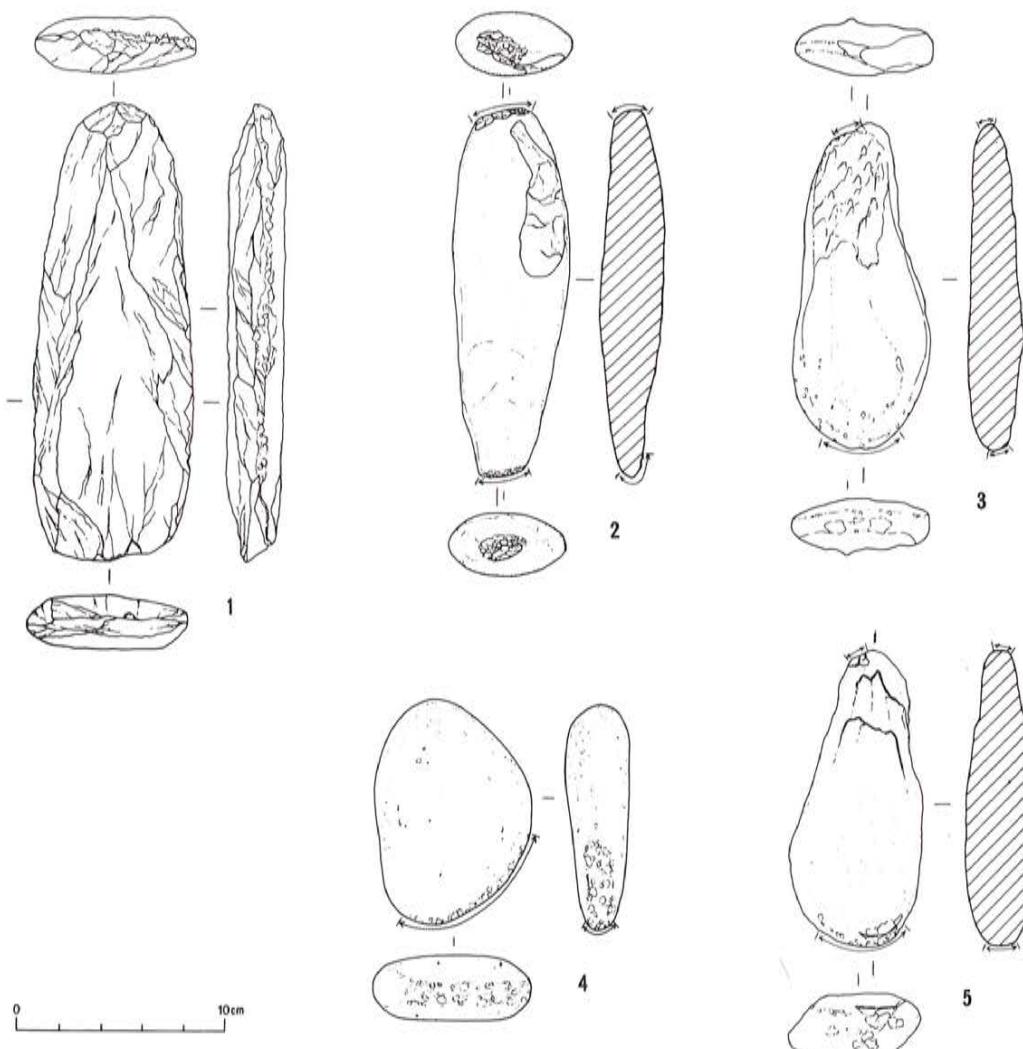
第5図 石器実測図・1 (石斧)

### 敲石（第6図2～5）

4点の出土がある。いずれも、不正な長楕円もしくは楕円形状で、概して偏平な礫の長軸の両端、あるいは一端にアバタ状の潰れ痕を有するものである。

第6図2は、偏平な長楕円形状の礫を使用している。素材の上下端部にアバタ状の潰れ痕を有する。潰れ痕は、略円形状にアバタ状の潰れが連続して形成されている。最大長11.85cm、最大幅3.75cm、最大厚2.0cm、重量130gを測る。石材は、トムル層の緑色片岩である。表採品である。

3は、平面形が乳棒状を呈した偏平の礫を使用している。素材の下端部のみに使用痕を有するが、素材からくる特質からか、潰れはアバタ状をなさず2～3箇所において剥離しているのみである。最大長10.4cm、最大幅4.4cm、最大厚1.8cm、重量100gを測る。石



第6図 石器実測図・2 (1: 石斧未製品, 2～5: 敲打器)

材は、トムル層の緑色片岩である。表採品である。

4も、礫形態は3とほぼ類似する。標品も潰れは明瞭でなく、部分的にアバタ状を呈する以外、若干の剥離痕を有する。最大長9.4cm、最大幅4.2cm、最大厚1.1cm、重量110gを測る。石材は、トムル層の緑色片岩である。表採品である。

5は、平面形態が略D字形状を呈する偏平礫を使用している。下端部から右側縁下方部にかけて、アバタ状の連続した潰れ痕を有す。さ-60、II層の出土である。石材は、野底層の安山岩である。

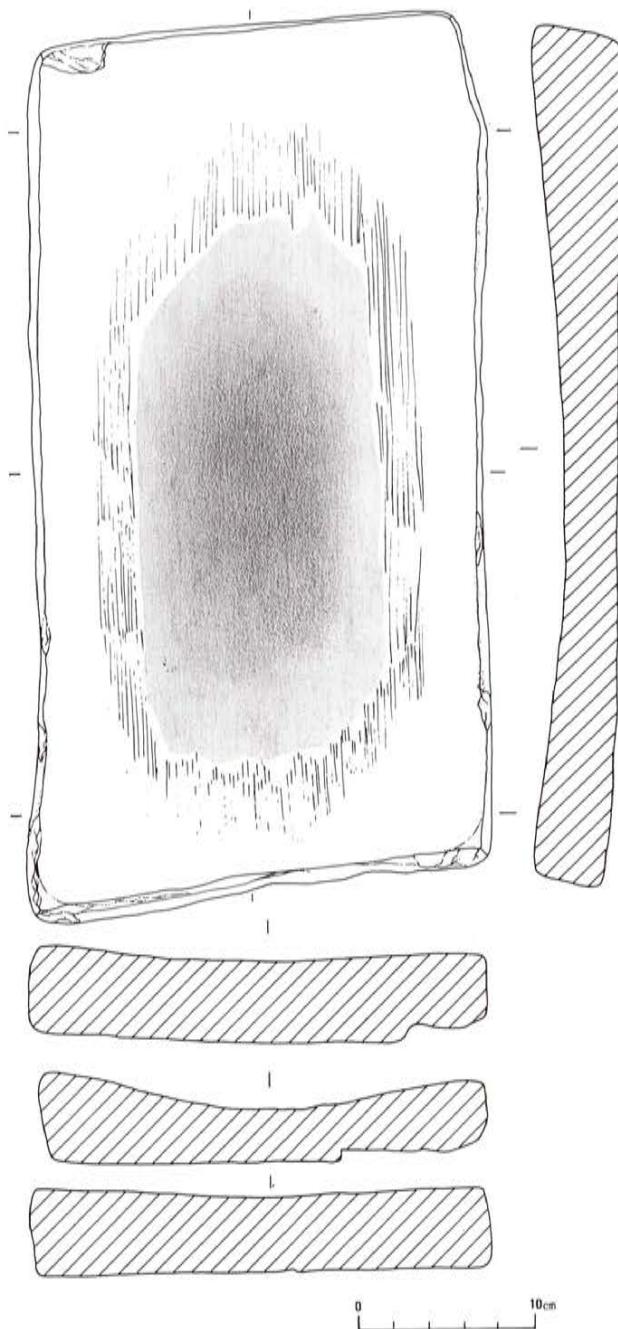
#### 石皿（第7図）

試掘調査前の草刈り作業の際、調査区のえ-55グリッド付近にて、採集されたものである。

標品は、平面形が長方形状を呈した偏平な板状の素材を使用している。全体として、周辺部がわずかな高まりをなし、しだいに中央部付近に向けて緩やかに凹んでいく形態をなす。

最大長53.3cm、最大幅26.55cm、厚さ5.25cm、重量14.5kgを測る。

石材は、宮良層の砂岩である。



第7図 石器実測図・3（石皿）

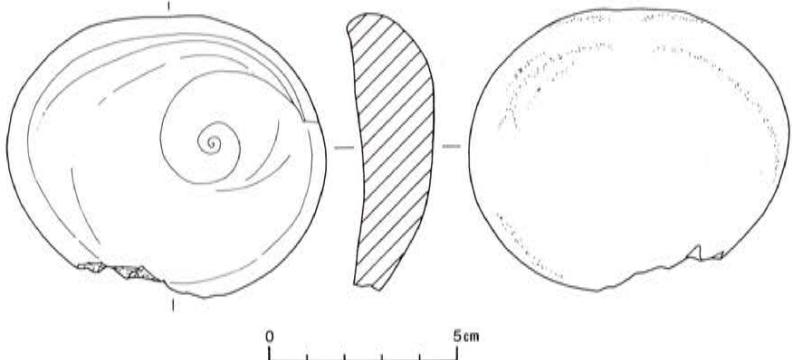
### b. 貝製品（第8図）

貝製品は、1点のみの出土である。螺蓋（ヤコウガイの蓋）の下方の薄い縁辺部周辺に、剥離痕を有した螺蓋製敲打器である。標品は、素材の原形をとどめ下端部に2～3回の打撃による剥離痕がみられるだけのタイプで、筆者が清水貝塚の報告書（盛本編1989）で行った分類に従うと、I類に属するものである。

法量は、長さ

7.4cm、幅8.5  
cm、厚さ2.1cm、  
重量190gを測  
る。

I-55、I層  
出土。



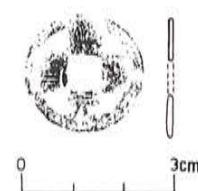
第8図 螺蓋製敲打器実測図

### c. 開元通寶（第10図）

調査地東側の採砂によって破壊され、凹地になった部分から大浜永亘氏（八重山文化研究会）によって採集されたものである。

標品は摩滅が著しく、特に表面は研磨を施したようで、若干の光沢さえみられる。このため、「元」と「寶」の下位の「貝」の字が辛うじて判読可能くらいで、他の文字は全く判読不可能である。

法量は、直径2.4cm、厚さ1mm、重量4.2gを測る。



第9図 開元通寶  
拓影・実測図

#### d. 動物遺体

動物遺体には、目録に示した貝類と哺乳類がある。これらの動物遺体には、Ⅱ層の遺物包含層より他の遺物と伴出したものと、Ⅰ層の表土・攪乱層より得られたものがある。

以下に、出土動物遺体の種名の目録を示し、その内容について略述する。

#### 嘉良嶽東貝塚出土動物遺体目録

#### I. 軟体動物門 MOLLUSCA

a. 腹足綱 POLYPLACOPHORA	
1. ニシキウズガイ <i>Trochus maculatus</i> ( LINNÉ )	<i>Pleuroplaca trapezium</i> ( LINNÉ )
2. サラサバティ <i>Tectus (Rochia) nloticus</i>	<i>Vasum turbinellum</i> ( LINNÉ )
<i>maximus</i> ( PHILIPPI )	17. コオニコブシガイ 18. アンボンクロザメ
3. ヤコウガイ <i>Lunatica marmorata</i> ( LINNÉ )	<i>Lithoconus litteratus</i> ( LINNÉ )
4. チョウセンサザエ <i>Marmorostoma argyrostoma</i> ( LINNÉ )	19. ヤナギシボリイモガイ <i>Rhizoconus miles</i> ( LINNÉ )
5. オニノツノガイ <i>Cerithium nodulosum</i> BRUGUIERE	20. イボシマイモガイ <i>Virgiconus lividus</i> ( HWASS )
6. トウガタカニモリガイ <i>Ochetoclaua Sinensis</i> ( GMELIN )	21. アジロイモ <i>Darioconus praelatus bruguiere</i>
7. マガキガイ <i>Conomurex luhuanus</i> ( LINNÉ )	22. ニシキミナシガイ
8. クモガイ <i>Lambis lanbis</i> ( LINNÉ )	<i>Strioconus striatus</i> ( LINNÉ )
9. ネジマガキガイ <i>Gibberulus gibberulus gibbosus</i> ( RÖDING )	23. クロフモドキ <i>L.litteratus pardus</i> ( RÖDING ) 24. タケノコガイ <i>Terebra subulaia</i> ( LINNÉ )
10. リスガイ <i>Mammilla opaca</i> ( RECLUZ )	25. ベニタケガイ <i>Subula dimidata</i> ( LINNÉ )
11. ホシダカラガイ <i>Cypraea tigris</i> ( LINNÉ )	
12. ホシキスタガイ <i>Ponda Mystaponda ritellus</i> ( LINNÉ )	b. 斧足綱 PELECYPODA
13. ヤクシマダカラガイ <i>Arabica arabica</i> ( LINNÉ )	1. リュウキュウサルボウガイ <i>Anadara antiquata</i> ( LINNÉ )
14. コモンダカラガイ <i>Erosaria erosa</i> ( LINNÉ )	2. ベニエガイ
15. タルダカラガイ <i>Talparia talpa</i> ( LINNÉ )	<i>Barbatia(ustularca)bicolorata</i> ( DILLWYN )
16. イトマキボラ	3. オオタカノハガイ <i>Arca ventricosa</i> LAMARCK

4. チサラガイ <i>Gloriopallium pallium</i> (LINNÉ)	15. リュウキュウシラトリガイ
5. シレナシジミ <i>Geloina papua</i> (LESSON)	<i>Quidnipagus palatum</i> (IREDALE)
6. ウラキツキガイ <i>C. paytenorum</i> (IREDALE)	16. モチズキザラ <i>Cyclotellina remies</i> (LINNÉ)
7. シラナミガイ <i>Tridacna (vulgiodacna)</i> (RÖDING)	17. サメザラガイ <i>Scutarcopagia scobinata</i> (LINNÉ)
8. シャゴウ <i>Hippopus hippopus</i> (LINNÉ)	18. リュウキュウサラガイ <i>Peronidia venulosa</i> (SCHRENCK)
9. ヒメジャコガイ <i>Tridacna (Chametrachea)</i> <i>crocea</i> (LAMARCK)	
10. カワラガイ <i>Fragum unedo</i> (LINNÉ)	II. 脊椎動物門 VERTEBRATE
11. リュウキュウザルガイ <i>Vasticardium burchardi</i> (DUNKER)	a. 哺乳綱 Mammalia
12. オオヒシガイ <i>Fragum fragum</i> (LINNÉ)	1. 偶蹄目 Oder Aetiadactyla
13. ホソスジイナミガイ <i>Gafraium pectrinatum</i> (LINNÉ)	a. イノシシ科 Family Suidae リュウキュウイノシシ
14. マルオミナエシガイ <i>Lioconcha castrensis</i> (LINNÉ)	Sus lemcomystax riukiuanus b. ウシ科 Family Bovidae

### 1. 貝類

貝類は、リストに示したように、腹足綱（巻貝）10科25種、斧足綱（二枚貝）8科18種を同定し得ている。

なお、これらの最小個体数の算出にあたっては、下記の基準で行った。

腹足綱—殻頂部を有するものと、個体の三分の二以上残存しているものを、1個体とみなした。また、ヤコウガイやチョウセンサザエなどのようにリュウテンザザエ科の仲間で、その蓋においても種の同定が可能なものについては、両者（殻と蓋）のうちで数値の多いほうを最小個体数とした。

斧足綱—殻頂部を左右に分け、数値の多い方を最小個体数とした。

これ以外に、これらの条件を満たさない小片の破片でも、同一層において1点しか得られていない場合は、1個体として扱った。

第1表からも明らかなように、その種類数においては腹足綱（巻貝）が優位を占めているのに対し、逆に個体数では斧足綱（二枚貝）が多数を占めていることが判る。

ただ、これらを層位別にみた場合、遺物包含層であるⅡ層の出土は30点のみと極めて少なく、その圧倒的多数がⅠ層（160点）出土である。Ⅱ層では、半数以上を占め、目だっているのがヒメジャコガイである。Ⅰ層は、第2節の層序でも述べたように、近世陶器なども混じり、攪乱を受けていることから、そのデータは本貝塚の貝類遺存体の特徴を捉

えるものとしては信頼性が薄い。

棲息別では、汽水産と鹹水産に限られる。これらを、さらに海岸地形の区分によってみてみると、潮間帯下・岩礁、潮間帯・岩礁、潮間帯の岩礫底、浅海・砂底などに棲息する種が多い。

そして、貝種別を見た場合、潮間帯下の岩礁に棲息するヒメジャコガイが 53 % (II 層)、65 % (II 層) と圧倒的多数を占めている。また、II 層での他種は 3.3 ~ 6.6 % と極少である。参考までに I 層を見てみると、ヒメジャコガイに次ぐのは、同じシャコガイ科のシャゴウ (潮間帯・珊瑚礁に棲息) 8.1 % やンラナミガイ (潮間帯・珊瑚礁に付着) 4.4 %、マルオミナエシガイ 4.4 % などが優位を占めている。

このようなことからして、食料としての主対象はほぼこれらに限定されていたものと思われる。

## 2. 哺乳類

### a. イノシシ

リュウキュウイノシシの右脛骨 1 点のみが出土している。標品は、近位部を欠失している。は - 65 • 第 I 層出土。

### b. ウシ

上顎第 2 臼歯が 1 点出土。こ - 65 • I 層出土。

第1表 貝類組成表

種名 数・%	層位		I		II		棲息地
	数	%	数	%	数	%	
腹	ニシキウズガイ	5	3.1	0	0	0	潮間帶下の岩礁
	サラサバティ	6	3.8	1	3.3	3.3	潮間帶付近の岩礁
	ヤコウガイ	0	0	1	3.3	3.3	浅海・岩礁
	〃のフタ	6	3.8	1	3.3	3.3	〃
	チヨウセンサザエ	2	1.3	0	0	0	潮間帶下の岩礁
	オニノツノガイ	1	0.6	0	0	0	潮間帶下の岩礁
	トウガタカニモリガイ	1	0.6	0	0	0	潮間帶の砂礫底
	マガキガイ	8	5.0	1	3.3	3.3	潮間帶下水深20mの砂礫
	クモガイ	1	0.6	1	3.3	3.3	潮間帶下の砂礫底
	ネジマガキガイ	2	1.3	0	0	0	潮間帶下の砂地
足綱	リスガイ	2	1.3	0	0	0	水深10~30mの砂底
	ホシダカラガイ	0	0	1	3.3	3.3	潮間帶の岩礁
	ホシキヌタガイ	1	0.6	0	0	0	潮間帶下の岩礁
	ヤクシマダカラガイ	2	1.3	1	3.3	3.3	潮間帶下の岩礁
	コモンダカラガイ	1	0.6	0	0	0	潮間帶付近の岩礁底
	タルダカラガイ	0	0	1	3.3	3.3	潮間帶付近の岩礁
	イトマキボラ	1	0.6	0	0	0	潮間帶下の岩礁
	コオニコブシガイ	1	0.6	0	0	0	潮間帶の岩礁
	アンボンクロザメガイ	1	0.6	0	0	0	〃
	ヤナギンボリイモガイ	1	0.6	0	0	0	潮間帶下の岩礁
	イボシマイモガイ	1	0.6	0	0	0	潮間帶下の岩礁

腹 足 綱	アジロイモガイ	1	0.6	0	0	
	ニシキミナシガイ	1	0.6	0	0	潮間帯～水深10mの砂底
	クロフモドキ	2	1.3	1	3.3	潮間帯の岩礁
	タケノコガイ	1	0.6	0	0	浅海の砂底
	ベニタケガイ	1	0.6	0	0	〃
斧 足 綱	リュウキュウサルボウガイ	4	2.5	0	0	浅海の砂底
	ベニエガイ	0	0	1	3.3	潮間帯の岩礫地
	オオタカノハガイ	1	0.6	0	0	潮間帯下の岩礫底
	チサラガイ	1	0.6	0	0	潮間帯の岩礁に付着
	シレナシジミガイ	1	0.6	1	6.7	マングローブの泥地
	ウラキツキガイ	1	0.6	0	0	潮間帯より20mの砂底
	シラナミガイ	7	4.4	0	0	潮間帯の珊瑚礁に付着
	シャゴウ	13	8.1	1	3.3	潮間帯下の珊瑚礁
	ヒメジャコガイ	65	40.6	16	53.3	潮間帯下の岩礁
	カワラガイ	3	1.9	0	0	浅海の砂底
	リュウキュウザレガイ	1	0.6	0	0	潮間帯下の砂や小石の海底
	オオヒシガイ	1	0.6	0	0	浅海の砂底
	ホソスジイナミガイ	3	1.9	0	0	〃
	マルオミナエシガイ	4	2.5	0	0	〃
	リュウキュウウンラトリガイ	0	0	1	3.3	〃
	モチズキザラ	3	1.9	0	0	潮線下
	サメザラガイ	2	1.3	0	0	浅海の砂底
	リュウキュウサラガイ	1	0.6	0	0	〃
合 計		160	99.9	30	99.6	

調査地遠景  
(南西より)



同上  
(西より)



同上  
(北西より)



調査地遠景  
(北西より)  
中央の白い部分一帯が貝塚



調査前の状況  
(西より)



同上  
(東より)  
後方の山はカラ岳





調査前の状況  
(東より)



採砂によって破壊され、  
凹地となった部分  
(東より) (貝類などが散乱)



同上  
(東より)  
(貝類などが散乱)



草刈り後の調査地  
(西より)



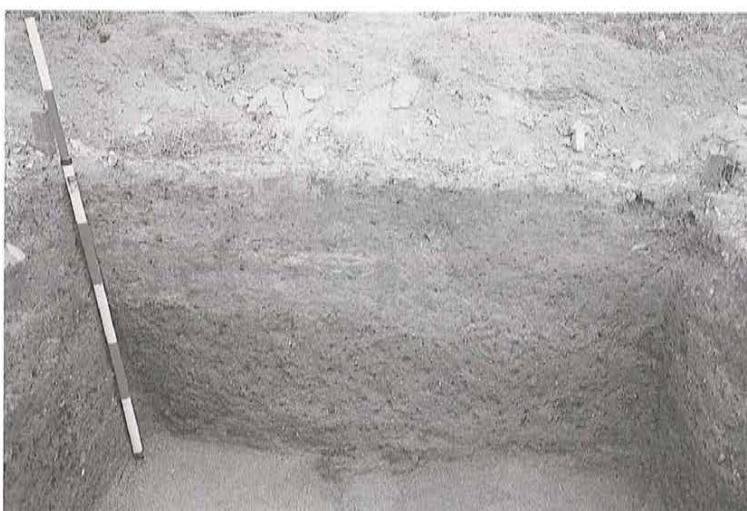
試掘調査光景  
(西より)



同上  
(西より)



土層斷面・1



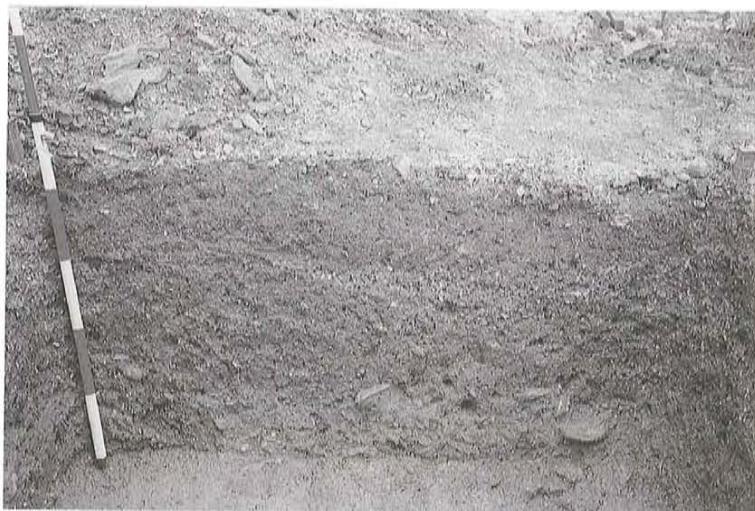
土層斷面・2



土層斷面・3



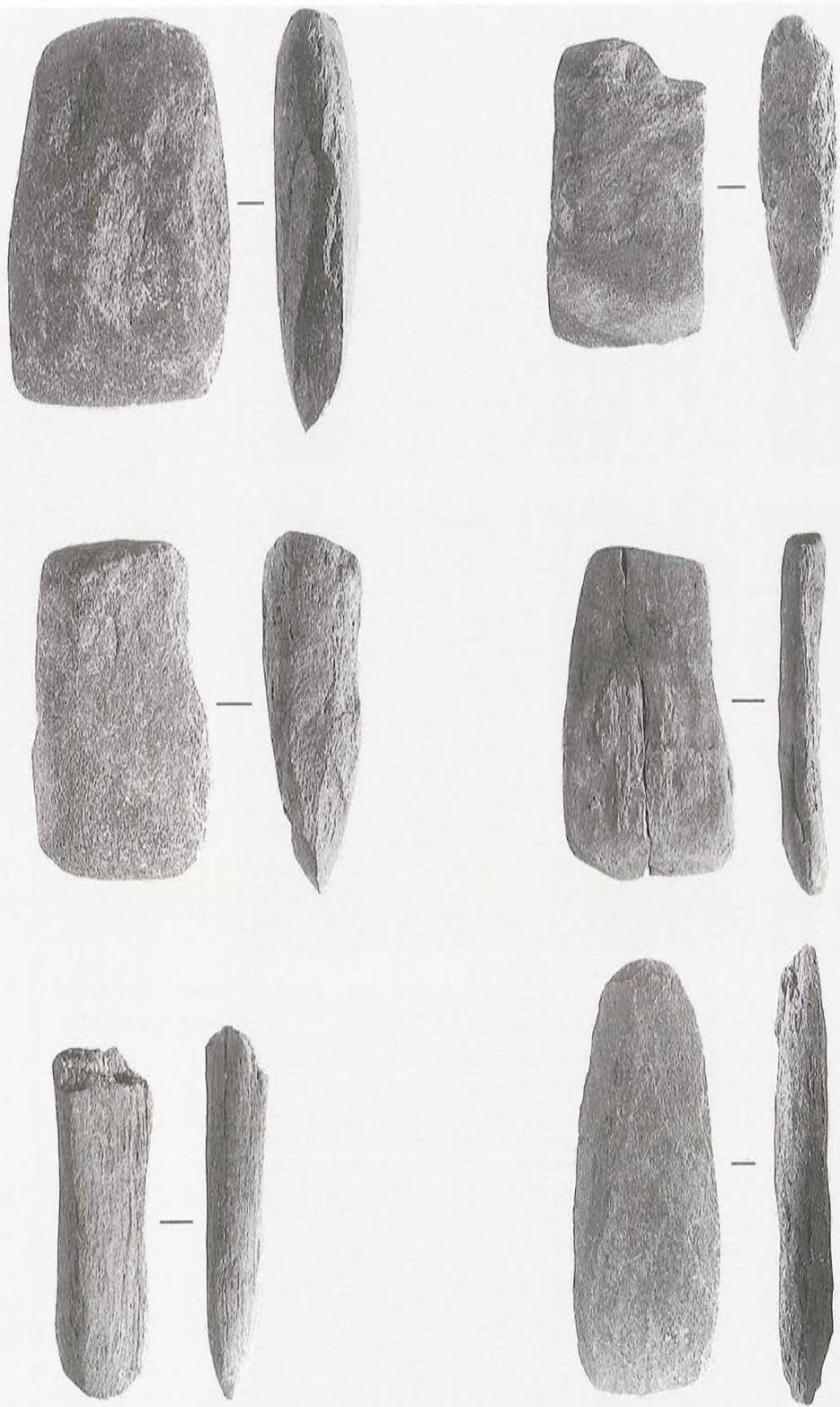
土層斷面・4



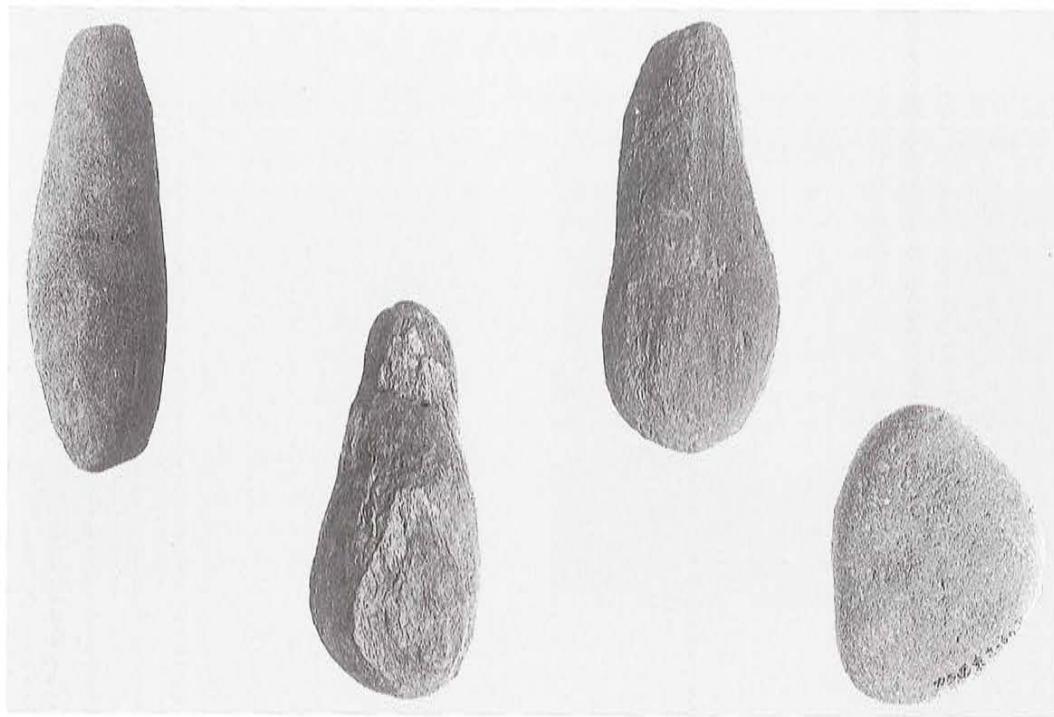
土層斷面・5



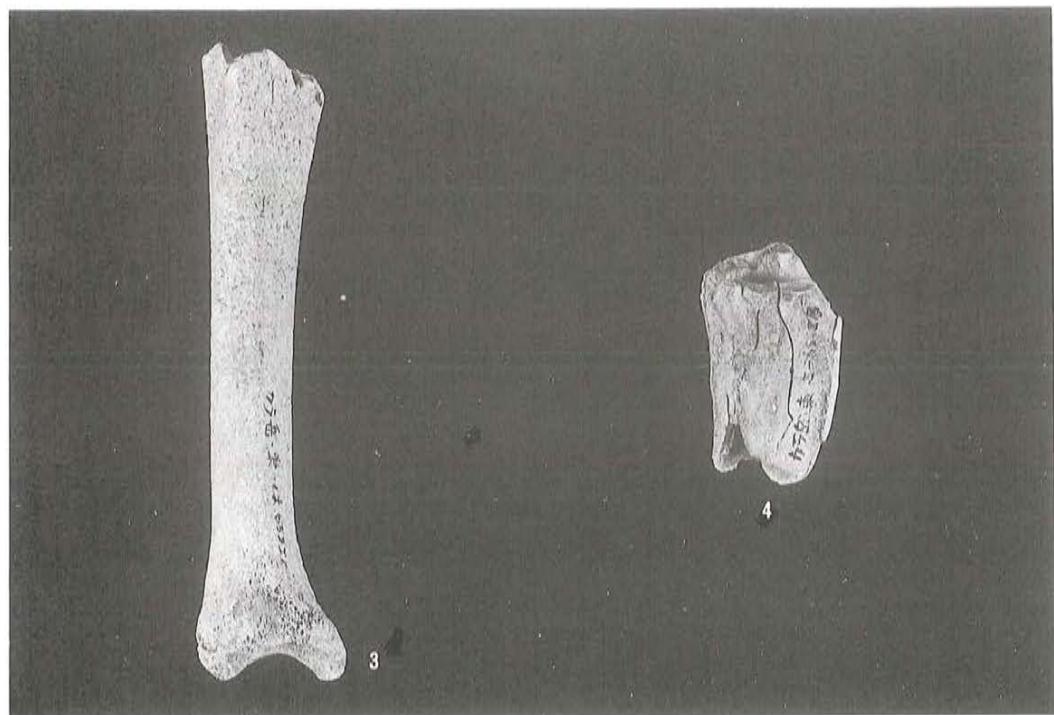
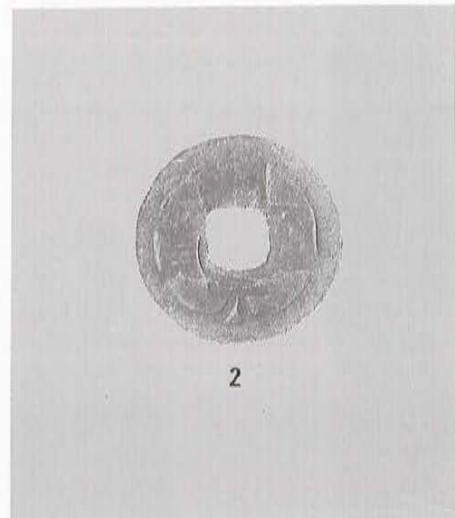
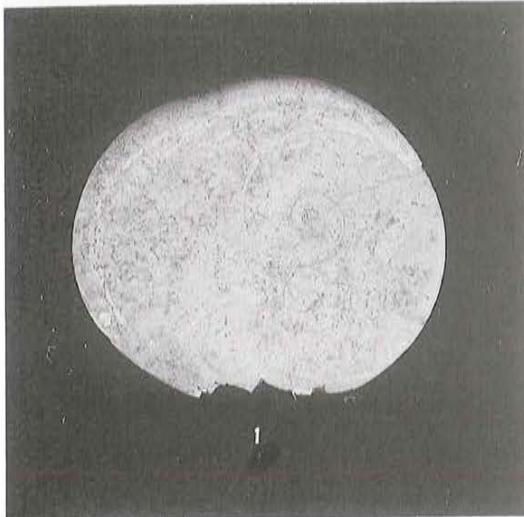
土層斷面・6



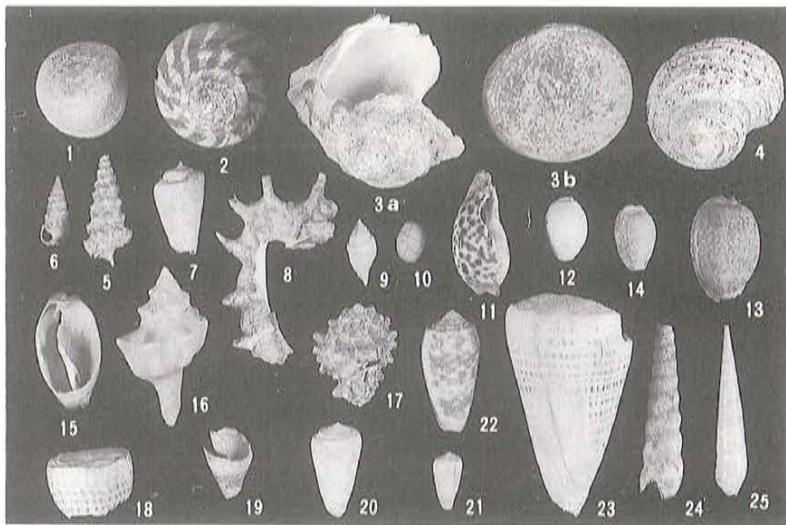
石 斧



上：敲 石 下：石 盤

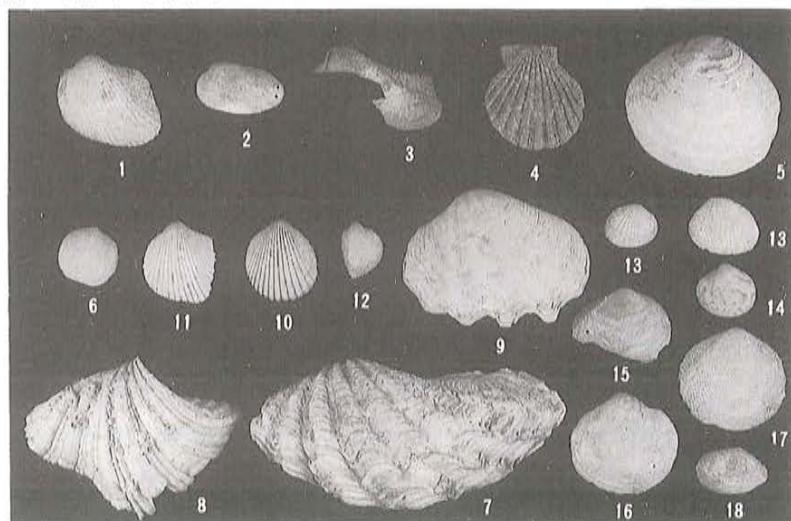


上：1・螺蓋製敲打器、2・開元通寶  
下：3・イノシシ胫骨、4・ウシ上顎第2臼歯



貝類遺存体・1（巻貝）

1. ニシキウズガイ
2. サラサバティ
- 3a. ヤコウガイ
- 3b. ヤコウガイのフタ
4. チョウセンサザエ
5. オニツノガイ
6. トウガタ カニモリガイ
7. マガキガイ
8. クモガイ
9. ネジマガキガイ
10. リスガイ
11. ホシダカラガイ
12. ホシキヌタガイ
13. ヤクシマダカラガイ
14. コモンダカラガイ
15. タルダカラガイ
16. イトマキボラ
17. コオニコブシガイ
18. アンボンクロザメ
19. ヤナギシボリガイ
20. イボシマイモガイ
21. アジロイモ
22. ニシキミナシガイ
23. クロフモドキ
24. タケノコガイ
25. ベニタケガイ



貝類遺存体・2（二枚貝）

1. リュウキュウサルボウガイ
2. ベニエガイ
3. オオタカノハガイ
4. チサラガイ
5. シレナシジミ
6. ウラキツキガイ
7. シラナミガイ
8. シャゴウ
9. ヒメジャコガイ
10. カワラガイ
11. リュウキュウザルガイ
12. オオヒシガイ
13. ホソスジイナミガイ
14. マルオミナエシガイ
15. リュウキュウシラトリガイ
16. モチズキザラ
17. サメザラガイ
18. リュウキュウサラガイ

## 第5章 古墓群の調査

### 第1節 調査の概要

第3章の「調査の経過」でも述べたように、古墓群の調査は第1次調査時後半の踏査としての予備調査と、第二次調査の本調査の二度にわたって行った。

本調査は、1990年2月26日～3月16日までの延べ19日間にわたって行った。

調査地は、空港進入路予定地部分から駐機場（エプロン）予定地部分の南西部で、カラ岳の北東麓にあたる。一帯は、トムル層から成るカラ岳の北東麓がなだらかな馬背状の台地をなして広がっていっていく地形をなし、標高50～55mを測る。

基本設計図でみる限り、この部分は直接的には空港敷地内には含まれないが、エプロン予定地部分の矩面に近接していることから（第10図）、実施計画の際に多少の移動ができる対応できるようにという意図からその分布調査を行った。

調査地一帯は、チガヤやススキなどが膝長（た）け前後まで繁茂した原野となっていることもあってか、これまでにこれらの古墓群は全くその存在が知られていなかった。

発見の契機は、第一次調査時に一帯を踏査した際である。踏査方法は、丹念に歩いてその有無を確認することと並行して、地主やかつて一帯で畠や牧場を営んでいた人たちからの聞き取り調査をも実施した。その際、一帯で牛を放牧していた字白保の方より、どうも墓らしい構築物があるとの情報を得、確認したところ、第1号墓の発見につながった。このことから、墓は単独で存在しているはずはない、つまり墓群をなしているはずだと結論に至り、一帯の調査を実施した。

その結果、第1次の確認調査、および第二次の本調査の二度にわたる調査で計三基の墓が発見された。これらの墓は、その形態や構造からしていわゆる板状石墓に属するものである。以下に、その概要を記す。

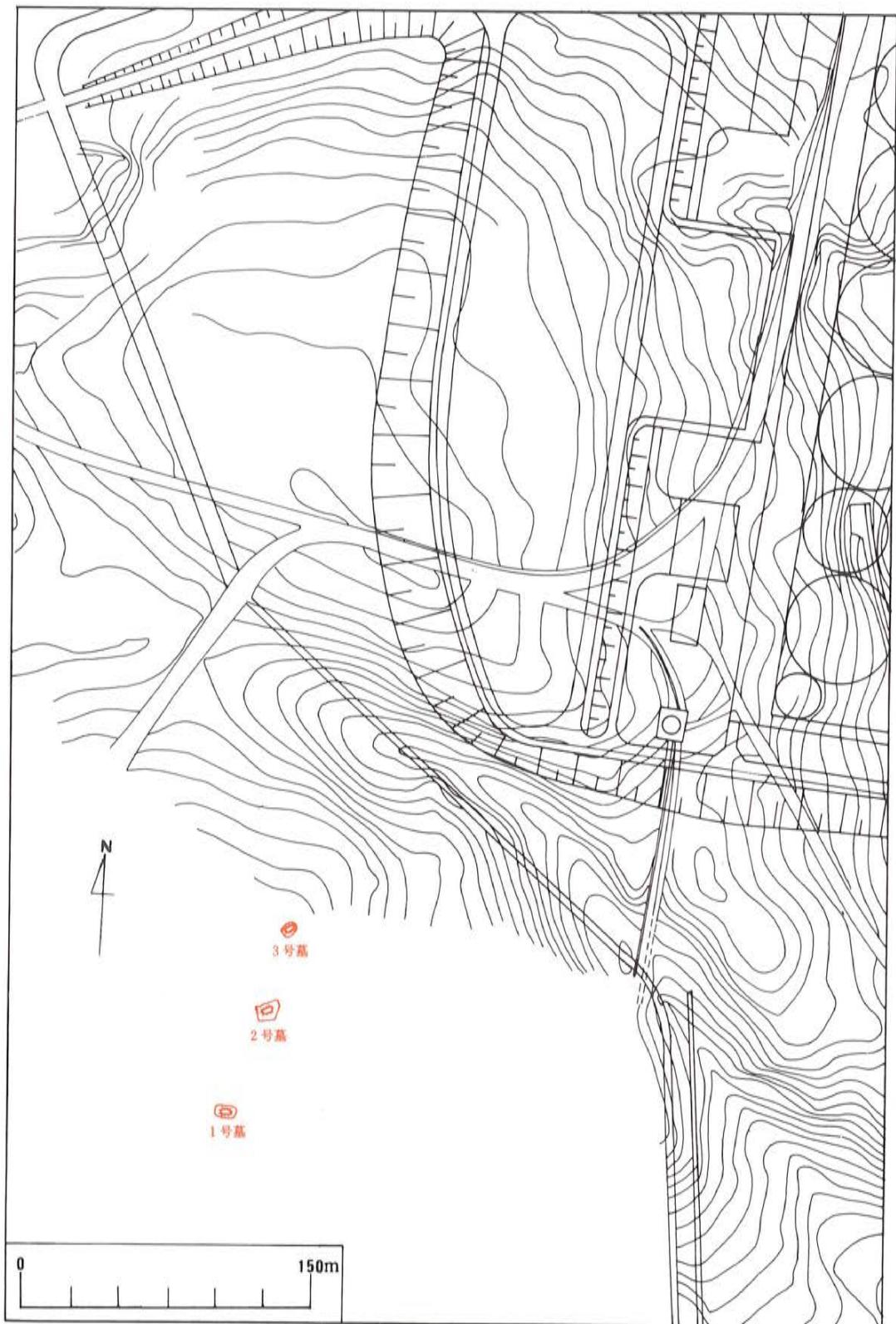
### 第2節 各墓の概要と遺物

#### a. 第1号墓（図版十四）

第一次調査時に確認した墓で、調査地点の最も南西側に位置する。

墓は、北西から南東へ向けなだらかな傾斜をなす一帯の地形上に、長径約5m、短径約4.7mの不正円形状を呈した緩やかなマウンド（最も高い所で、周辺の現地形との比高差が約20cmほどか）を造り、そのほぼ中央部に主体部を設けている。そして、このマウンドの全面には、周辺で容易に得られる拳大より若干大きめのトムル層に含まれる石を葺き石状に敷いている。

墓の向きは、概ね東～東南、つまり海側である。主体部の構造は、現状から推す限り、



第10図 古墓群の分布位置と空港（エプロン付近）建設予定地の範囲

トムル層に含まれる比較的厚みのある略長方形状の石を四隅に立て、その間の側壁や奥壁、あるいは底石を略三角形状や、略長方形、多角形状の同様な石を用いて造られている。その規模は、縦（東西）2.5m、横（南北）1mを測る。

現状は、すでに主体部の天井石や側壁は破壊を受け、四隅の立石と北壁側の最下段、および底石が残存しているだけである。

なお、墓の主体部内および周辺からは、1点たりとも遺物は得られなかった。

### b. 第2号墓（図版十五）

第1号墓の北方、約57mの位置に所在する。本墓もかなり破壊を受けており、残存状況は極めて悪い。主体部の周辺には、該墓に用いられたと思われる、大小の石材が散乱している。

該墓も、第1号墓同様トムル層に含まれる石を用いて主体部を造っているが、主体部周辺は第1号墓と異なり、マウンド状はなさず、南北5m、東西4mの不定形状に拳大より大きめの同様な石材を敷設しているのみである。

主体部の規模は、縦（東西）2m、横（南北）1mを測り、その向きは第1号墓同様東～東南、つまり海側を向いている。

その構造は、地表面を掘り込んで底石を敷設し、両側壁および奥壁にも石を埋め込んで造られている。現状では、第1号墓にみられたような四隅の立石はみられず、略長方形状の石を三方組み合わせて、それぞれ両側壁あるいは奥壁としている。

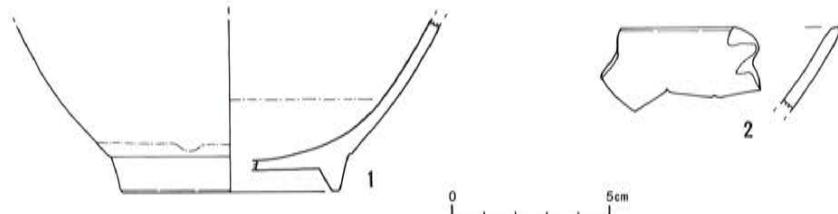
なお、本墓の主体部内および周辺からは遺物が得られている。

#### 遺物

本墓に伴うと推される遺物は、計5点ある。これらは、その採集地点からして2ヶ所に分けられる。その一ヶ所は主体部内で、他の一ヶ所は主体部外である。

第11図の2点は、いずれも主体部内壁部から得られたものである。

1は、底部資料である。形状は、内底面が緩やかな丸みを帯びて立ち上がりしていく形状をなす。淡灰白色釉を施釉。残存部全面とも釉の発色が著しい。推算底径7.0cmを測る。



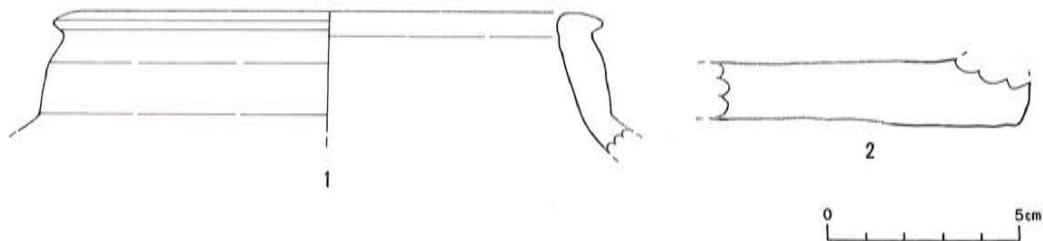
第11図 第2号墓主体部内より得られた遺物

2は、口縁部資料である。体部より傾斜をもってほぼストレート立ち上がり、直口口縁をなし、端部は舌状を呈す。淡灰白色釉を施釉。残存部全面とも釉の発色が著しい。

第12図は、草刈りの際に主体部に西接した部分より得られたものである。

1は、褐釉陶器の壺の口縁部資料である。形状は、比較的短かめの内傾した頸部から口縁部に至る。口縁部は折り曲げ、端部は垂れ下がる。復元口径14.6cmを測る。15世紀頃の製品と考えられる。

2は、沖縄製の無釉焼き締め陶器の底部片である。形態や破片の大きさなどからして、小型の壺に属するかと思われる。素地には、砂粒や粒の粗い白色の礫物を比較的多量に含む。



第12図 第2号墓主体部西側より得られた遺物

#### c. 第3号墓（図版十六・十七）

第2号墓のさらに北方42.5mの地点に所在する。今回の調査で確認された三基のなかでは、最も残存状態が良好である。

本墓も第1号墓同様、極めてなだらかになった一帯の地形上に、東西約6m、南北約5mの規模の略楕円形状を呈した緩やかなマウンドを造り、この全面に拳大より大きめのトムル層に含まれる石を葺き石状に敷き、そのほぼ中央部に主体部を造っている。

主体部は、縦（南北）2m、横（東西）1mを測る長方形状をなす。奥壁よりの天井石がずれ落ちてはいるが、側壁や奥壁などの他の部分は原状のままである。

墓の向きは第1号墓、第2号墓同様東～東南方向、つまり海側である。この入り口部分から第13図1の灰釉碗と人骨（頭蓋骨）が検出された。

#### 遺物

主体部の入り口部、および周辺部より計5点が得られている。いずれも、いわゆる古我知焼や湧田焼などと称されている灰釉の碗である。

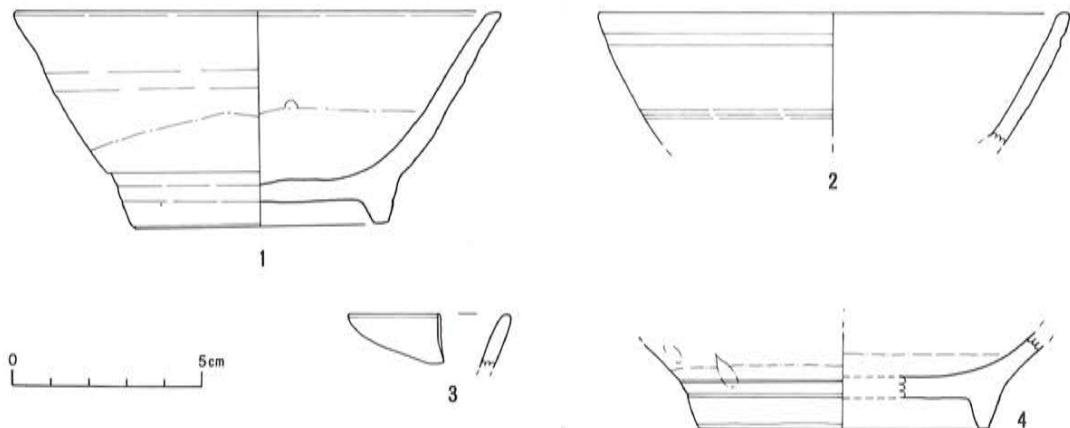
第13図1は、口縁部から底部に至る約三分の一ほどを残す資料である。形状は、腰部

から傾斜をもってほぼストレートに立ち上がっていき、直口口縁をなす。底部は削り出しの輪高台で、器面全面ともナデ調整によって丁寧に仕上げられている。淡灰緑色の厚い失透釉をつけ掛けによって、内外面とも胴下半部まで施釉。標品は、器形の大きさに比して、器壁が厚いのが特徴である。推算口径13.0 cm、推算底径6.3 cm、器高5.7 cmを測る。主体部入り口部より得られた。

2・3は口縁部資料である。両者とも器形的には1と概ね類似するものの、口縁端部に若干の相違がみられる。すなわち、2は端部を丸くおさめているのに対し、3は舌状に仕上げている。2は、薄い淡黄緑色釉を施釉。釉層が薄いためか、内外面の各所にロクロ痕が観察される。推算口径12.5 cmを測る。主体部南壁側より得られた。

3は小片のため、全体形は判然としないが、口縁端部の形状をみる限りにおいては1に類似する。淡灰緑色釉を施釉。主体部入り口部より得られた。

4は底部資料である。器形的には、内底面が比較的平坦面をして立ち上がっていいく。淡灰白色の透明釉を施釉。残存部全面において発色が著しい。推算底径7.7 cmを測る。主体部外東側より得られた。



第13図 第3号墓主体部内および周辺より得られた遺物

図版  
十一 古墓群



調査地遠景  
(南西より)



同上  
(南西より)



同上  
(西より)



調査光景  
(南西より)



同上  
(南西より)



同上  
(東より)

調査光景  
(南より)

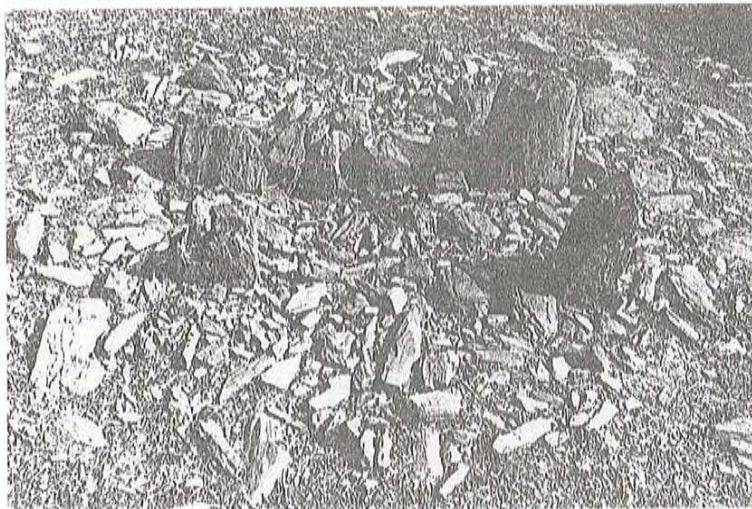


同上  
(第2号墓周辺)  
(南西より)



同上  
(西より)





第1号墓  
(北より)



同上  
(南より)



同上  
(西より)



第2号墓  
(西より)



同上  
(東より)



同上  
(南より)



第3号墓  
(東より)



同上



同上

第3号墓  
(西より)

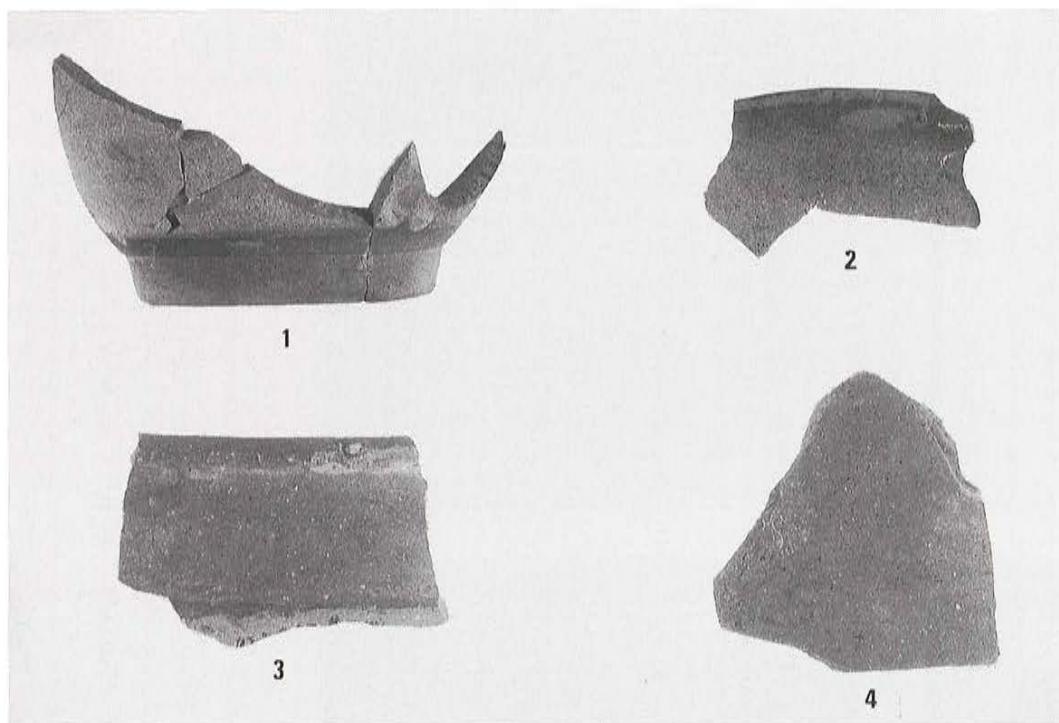


同上  
(北より)



同上  
(南より)





上：第2号墓（1・2 主体部内、3・4 主体部西侧）

下：第3号墓（主体部および周辺）

## 第6章 クバ御嶽（オン）の調査

### 第1節 調査の概要

クバ御嶽（オン）の調査は、第3章の「調査の経過」でも述べたように、二度にわたって行った。

第一回目は、本事業の第二次調査（古墓群の調査）の際の後半に実施した予定地北半域の踏査時である。この調査の際、予定地の北半部に接するミズハマの南側に、クバ御嶽（オン）があったという話を白保の古老などから伺った。そして、御嶽（オン）の周りには御嶽名に付されているクバ（ビロウ）が生えていたとのことである。

その後、さらに詳しい情報を得たいがために、かつてカラ岳北東麓一帯で牧場を営んだ経験もあり、一帯の文化財やイノーの地名などにも詳しい白保在住の宮良松さん（明治36年生）を訪ね、聞き取り調査を行った。宮良さんの談によれば、自分が馬に乗って浜沿いの道を利用して牧場通いをしていた昭和25～30年頃に、クバ（ビロウ）の樹が群生した中に御嶽（オン）があったという。そして、自分が覚えている頃にはもう既に拝むあるいは拝んでいる光景をみたことはなかったというお話を聞かせてくださった。

これらの情報を手がかりに、調査員および補助員は一帯の踏査を行ったが、調査地一帯は防潮林としてのモクマオウを主に、アダンやユウナをはじめとした海浜植物が繁茂しており、御嶽（オン）の発見には難を極めた。こうして、4回めくらいの調査の際に陸地側の高くなった地点からクバ（ビロウ）の樹を発見した。場所は、予定地北端寄りの海浜にある自然湧水（ミズハマ）から浜沿いに南へ約650mほど行った防潮林の中である。一帯は、海浜砂丘と4～5mほどの比高差を有し傾斜をなしている。防潮林のモクマオウやアダンなどの海浜植物をかき分けて約15mほど行った所に、高さ約60～70cmほどの石積みが確認された。そして、この石積みが途切れた入り口部分と推される部分の近くにはクバ（ビロウ）の樹が2本あり、その周辺には花生けや香炉、碗などの陶器類やサンゴ石製の香炉、シャコガイなどがみられた（図版十九・二十）。

また、石積み外の北東部にはマーニ（クロツグ）の叢生があり、周辺にはシャコガイが散乱し、その北側寄りには溜井戸と思われる小さな掘り池様のものがあった（図版十九）。さらに、くまなく一帯の踏査を行っていくと、奥側（西側）にも石積みが確認された。

このようなことから、一帯の伐開を行い全貌を明らかにすべきとの結論に至り、伐開作業に着手したが、石積みが予想外に広範囲に延びていることや、上述したように草木が繁茂していることから作業は難航し思うようにはかどらなかつたことに加えて、古墓群調査の終了後のゆえ期間が短かったことなどの条件が重なり、一部を終了させたのみで、その大半は次回の調査に委ねることとなった。

第二回目は、本事業の第三次調査で、クバ御嶽（オン）本調査である。調査は、1990年8月13日～9月7日までの延べ26日間にわたって行った。この調査では、前回の調査で未了であった伐開作業を完了させ、その全容を明らかにすることが第一の目的であった。そのため、作業は伐開作業を主体にし、それが完了後、根石の検出作業などを行ない、その後実測作業を行った。

その結果、第14図に示したように、検出された石積み遺構は南北の両端部が破壊されてはいるものの、入り口部分から南北方向に延びた不正橿円形状を呈し、入り口部分には階段状に造られていることが判った。

## 第2節 遺構

確認された石積み遺構は、西から東へ向けてなだらかな傾斜をもつた一帯の地形に直行するかたちで形成されている（第14図）。前述したように、当該遺構の一部はすでに破壊されてはいるものの、残存形状からして、南北に延びた不正橿円形状を呈していたものと思われる。

その規模は、南北長37.5m、東西長（入り口部から奥壁部まで）32・5mを測る。

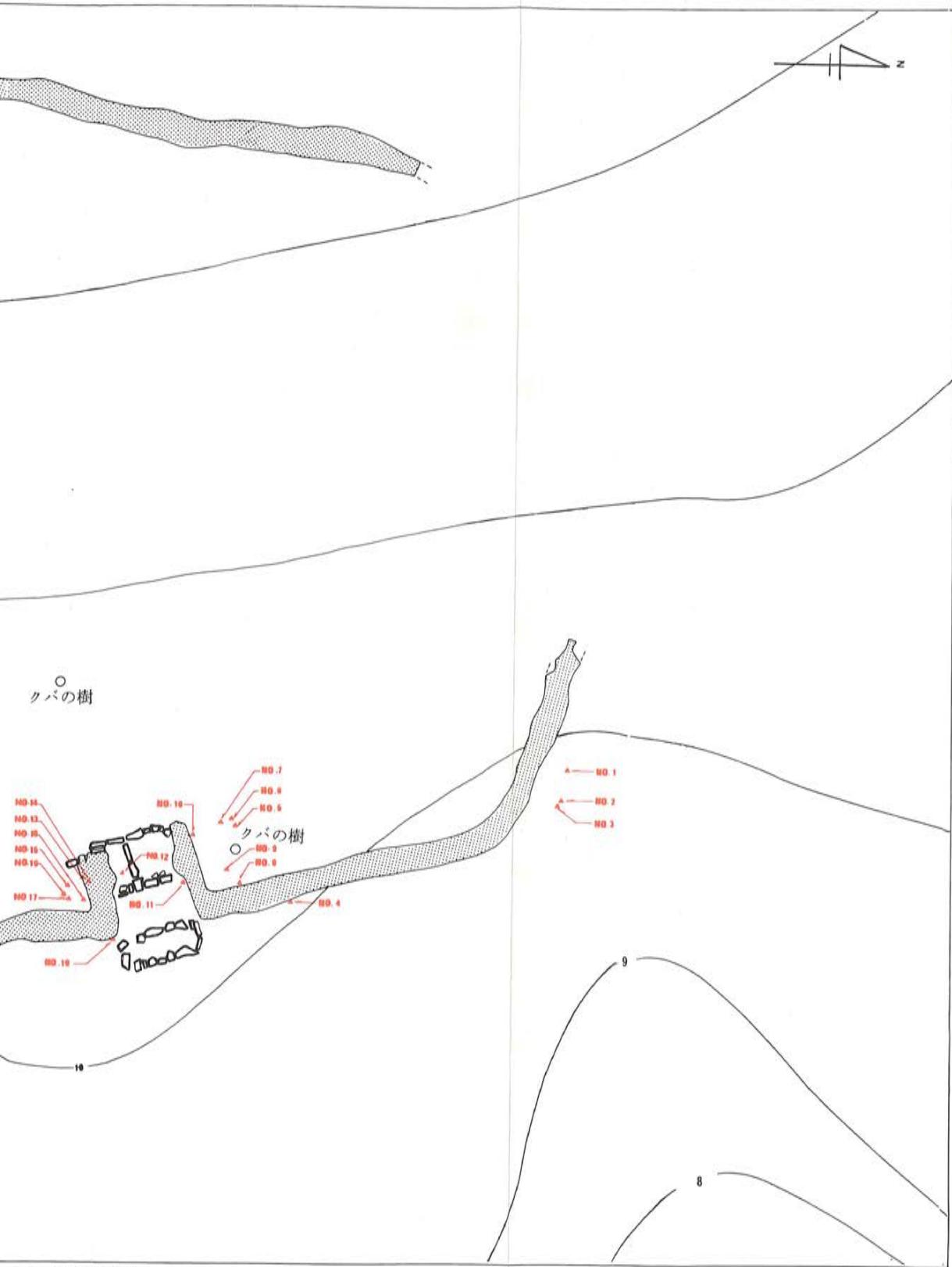
なお、聞き取り調査によると、一帯のモクマオウなどの防潮林を植栽する際に、ブルドーザーを用いてある程度地形を敷きならしたり、海浜植物を押しやったりしたことがあるとのことである。このことから、破壊された南北端部は、その際に破壊されたものと推される。

石積みは、地点によりその広狭や高低に若干の差がみられるものの、概ね幅が80cm前後、高さは60～70cm前後を測る。積み方は、東側ラインあたりで約4～5段、西側ラインあたりで2～4段ほど自然石を積み上げただけの、いわゆる野面積みである。

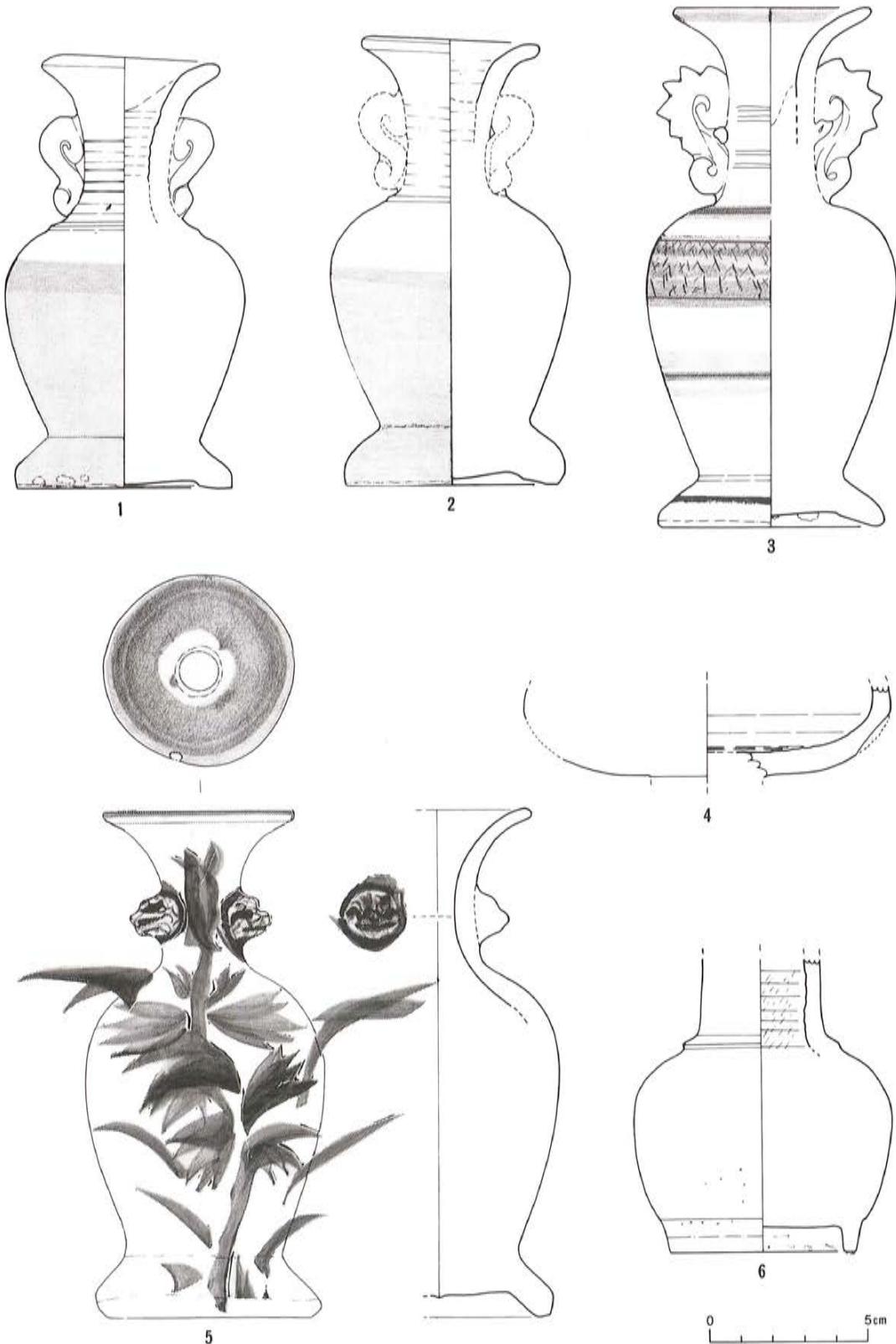
石積みの内部は、南西部寄りと東側ラインの石積み内側部は比較的フラット面がみられるものの、全体としてはやや緩い傾斜をなす。また、東側ライン北半の内側部は、約2～3段分ほどが埋まっていることより、土留め的な機能をも有していたものと考えられる。

そして、この囲いの東側部、つまり海側のほぼ中間地点あたりに石積みを途切れさせ、約5mほど内行させて約3m幅の入り口部を設けている。この入り口部は、板状石を横位（3段目と4段目には、中央部南寄りに従位・南北にも敷設）に4段（第1段目は、石積みライン外）に分けて緩く敷設し、階段状にしている。また、この階段状の第1段目の周辺部分や、敷設された石と石の間には枝サンゴや砂利を敷き詰めている。

入り口の突き当たり部とその右手、つまり北側にはクバ（ビロウ）の樹があり生えている。そして、入り口の両側や階段状部分には、特に遺物が集中していた（第14図）。



(オノ) 実測図



第15図 陶器実測図・1 (1~3・5:花生け、4・6:器種不明の袋物)

囲繞させている。また、口縁部内面と高台外面には、コバルト釉のみによる圈線を囲繞させている。外器面全面と内器面の頸部上半に、厚い灰白色の失透釉を施釉する。口径6.2 cm、器高16.3 cm、最大胴径8.0 cm、底径7.2 cm を測る。

5も基本的な器形は1～3までに類似するものの、ナデ肩を呈する。頸部には、獸面突起を貼付し、外器面にはコバルト釉による撫子文を描く。釉調は淡灰褐色を呈する。口径5.1 cm、器高16.0 cm、最大胴径7.6 cm、底径6.5 cm を測る。

#### 瓶子（第16図1）

第16図1は、口縁部と高台部を欠失するものの、器形的には上記4点とは異なり、緩やかなナデ肩の肩部から体部へ移行する形状をなす。器種としては、瓶子に属するものであろう。外器面には濃い白釉をベースとして、その上からコバルト釉による竹文と梅文を描いている。残存口径5.1 cm、残存器高7.6 cm、最大胴径7.6 cm、底径(4.4)cm を測る。

#### 器種不明の袋物（第15図4，6）

瓶子や壺などのいわゆる袋物になる器形であるが、具体的な器種については判然としない。

4は、高台ぎわから大きく開いて体部へ移行していく器形になる。その形状からして、一輪差しなどのような器形になるものと思われる。釉は、透明度の高いアメ釉を施釉。

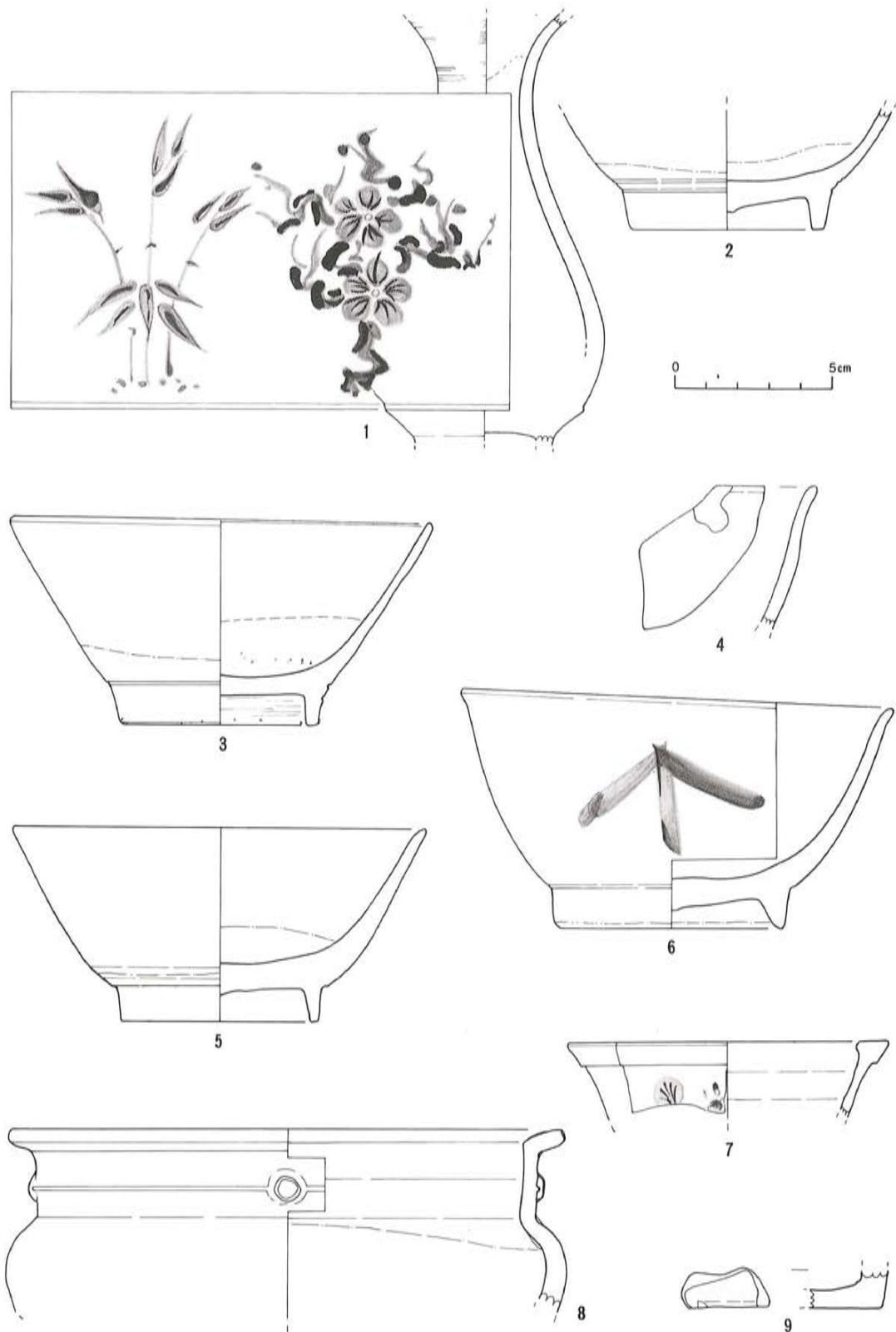
6は、頸部上半から口縁部を欠失するものの、その形状からして徳利もしくは長頸瓶？になるものであろう。器形的には、張りの弱い頸部から丸みをもった体部に至る形状をなす。頸部内面には、整形時の絞り痕を明瞭に残し、高台置付部には目砂を残す。黒褐釉を高台以外の全面に施釉。残存器高9.2 cm、最大胴径8.2 cm、底径5.8 cm を測る。

#### 碗（第16図2～6）

計5点が得られている。生産地や釉調、器形などからして2大別される。その一つは灰釉碗で、所謂古我知焼や湧田焼などと称されているものである。他の一つは白土化粧を行った後、透明釉を施釉した壺屋焼である。

3は、灰釉碗である。器形的には、腰部から傾斜をもって立ち上がりていき、直口口縁をなす。底部は、削り出しの輪高台で、器面全面ともナデ調整によって丁寧に仕上げている。釉は、淡緑色の薄い灰釉をつけ掛けによって内外面とも胴下半部まで施釉。器外面には、ポーラスな面を呈する箇所もみられる。高台置付け周辺と内底面見込み部には焼成時の重ね焼きのための目砂がみられる。器高6.5 cm、口径13.3 cm、底径6.2 cm を測る。

2・5は、鉄釉碗である。5からする限り、器形的には高台ぎわから膨らみを持つ腰部を経て立ち上がり、そのまま延びていく器形になるようである。しかし、他遺跡出土例



第16図 陶器実測図・2 (1:瓶子, 2~6:碗, 7:鉢(小杯), 8:香炉, 9:無釉焼き締め陶器)

(盛本編1986)などを見ると、口縁端部付近でわずかに外反するタイプもみられる。底部は、削り出しの輪高台である。施釉は、つけ掛けにより高台脇まで黒褐色の鉄釉を施釉した後、透明釉を施釉するが、内底面中央部周辺のみは透明釉を施釉せず、鉄釉のままである。2は底径6.2cm、5は口径13.1cm、器高6.1cm、底径6.2cmを測る。

4・6は、一般に壺屋焼などと称されているものである。素地に白土化粧掛けを行った後、高台以外の全面に透明釉を施釉後、重ね焼きの際の釉着を防ぐために内底面見込み部をリング状に削り取っている。6は、外器面を三等分するかたちで呉須による↑文を描く。器形的には腰部より丸みを帯び、やや外反して立ち上がっていく器形をなす。底部は、削り出しの輪高台をなす。内外面とも、ナデ調整によって丁寧に仕上げている。口径13.7cm、器高7.3cm、底径7.0cmを測る。

#### 鉢（小坏）（第16図7）

第16図7は口縁端部をT字状に肥厚させた鉢、もしくは小坏になると推される資料である。器外面にマンガン釉？を施釉後、厚いコバルトと白釉によって文様を描いているものの、下端部に花文らしきものが窺える程度で、その全体の構図については判然としない。推算口径10.2cmを測る。

#### 香炉（第16図8）

第16図8は胴下半部を欠失するものの、その形状からして三足の香炉になるものであろう。器形的には、逆ハ字状に開いた口縁部から頸部で締まり、肩部直下に最大径を有するようである。頸部中央部付近には、一条の凸帯を回繞させ、その上部には四等分して円形文を張り付けている。口径18.4cmを測る。

#### 鉢（第17図1・3）

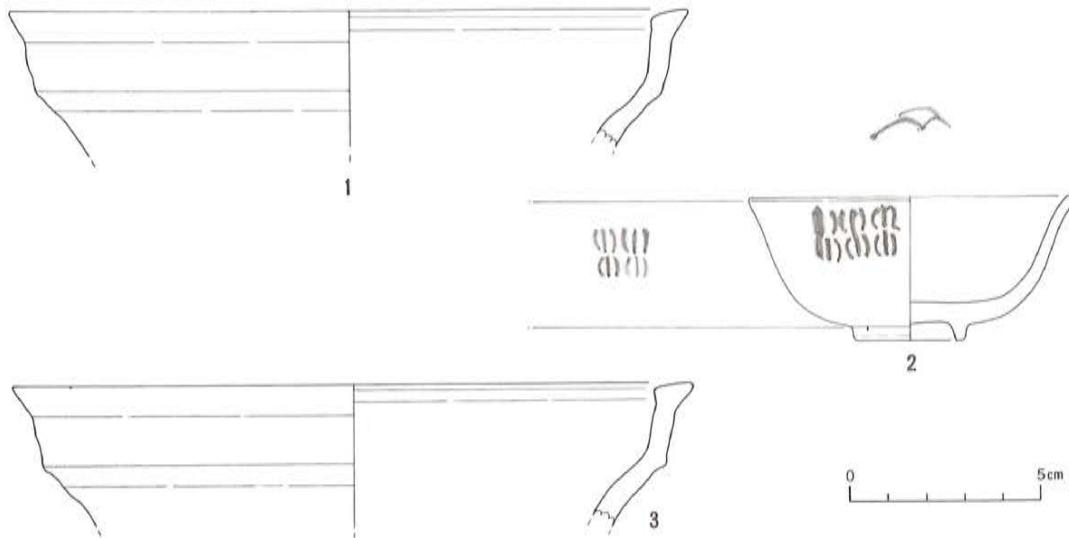
第17図1・3は、器形や釉調などからして同一個体と推される。形状からして、鉢に属するものであろう。口縁部のみの資料のため、胴部以下の形状については不明であるが、口縁部直下で弱い外反を示し、口縁端部は肥厚する。釉調は黒褐色釉をベースにし、淡緑黄褐色釉を施釉するものの、淡緑黄褐色釉は発色している。二点とも口径18.0cmを測る。

#### 無釉焼き締め陶器（第16図9）

第16図9は、無釉焼き締め陶器である。小片のため、詳細な器種については不明であるが、おそらく袋物になるものであろう。

瀬戸・美濃系？（第17図2）

第17図2は、明治時代（19C後半頃）の瀬戸・美濃系？の型紙刷りによる染付の小碗である。広底の底部から腰折れぎみに立ち上がっていく器形をなす。口縁端部は口鋸で、高台疊付以外の全面に施釉。外器面には篆子文を配し、内底面中央部には、岩に波しぶきが当たって砕けている様子の簡略化した文様が描かれている。口径8.5cm、器高3.8cm、底径3.3cmを測る。



第17図 陶器実測図・3 (1・3:鉢, 2:瀬戸・美濃系? 小碗)

## b. サンゴ石製香炉（第18～19図）

サンゴ石を用いた香炉である。計8点得られているが、そのほとんどが破損品である。7点を図示した。

これらは、鉄ノミなどを用いてサンゴ石を整形し、その一面に線香受け部を作出しているものである。その全体形や脚の有無や形態、線香受け部の形態などには多少の差異がみられる。

以下に、概述する。

第18図1は、これらのなかで最も残存状態が良く、その全容を伺うことのできる資料である。全体形は、一角がとれた略立方体をなす。その一面に線香受け部を作出し、反対側の一面には三個の脚を作出している。線香受け部は、面のほぼ中央部に、上面観が長方形形状、断面形が逆台形状に掘り込んでいる。脚は、3足のうち2足は隣合わせた角部に、他の1足はこの2足に向かい合うラインのほぼ中間に略逆台形状に作出している。各面には、素材本来の面やノミ痕を残す部分もみられるが、全体として丁寧に仕上げられている。しかし、線香受け部の底面や側面は比較的雑に仕上げられており、ノミ痕を顕著に残す。

2は、約三分の一ほどを残す破損品である。現状から全体形を推すると、下膨れ状の略長方体をなすようである。線香受け部の作出された面は長方形形状をなし、そのほぼ中央部に線香受け部を作出している。線香受け部は、1に比して深い。そして、この線香受け部の反対側の面は、馬背状に成形し脚部としている。標品も、各面に素材本来の面を残すものの、全体としては比較的丁寧に仕上げられていると言えよう。

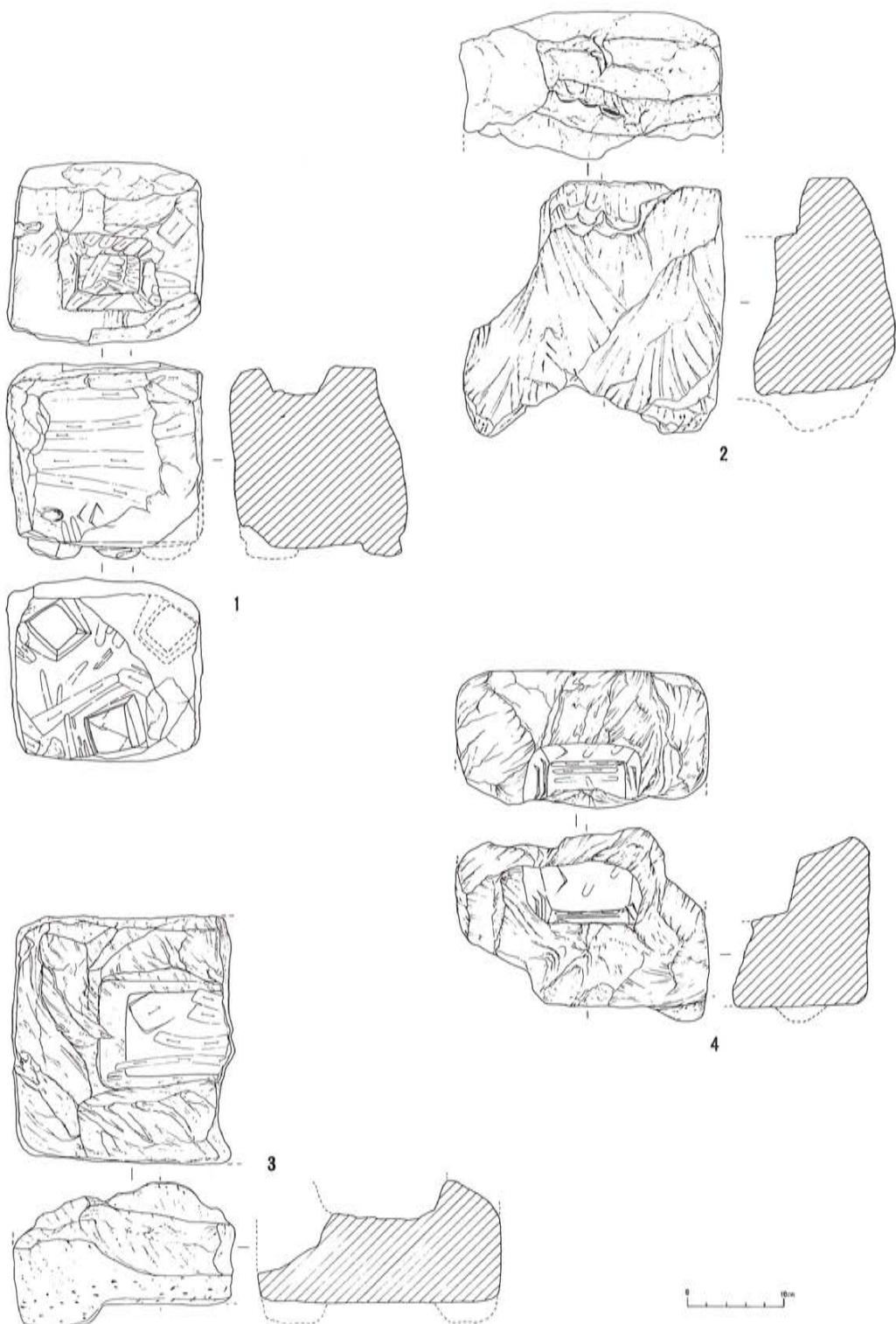
3は、線香受け部の上部と右端が欠失しているものの、現状から推して、全体形は略立方体をなしていたようである。線香受け部は、上記二例に比して大きく、かつまた深かったようである。そして、この線香受け部の反対側面の四隅には長方形の脚を作出している。残存面を見る限り、各面に素材本来の面は見られず、丹念に仕上げられている。

4も残存形態からして、全体形は3に類似していたものと推する。しかし、線香受け部の上面観に多少の差異がみられ、3は比較的角ばった長方形形状をなしているのに対し、標品は角に丸みをもたせている。また、この線香受け部の反対側面に、現状では1個のみしか残存していないが、3と同様、四個の脚を有していたようである。面の仕上げ状況も、3にほぼ類似する。

第19図1は、香炉受け部の一端の小片である。一側面に整形痕が見られる以外は、ほとんど素材本来の面を残し、雑に仕上げている。

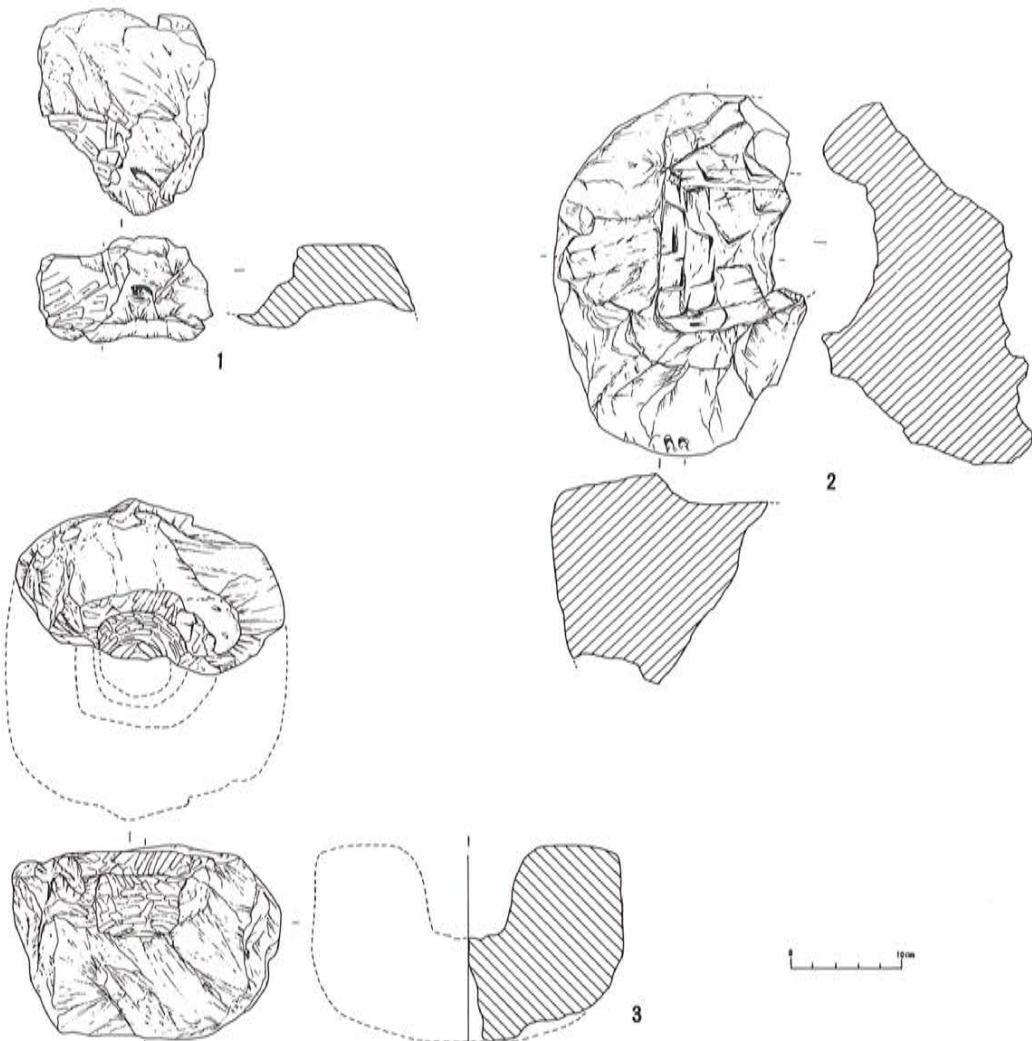
2は、約二分の一ほどを残す。標品は整形段階まで行き届かず、部分的に打ち欠いて、一面に線香受け部を作出しただけの、未製品のようである。そのため、全体形は不明。香炉受け部は、浅いものの比較的大きい。

3も約二分の一ほどを残す。全体形を復元すると、上面観は隅丸方形形状を呈し、断面形



第18図 サンゴ石製香炉実測図・1

がコ字状をなすようである。線香受け部の上面観も、全体形とほぼ同様な形状をなすが、断面形は口の部分が大きく開いていく形状をなす。標品は、脚部は作出せず、緩やかな弧面に仕上げたままである。残存面を見る限り、各面に素材本来の面はみられず、丁寧に仕上げられている。



第19図 サンゴ石製香炉実測図・2



近 景  
(西より)



溜め井?  
(北より)



踏査時に発見された  
花生け



散乱していたシャコガイ



踏査時に確認された石積み  
(東より)



同上  
(西より)



伐開作業光景  
(南より)



同上  
(南西より)



同上  
(ほぼ終了状態)  
(東より)

石積み検出作業光景（南西部）（南より）



同上（南東部）  
(東より)



同上（西側部）  
(東より)





石積み検出作業光景（東北部）（南西より）



同 上（東側部）  
(北より)



同 上（西側部）  
(南東より)



検出された石積み（南西部）（南東より）



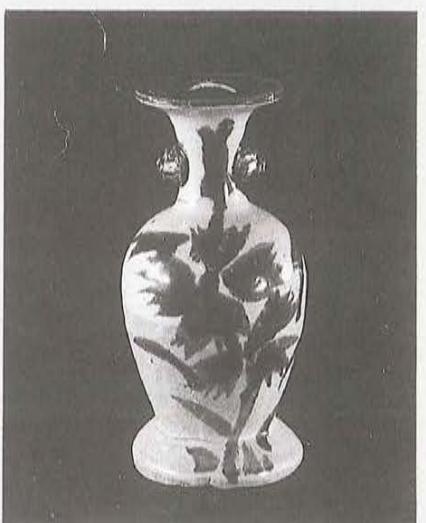
同上（西側ライン）  
(北より)



検出された階段状遺構  
(東より)



陶 器・1

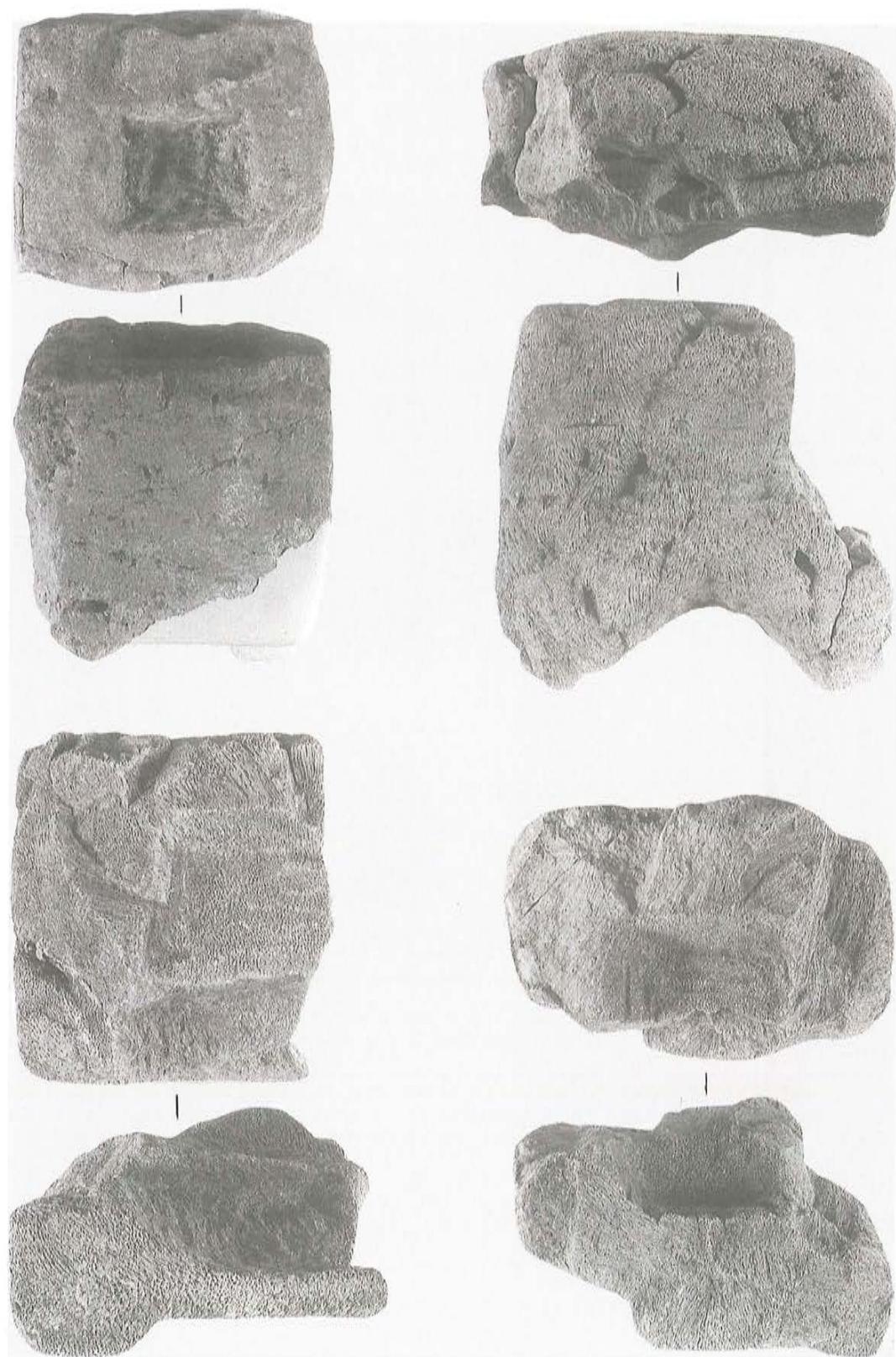


陶 器・2

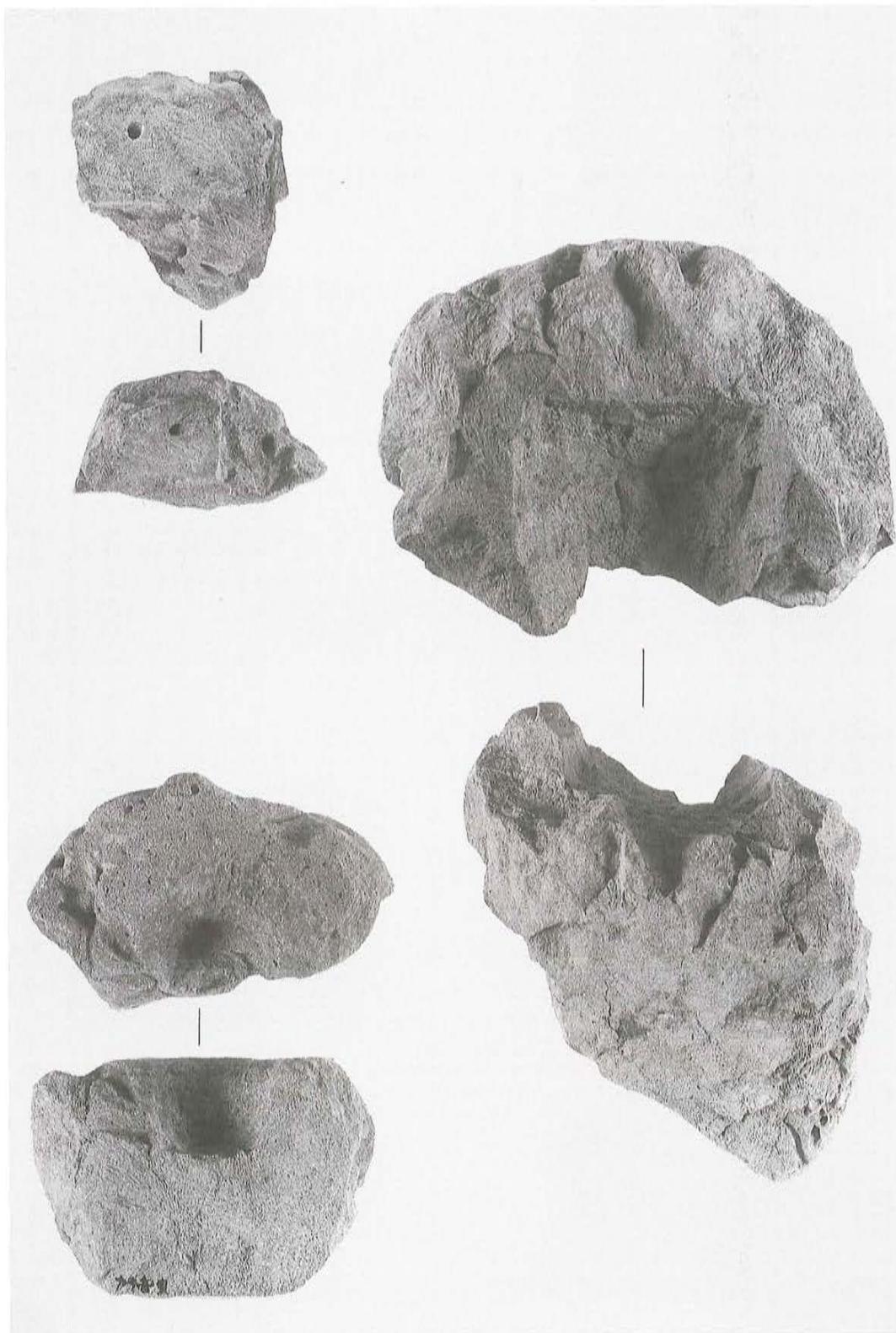


上：陶 器・3 下：調査参加メンバー

図版 二八 クバ御嶽（オニ）



サンゴ石製香炉・1



サンゴ石製香炉・2

## 第7章 収束

以上、前章までにて新石垣空港建設計画予定地内に所在する文化財の分布や範囲確認調査の内容について述べてきた。ここでは、調査で明らかになった点、あるいは今後の課題などを要約してまとめとしたい。

調査で明らかになった点としては、建設予定地内には周知の貝塚である嘉良嶽貝塚の広がり以外に、新たに古墓群（現予定地からは若干外れる）とクバ御嶽（オン）が確認されたことである。とりわけ、この古墓群とクバ御嶽（オン）が所在する一帯の調査前の現況は、チガヤやススキ、あるいは防潮林としてのモクマオウやアダン、ユウナなどをはじめとした海浜植物が繁茂し、その存在については予想だにできなかったのである。限定された地点での集中調査と、聞き取り調査を援用した結果によって得られた成果といえよう。以下に、各々についてふれてみたい。

嘉良嶽貝塚は範囲確認調査の結果、小河川のスムジ川の北側の旧地形をとどめている部分に約2700m<sup>2</sup>の範囲で残存していることが明かとなった。すでに述べたように、当貝塚は轟川河口の川尻貝塚に接するあたりから、今回の調査地点までの範囲の低砂丘に立地する八重山第一期（安里嗣淳氏編年試案の新石器後期）の貝塚である。今回の調査は、その範囲の確認という目的から調査面積が限定されたため、出土遺物の内容は貧弱であった。しかし、当貝塚からは、これまでに石斧をはじめとした遺物類が採集されている。また、これまでには得られていないが、当該期文化を代表するシャコガイ製貝斧もさらに発掘面積を広げていけば、必ずや発見されるものと推する。貝塚は、その広がりからして、おそらく地点貝塚を形成していたものであろう。しかし、本貝塚の現状は極めて保存状態が悪く、その南端から今回の調査地点の南接する畠地までは、復帰前の土壤改良や採砂などによって、ほとんどが破壊されてしまっている。そして、調査地点の東側部も地主による採砂によって破壊を受け凹地と化している。このようなことから、当貝塚は全体のうちの極めて小範囲にしか残存していない。このわずかな残存部を含めた一帯に、新空港建設が策定されようとしている。策定にあたっては、本貝塚がより適切な状態で保存されるように、設計のうえで熟慮されることを望む。

古墓群の所在する地点は、すでに述べたように、現建設計画図ではそのラインから外れているが、今後の設計変更などにおいて多少の移動が生じても対応できるようにということで、調査を実施した。

その結果、第5章で述べたように計3基の古墓が発見された。これらは、カラ岳を形成するトムル層に含まれる略板状石（3号墓の落石した天上石にはテーブルサンゴもあり）を用いて、主体部を作出した墓である。1号墓には遺物を伴っていないが、2号墓と3号墓からは若干の遺物が得られている。これらの遺物から、その時期を推考すると、2

号墓外西側部より 1 点のみ 15 世紀段階に属する褐釉陶器の壺形若しくは甕形の破片が得られてはいるが、それ以外の遺物のほとんどは沖縄製の灰釉あるいは黒釉などの施釉陶器と、無釉焼き締め陶器片である。これらもさらに当該期の編年的研究が深化すれば、もっと限定した年代把握が可能であろうが、灰釉陶器からみた場合（知念他 1988）、現状では 17～18 世紀頃という年代をめやすの一つとしておきたい。

それでは、これらの墓の使用者はというと、これについてもその手がかりがなく推考の域をでないが、付近には近世に桃里村や盛山村などが所在しており、これらの近世集落と何らかの有機的関連があったのであろうと考えておきたい。

クバ御嶽（オン）は、すでに地元の多くの古老たちにも忘れ去られていた御嶽（オン）であったが、わずかの人たちからの聞き取り調査をもとに今回の調査ではじめて、その所在を確認された有形民俗文化財である。すでに述べたように、元来は幅約 80 cm 前後、高さ約 60～70 cm ほどの石積みが囲いとして一帯の地形に直行するかたちで略橢円形状をなしていたようであるが、現状は南北両端部が破壊を受けて欠失している。そして、その東側、つまり海側ラインのほぼ中間部あたりには、入り口部分が設けられ、そこは板状石が階段状に敷設されている。この入り口部周辺からは、陶器やサンゴ石製の香炉などが集中して発見されている。それらをみると、近世の壺屋焼（1682 年に沖縄の陶業を王府の命によって、那覇の壺屋へ統合）の白釉やマンガン釉を施釉した花生けや瓶子、香炉、碗などに混じって、1 点のみではあるが瀬戸・美濃系？の染付碗がある。また、サンゴ石を用いた香炉も 8 点得られている。

これまでにも述べてきたように、この石積み遺構の性格については、その聞き取り調査のよって得られた伝承を重視して、いちおう御嶽（オン）として捉えてはいるものの、未だその確証が得られたわけではない。何故ならば、御嶽（オン）には、本来神が鎮座しているイビあるいはウブが伴っているはずであるが、今回の調査ではその跡を確認できていないからである。もっとも、調査の主眼がその範囲を確認することにあったため、石積みの広がりの追求に多くの期間が裂かれ、発掘調査までには到らずに終了したためである。

しかし、入り口部分手前から階段状の施設を経て、左折して枯れたクバ（ビロウ）の方向へ向かうように、枝サンゴや珊瑚砂利などが敷かれている状態がみられた。さらに発掘調査によって確認する必要があることは多言を要しないが、この南側の枯れたクバ（ビロウ）のある周辺は多少フラット面をなしていることをも考慮すると、あるいは一帯にイビあるいはウブがあった可能性を推する。

再述するようであるが、空港建設設計画にあたっては、これらの文化財がより適切な状態で保存されるよう熟慮することを切望してやまない。

なお、このクバ御嶽（オン）の歴史・民俗学的な位置づけについては、地元石垣市宮良在住の中鉢良護氏（琉球大学民俗学研究会 OB）が丹念な聞き取り調査と、文献史料とともに第 8 章にて考察しているので、それを参照していただきたい。

## 参考文献

＜あ＞

安里嗣淳, 1987: 沖縄・先島の考古学。考古学ジャーナル。No. 284。p 14~17。ニューサイエンス社。東京。

阿利直治・黒島玲子編, 1982: 桃里恩田遺跡—沖縄県石垣市桃里恩田遺跡試掘調査報告書一。石垣市文化財調査報告書第5号。石垣市教育委員会。石垣。

＜い＞

石垣市総務部市史編集室, 1989: 八重山古地図展。石垣市役所。石垣。

＜う＞

魚垣の会, 1988: 予備研究報告 サンゴ礁文化圏の自然生活誌—八重山白保部落のイノと暮しー。石垣。

——, 1989: 白保周辺の遺跡。魚垣。No. 2。p 2~5。石垣。

＜お＞

大塚裕之・長谷川義一, 1973: 石垣島産の鹿化石について。国立科学博物館専報。

沖縄県, 1990: 新石垣空港整備基本計画書。

＜た＞

滝口宏編, 1960: 八重山の考古学。『沖縄八重山』。早稲田大学考古学研究室報告。第7冊。p 100~173。早稲田大学考古学研究室。東京。

＜ち＞

知念勇・他, 1988: 灰釉碗からみた近世沖縄古窯の編年。沖縄県立博物館紀要。第14号。p 1~22。沖縄県立博物館。那覇。

＜つ＞

津波清・上原靜, 1990: カラ岳 (=嘉良嶽)。沖縄県歴史の道調査報告書VII—八重山諸島の道ー。p 149。沖縄県教育委員会。那覇。

＜と＞

当真嗣一, 1972: 八重山考古学の諸問題。友寄英一郎編『南島史論—富村真演教授還暦記念論文集ー』所収。p 365~386。琉球大学史学会。那覇。

——, 大城慧編, 1979: 石垣島の遺跡—詳細分布調査ー。沖縄県文化財調査報告書第22集。沖縄県教育委員会。那覇。

＜め＞

目崎茂和, 1988: 石東リーフ 日本一大裾礁の命運。『南島の地形—沖縄の風景を読むー』。p 133。沖縄出版。浦添。

——, 1988: 白保海岸 保全すべき礁 アオサンゴの大群落。『南島の地形—沖縄の風景を読むー』。p 134。沖縄出版。浦添。

＜も＞

盛本勲編, 1986: 松田遺跡—一般国道329号改良工事に伴う緊急調査—沖縄県文化財調査報告書第76集。沖縄県教育委員会。那覇。

——, 1989: 清水貝塚発掘調査報告書。具志川村文化財調査報告書第1集。具志川村教育委員会。沖縄県久米島具志川村。

# 第8章 クバ御嶽（オン）の歴史・民俗学的位置づけ

中鉢 良護

## はじめに

1990年の2～3月、および8～9月の二度にわたり、新石垣空港建設予定地一帯の文化財分布調査が、県文化課によって行われた。その結果カラ岳東に古墓群、そのさらに北東の海岸沿いに「クバ御嶽（オン）」と白保の人たちに呼ばれる御嶽跡が確認された。

幸いに、この調査に参加する機会を得て、日頃漫然とながめて通り過ぎていたこの地域を7週間かけて歩き回ることができた。この間、さまざまな人たちに出会い、お話を伺い、実際に現場に立ち、かつてのこの地の生活と自然を復元しようと思いつつとめてきた。それによって確かめえたと思われる、「クバ御嶽（オン）」の実態と由来を中心とするささやかな「発見」を報告しよう。

### 一. 桃里村

この地には、今から80年足らず前に、一つの村があった。「桃里村」という名前である（図版30）。

カラ岳の北、現在の大里部落の東はずれのキビ畑の間を通り、東の水浜（ミズハマ）に至る一本の道が、桃里村のメインストリートであった。

明治20年代の古地図にみられる鍛冶屋跡に隣接する井戸（内側を石積みにした掘り抜き井戸）もこの石道のそばに残っている（図版31）。村は、何回か小刻みに近距離で移動しているが、その範囲を囲むように石積み（グスク）の猪垣が大きくめぐらされ、その内側には、松の抱護林の並木が続いていた（現在、石積みの名残りが村の



図版30 a. 廃村時の桃里村跡地（左側）（正面の道は水浜に通じる）



図版30 b. 廃村時の桃里村跡地（背景は跡形もないペーフ山の方向）

北西方向の隅にみられる)。また、メインストリートと西の地点には、垣との交差する地点にはそれぞれ門と大きなデイゴの木が目印のようにあったという。そして、桃里村と他の村をむすぶ道には、村内を南北に通る二本の道が南のユブサ田のあたりで一本になり、カラ岳の東の街道=ウヤケバル道に出て、盛山村・白保村へと向う道と、村の西側のウン田のそばを通り、北上してトウル橋・フフアナン川をこえ、ヌバル崎の坂をのぼり、下り坂の途中からイノーダの浜道に出て、伊原間村に向かう道の二つがあった。

桃里村は、1732年、野底村や高那村と同時に創建が王府によって許可され、翌年の秋、実際の「村建」が開始された<sup>(1)</sup>。

桃里村の「村建」の以前から、すでに開墾や用材の

調達、牛馬の放牧などのために島民がこの地を利用していたと考えられる。とりわけ、官良・白保の人々にとっては、生活圏=テリトリーの一部であった。オモト連山を西に見て、水岳・カタフタ岳・カラ岳を南の境とし、北は通路川、フフアナン川を越え「いなふた=伊能宇田」の一帯までが一続きの土地と考えられてきた。別の史料<sup>(2)</sup>によると、「たうたと」の地に「桃里村」が建てられたとあるが、この「たう」=桃という文脈で表される「トウ」の語は、もともと「低くなった所・窪み」を表す言葉である<sup>(3)</sup>。まさに、その名の通り、この一帯は、小さな丘がくり返し続き、その間に水田となりうる湿地が点在する、山と海に囲まれた地域であった。

村建てしたばかりの桃里村は、最初の土地が不適当であったためか、または1734年に設立が許可された伊原間村との関係か、1734に早々と「比屋部野」に移転している<sup>(4)</sup>。

「比屋部=ビヤーブ」という地名は、「ペーフ」にも通じることから、地元の人が言う「ペーフ山」(今は採石によって跡形もない)の南側、現在残る桃里村跡に近い場所に落ち着いたものとみられる。

当初、石垣島の各村からの移住を700～800人予定していたが、計画は修正され、560人で始まることになった。だが、入植4年後の1737年には、何故か、桃里村の人口は480人になっている<sup>(5)</sup>。おそらく、実際の入植は、これに近い人数で行われたのであろう。その後、1753年には551人に、さらに1761年には700人ちかくとなり、着実に増加していく<sup>(6)</sup>。

八重山の各村の人口は、すでに波照間島・黒島などを筆頭に、1680年代から増えはじめ、1690年代以降には顕著な増加を示していた。この原因については、何人かの研究者



図版31. 桃里村井戸  
(廃村まで使用していた)

の見解が出されている<sup>⑦</sup>が、いまだ明確な答えが提示されているとは思われない。ともあれ、はっきりしているのは、この人口圧力が、人々を食糧の確保の必要にかりたてたということである。一般に、人口圧力を生産面で解消するためには、既耕地での作付け頻度を上げること、つまり集約化をすすめるか、または未耕地への進出にのりだすか、のいずれかであるが、当時の八重山では、後者の道をとることになる。それが開墾のための「出作り」であった。王府も、ようやくその必要に気付いたのか、1711年奥武親雲上の来島を機に、田畠の開墾を進める専任の役人のポストを新設した<sup>⑧</sup>。その間にも、人口は爆発的に増加し続け、1675年から1737年までの約60年間で4倍近くまで膨張していた。こうしたなかで、まず人口圧力に最も苦しむ黒島から、1692年平得村に220人、1703年鳩間村に150人送り出され、波照間島からも1713年、白保村に300人余りが移住する。既存村への移住と未耕地への「出作り」が、とりあえず緊急の対策とされたのである。このあとに、本格的な新村創設がはじまるが、こうした状況の中で、桃里村がつくられた。

桃里の地域には、既に石垣村、登野城村、平得村、宮良村、白保村からの「出作り」人が集中していた<sup>⑨</sup>。おそらく「出作り」の段階では北のフファン川から南のカラ岳までの小丘陵での畠作に従事することが主で、湿地の水田開発を行う余裕はなかったと思われる。これに対し、新たにこの地に村がつくられ、与人・目差・耕作筆者などの役人の指図を受けるようになり、まとまった労働力によってはじめて水田=上納田の開発が可能となったこと、このことが新村創建のかくれた意味のひとつであろう。つまり、人口圧力からくる自然発生的な食糧確保のための畠作中心の「出作り」と、新たな村建てによって、未利用地であった湿地を水田に変えていき、生産物のうち上納部分を拡大することとの間には、あきらかに大きな意味の違いがある。この点において、黒島爲一氏がはじめて鋭く提示した問題、すなわち地元役人層は近世期をとうして常に恣意的に、役職ポストの増加、夫役の私用、「おゑか田」の所有など既得権の拡大をめざしていて、この人口爆発期においても、そのことが言えるとする見解<sup>⑩</sup>が注目される。この桃里村の、村建てから大津波までの40年間のなかで、おそらく他の各村と同様に、人口圧力のもとに、湿地部分の水田開発が大規模に行われたであろうこと、それとともにそれらの主要な部分は「おゑか田」として設定されたのではないかという推測が残るのである。

というのも、桃里村の西にはカラ岳周辺の豊富な湧き水を利用した水田が広がっているが、その中のひときわ大きな、一マスが8~9反ほどの田があり、この田は「パンナ主」がつくった田であるという伝承が残っているからである。「パンナ主」の収穫は、カラ岳のそばの小山の「キンムリ」と同じ高さのシラを積むほどであった。そして、収穫物を四箇まで運ぶのに、馬で運ぶことが出来ず、サバニを何隻か組んで運び、宮良湾の津口を割ってバリをつくり、大浜村から陸路で運んだという。この「パンナ主」伝説は、古琉球末期から近世初頭の歴史上の人物であるハンナ主=長栄氏五世・石垣親雲上信本を想定して

いるが、もちろんこの人物と直接に結びつけるわけにはいかない。しかし、役職や権勢に伴う「おゑか田」の＜起源＞を語っているのは事実であろう。歴史的には、大津波前の40年のあいだに起こった事柄の伝説化ではないかと思う。

1771年3月、この地に突如として大津波が襲来する。桃里村は「村の東の部分を少々破壊されたものの、村人にはそれほどの影響はなかった」が、桃里村の属地内の「仲与銘村」は壊滅した。桃里村の生き残り689人、仲与銘村の死者283人（家数52軒と言うから、一戸あたり平均5.4人と言う家族構成であったことがわかる）<sup>10</sup>。村の立地が高台であったか、低地であったかによって、運命をわけたのである。

大津波の結果、八重山の人口は2,1798人となり、人口爆発期の1740年前後の人口に逆戻りした。しかも、これ以降、何故か八重山の人口は大津波以前の水準を回復するどころか、近世末期にむかって、ますます減少する一方であった。わが桃里村の津波以後については、次の「岳昌姓家譜大宗」のなかの六世致善（彼は1803年桃里村榎山筆者となつた）の事蹟にかんする「覚」（1806年9月9日の日付）の内容が興味深い。

それによれば、「桃里村には以前、1000人余りの人口があった（註－仲与銘村の人口も併せて）が、36年前の津波の時に耕地を引き崩され、その翌年から飢饉や疫病などの災難が打ち続き、年ごとに疲れ入り、人口も170人になってしまい、大変難儀に及んでいたが、去る申年（1800年）からは役人の下知を受けて、耕作場を走り回り、百姓とも熟談したうえ、田畠を明け開き、農業に精を出した結果、去る亥年（1803年）以来、年貢の上納も出来るようになり、去年（1805年）からは年貢未進分50石も納め、御用布も不足なく準備できることになった」という。

以上のことから、二つの問題が浮かび上がってくる。

第一に、個別・桃里村の津波後の人口の推移をみると、津波後最初の30年間で、700人以上から170人へと四分の一以下に激減していることである。この後、「覚」によれば、年貢の上納も出来るようになり、「回復」したかのような印象をあたえるが、1854年前後とおもわれる人頭税賦課台帳をみると、桃里村の課税対象人口は上・中・下・下々の男女あわせて14人であり、おそらく総人口30人台であろうという事実がある<sup>11</sup>。さらに、1873年には十戸・三十四人、1892年には二十六人へと衰微していく<sup>12</sup>。

このことは、津波によって人口的にたいした被害を受けなかった桃里村の場合でも、津波後の30年たらずの早い時期に、人口面で回復不能の致命的な打撃を受けていたことを意味する。つまり、これは自然災害以上の社会的要因を考えなければ、説明がつかない事柄ではないだろうか。

第二に、そこで、この原因論であるが、これまで津波後におこった飢饉や疫病の猛威によって、人口が激減したとの説明がなされてきた。蔵元から王府への報告でも、たびかさなる飢饉や疫病で数百から数千の死者が繰り返し出たことが言われている<sup>13</sup>。桃里村に関

する「覺」でも、飢饉と疫病に原因ありとする点で、これらの報告を踏襲している。

しかし、まず飢饉と疫病とは、原因論の範疇としてはしっかりと区別する必要がある。疫病は、十七世紀前半から「疱瘡」などのはやり病いの例が登場している。その他「麻疹」も存在した。つまり、疫病はいつの時代でも常に存在した。劇的な被害をあたえるものとして、いつも「マラリア」が想起されるが、これも食糧事情が悪く、体力が落ちている場合に甚大な被害を受けるのであって、この点で疫病の類いは、飢饉の状況下で威力を發揮する。すなわち、疫病と飢饉を同列にかんがえてはならず、飢饉こそが根本的な原因であろう。桃里村でも、津波のあと、まず飢饉が発生したのである。海拔30～35mのこの土地も多少なりとも海水に洗われたことは想像できる。このことで作物は焼き腐れ、その年の収穫は壊滅した。その後、何年かはこれまでの収量水準を下回る年がつづいたであろう。

また、台風の被害や天候の不順、それに病虫害の発生が運悪くかさなったかもしれない。しかし、ここでもこれらのことが即ち死に至る「飢饉」の直接の引き金になったとする、通常の理解は疑ってかからなければならない。

ここで、ひとつの推算をしてみよう。さきに述べた1854年前後の人頭税賦課台帳から、八重山平均の課税人口と（老人・子供の）非課税人口の割合=5：4を使い、14人で2.77石という桃里村の上納米を、仮に課税人の年齢構成が不变として大津波直後の人口700人にあてはめると、当時の上納米は、78.945石となり、平均反収0.5石として、この完済のためだけに15.789町の水田を使わなければならぬことになる。これに村人の夫役を耕作に私用する役人の「おゑか田」を加えたら、どういうことになるか。こうした水田を中心とした収奪分は、どのような状況でも優先的に考えられ、つねに一定の収奪が要求されたとすれば、そのしわよせが、畠作を中心とするイモ・粟・麦・モロコシ・キビ・豆などの食糧分におよぶのは当然である。しかも、稻・粟・麦などの穀物生産は、基本的に同じ作期をとるために、天候がおもわしくない場合には不作ないしは収穫半減もめずらしくない。すなわち、もともと不安定な耕作システムの上に、相当量の収奪分がつねに課せられた近世八重山の社会体制は、本質的に「飢饉」をくりかえす体質をもっている。これを切り抜ける手段は、①食糧生産のための耕地を拡大するか、②より集約的な農耕技術の採用か、または③収奪分から食糧を備蓄し「飢饉」に際して供給するか、であるが、これらの手段はいずれも人口増加期に準備されてはじめて意味を持つのであり、人口停滞や減少の時期に入ったあとでは遅いのである。

大津波の一撃は、この近世八重山社会のもろい体質を露呈させたといえる。桃里村では、20年たった1792年には、すでに疲弊して、租税や御用布の上納が不可能な状況に立ち至り、白保与人が検者として派遣されている<sup>19</sup>。ユカルピトたちは、こうした事態になっても、上納物をかきあつめることだけに専念し、みずからの「成果」を蔵元を通して王

府に報告して褒賞を願い出でていたのである。

## 二. 仲夢御嶽の謎

桃里村の御嶽（オン）として、仲夢御嶽の名がでてくるのは、次の大津波の時の記録からである。「番所から巳の方角に仲夢御嶽がある。但し、この御嶽は、元来は番所から卯の方角にあったが、大津波で流され、森も枯れてしまったので、同所（番所）から 30 間ばかり南にいったくいん田」という森に、1773 年、野国親雲上が在番の時に訴え出て、お移し申し上げ、これまでのよう崇敬している<sup>⑩</sup>。

これをみれば、疑いもなく仲夢御嶽は桃里村のオンであるが、実はこの以前、王府編纂の『琉球国由来記』やその原本とみられる『八重山島由来記』には、宮良村のオンとして仲夢御嶽が登場している。しかも、その登場のしかたに、やや特異的なところがある。

その当時、17 世紀末、宮良村と白保村とは同じ役人の統括のもとにある兄弟村であったが、両村に今も現存する 6 つのオンをその由来とともに挙げながら、それとは別に由来も記せず、ボツンと独立して仲夢御嶽を宮良村のオンとして紹介しているのである。もちろん、現在も宮良・白保の居住地周辺に、仲夢御嶽なるオンは存在しない。このことから、仲夢御嶽は、すでに十七世紀後半の段階で、宮良・白保の村内にはないが、しかしその存在は両村の人々によって彼らのテリトリーの中で確認され、つながりが続いているオンであったと思われる<sup>⑪</sup>。

宮良村のオンから桃里村のオンへ。一見、不思議に思われるこのことも、「なかゆめ」という御嶽名が地名としての「なかゆめ」に由来するのかもしれないと考えれば、手掛かりがないわけではない。

1768 年の『与世山親方八重山島規模帳』には、「桃里村地方之内、仲与目、いなふた、前原ト申作場、大浜・宮良村・野底三ヶ村江地方致配分置候処、大浜・宮良、武ヶ村ハ遠所不最寄之所ニ而、当分一兩人被差越、畠作仕候付、村々ヨリ下々之者共相集り、致作職候トテ、徒事而已相好、不締之儀共有之由、・・・・・」また「仲夢津口之儀、桃里村ヨリ毫里余之所ニ而、諸船潮懸之砌、自然難船杯有之候得ハ、助船之働差支候」「然ハ、白保村之儀、頭数千式百人余ニ相及、作地不足之由候間、男女式百人程寄百姓ニテ、右仲与銘津本いなふた江小村建ニテ桃里村役人ニ申渡・・・・・」とある。

これを見ると、桃里村の範囲内に、「なかゆめ」という地名があったことがわかる。それでは、「なかゆめ」はいったい何処にあったのか。創建された仲夢村の範囲とされる「ナカヨミ・イノーダ・メーバル」は、以下の理由で、一里もあるイノーダの浜の一帯を指していると考えられる。

当初、仲与銘村の設立許可をもとめるまえに、1738 年、蔵元は「前原村」の許可申請をおこなった（王府は不許可）。その理由のなかで、桃里村と舟越村との間が三里もはな

れ、その間に位置する前原の沖には「津口」があることをあげている<sup>⑩</sup>。すなわち、ナカヨミとメーバルの地先には、それぞれ「津口」があったのである。現在、この地を望むと、スバル崎の端、イノーダの浜の南端（今の伊野田の舟着場）の沖に「津口」があり、また玉取崎の南にも「津口」がある。このことから「仲与銘津口」は、イノーダの浜の南端の地先の「津口」であると思われる。

このことは、1727年に編纂されたとみられる『八重山島由来記』と題された地誌<sup>⑪</sup>をみても、確かめられる。このなかで、石垣島東海岸の「津口」として、南から順番に、宮良津口、渡理（トーリ）津口、なかゆめ津口、ひひせ津口の名があげられている。「津口」とは沖のピーの割れ目であるが、ただの割れ目ではなく、その割れ目がイノーの中まで入り込み、船が入ってこれるほどでなくてはならない。船は津口と浜の中間に碇をおろすことになる。渡理津口は、トール川の沖の津口であり、そのすぐ北の津口が「なかゆめ津口」であるから、「なかゆめ津口」はスバル崎のすぐ北、イノーダの浜の南端に面した津口を意味している。

以上のことから、桃里村がつくられる以前から「なかゆめ津口」の名が存在しており、その対岸に「なかゆめ」の地があったとみて間違いない。

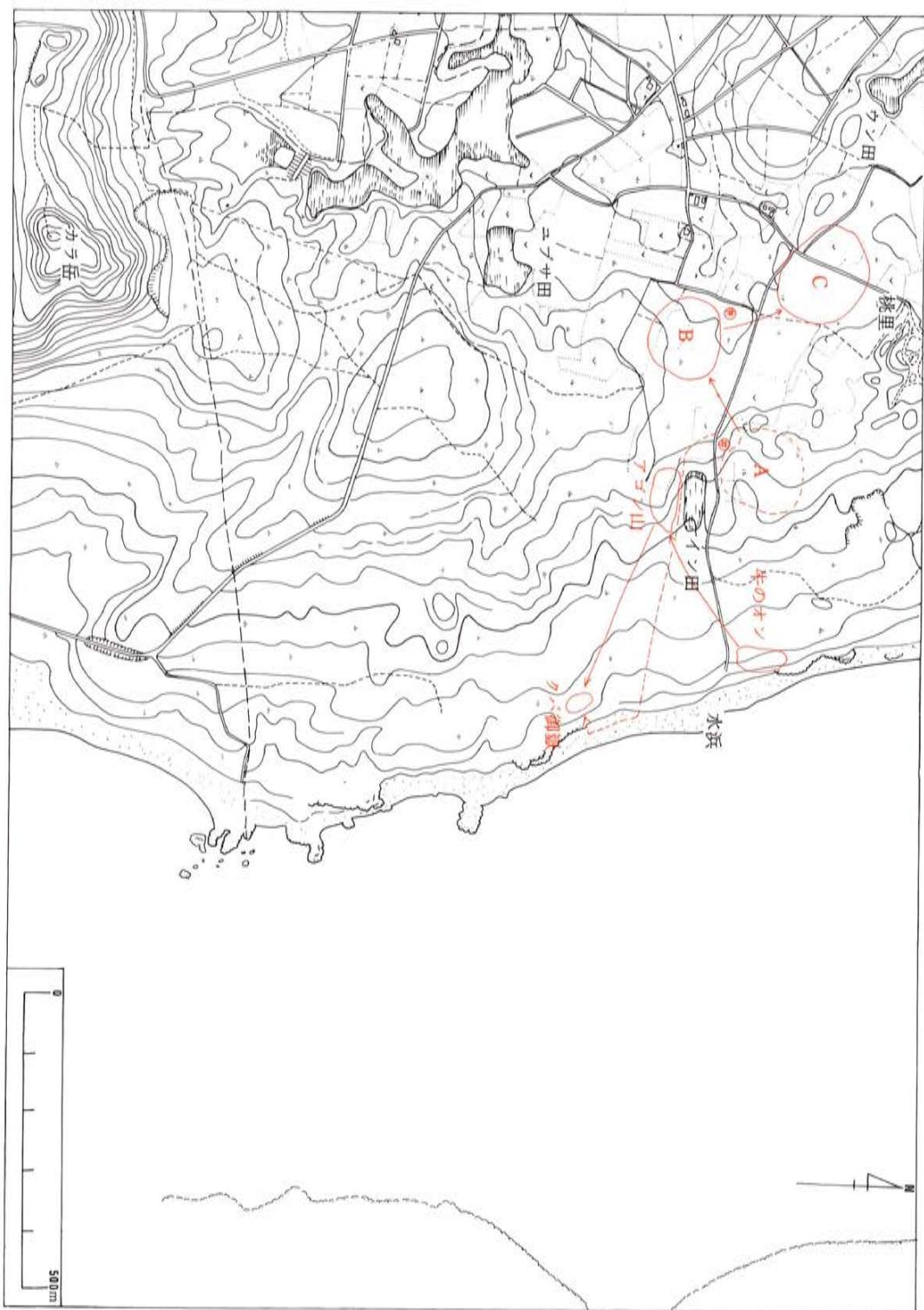
おそらく、フファン川の北、スバル崎の後背地からユヌガーラという小川がイノーダの浜に流れ出る一帯が「なかゆめ」であったのではないか。この地は、別の意味で興味をひかれる土地である。

それは、八重山式土器と外来陶磁器が共存して出土するスク時代の「伊野田遺跡」（キタスクマンゲーという岩山）や「マンゲ山遺跡」（ブーマンゲーとマンゲーマという二つの岩山）（図版32）がきわめて近接して存在するからである<sup>⑫</sup>。ここに、スク時代の拝所遺跡は発見されていないが、「なかゆめ」の地の御嶽としての仲夢御嶽が、かつてスク時代から存在したと想定してみたいのである。

それでは、宮良村との関係はどうなのか。『琉球国由来記』には、「宮良・白保く原集団」が最初、水岳からはじまり、「せつこま」「ふたらま」と移住して、現在の地に落ち着いたという伝承が記されている。このルートを逆にさかのぼっていくとき、水岳の先に、この原集団の故地として「なかゆめ」の地があったのではないか。そうとでも考えなければ、宮良村と仲夢御嶽とは結びつかない。勿論、もっと単純に考えることもできる。



図版32. キタスクマンゲー山とふもとのトウの地形



第20図 桃里村関連の地名

宮良・白保の人々が自分たちのテリトリーとして「なかゆめ」の地にやってきた時、拝所遺跡を発見し、「なかゆめ」の地の御嶽=「なかゆめ御嶽」として崇敬し、大切にしたということもありうる。

いずれの想像にしろ、「なかゆめ」の地に拝所遺跡が存在したと考えるわけである。

桃里村は、村建て当初、各村からの混成集団として、「なかゆめ」の地からはじまつた<sup>29</sup>。まもなく「比屋部野」に再移住することになり、自分たちのオンとして「なかゆめ御嶽」も移したものとおもわれる。

では、「ペーフ野」に移った桃里村の仲夢御嶽は何処なのか。

そこで、再び、大津波前後の状況にたちかえって、検討してみよう。実は、この地で桃里村は少なくとも二回の村落移動をしているのである。現在、確認される廃村当時の村（村C）は、1877年に「村敷替」をおこなって移動してきた場所である。当時の桃里村および盛山村を担当する桃原目差の『目差役被仰付候以来日記』（以下、『日記』とよぶ）によれば、王府から派遣された風水師・与儀親雲上に、桃里村の立地や屋敷組みをみてもらった結果、よろしくないので、1877年4月ごろから新たな場所に移動しはじめている。のちの1893年にこの地をおとずれた笛森儀助は、当時の村の東南に、以前の村があり、今もかつての井戸から飲料水を得ていると述べている<sup>30</sup>が、これは『日記』の内容とほぼ符合する。事実、現在残る村跡から100mほど東南の位置に井戸があり、しかもその周辺には住居跡があったという証言が得られた。

しかし、この住居跡（村B）は、大津波の時の村跡ではない。なぜなら、さきにみたように、大津波前後、村番所の南にくいん田<sup>31</sup>という森があったが、くいん田<sup>31</sup>はこの住居跡からさらに100m以上東にいったところにあった実際の田であり（今はキビ畑になっている）（図版33）、そのすぐ南には「アゴン山」とよばれる森が今もある。また、くいん田<sup>31</sup>の手前には、かつて別の掘り抜き井戸があったという証言もある。つまり、大津波の時の村（村A）は、現在の村跡から水浜にむかって東に200mいった道の北側の一帯にあった



図版33 a. イン田跡（背景の森山はアゴン山）



図版33 b. イン田跡（左側の道は水浜に通じ、写真にない右側にはアゴン山がある）



第21図 桃里村の移動と御嶽の移動

ったと考えられる。

前掲の古記録によれば、桃里村の仲夢御嶽は、大津波以前には村番所から「卯（真東）の方角」にあったという。地図にあるようにその方角には、現在、牛のオンのある森がある。問題の「クバ御嶽」は、どちらかといえば辰の方角である。そこで、古記録の方角記載が正確であるかの吟味をしなくてはならない。そのなかで、村番所から「亥の方角に十九町十一間いくと、トール橋がある」とか「番所から三十間ほど南側のくいん田」という森」=津波後に移された仲夢御嶽が、番所から（真南ではない）巳の方角にあるという記述があるが、地図にみるようこれほんば正確な方角を表しているといえる。

現在、牛のオンがある森は土砂で埋められ、狭められており、その中に入って調べてみたが、馬蹄形の小さな石積みと、その内外の2つの香炉石、立石の拵み所以外には遺物を見出せなかった。牛のオンは、明治期ごろから、大川・登野城・真栄里・白保の人でつくられた桃里牧場（組合）のオンであるが2月・9月の牛馬の願いにつかわれたのみで、それがいつ頃に遡ってつくられたかはわからない。また、いん田の南のアゴン山（アゴン=アコウの木）も、中に入ると大岩がいくつもあり、マニやアコウの大木が茂って、いかにもそれらしい雰囲気がただよう岩山であるが、かつてはその岩陰に人骨があったという証言もあって、捜してみたがみあたらなかった。にもかかわらず、さきの桃里村の古記録からすれば、これらの場所が仲夢御嶽跡であったことの確率はたかいと思われる。

ところで『日記』には、次のように桃原目差が仲夢御嶽に参詣する様子が記されている。

1876年10月15日、種子取行事を2日後にひかえて「御嶽願日柄相当候付、桃里村つかさ人呼寄、御香一結・みはな式合・御五水式合・供物相調、八ツ時分（註一午後二時）出立時後、仲よミ御嶽参着、御願相済、（中略）夫より出立、七ツ頭（註一午後三時）盛山村詰宿参着、（後略）」。

1877年3月24日、3月物忌（浜下り）の前日、「九ツ時分（註一正午）（註一四箇を）出立、七ツ頭（註一午後三時）桃里村詰宿参着、つかさ人呼寄、仲よミ御嶽参詣、六つ頭（註一午後五時）出立、時後盛山村参着、（後略）」。

この行程の時間を見ると、当時の桃里村内（村B）から仲夢御嶽までは、必ずしも村に近接した距離ではなく、やや離れていたことがうかがえる。

### 三. 「クバ御嶽」=仲夢御嶽

1990年の3月、ようやく探し当てた「クバ御嶽（オン）」は、浜から4～5m急に高くなつた斜面を登り、モクマオウの防潮林を15mほど行ったところに（図版34）、雑木に囲まれてあった。やや低いけれど、しっかりした石積みがめぐらされ、入り口に近いところ

ろに2本のクバの樹があるのがすぐ目にはいってきた。石積みのそとには、マーニの叢生のまわりにシャコ貝が点々とおかれており、また、すこし離れた場所には、水たまりのような小さな池があった。クバの樹の根元には、よく見かける口のひろい焼き物の香炉がおかれ、そのそばには、サンゴ石の香炉も何個かころがっていた。どうやら、奥の方にも石積みがまわっているらしい。ともかく、伐開からはじめることになった。



図版34. 浜から「クバ御嶽（オン）」への入り口を望む

こうして、二度目の8月の調査でようやく全体の輪郭がみえてきた。入り口から二方向に走る石積みは途中で崩れているが、奥の石積みは明瞭に残っていた。横幅、37.5m、入り口から奥までは32.5m。雑木やススキを伐開してみると、4本のクバの樹があり（1本は枯れている）、石積みの内側は全体としてやや急な斜面をなしている。また、浜側の入り口部分には、ゆるく階段状に石が敷かれ、両脇の石積みのつくるところまで5m続いている。

遺物としては、サンゴ石製の香炉が8個（そのうち、大きいものが4個、小さいものが4個）焼き物の香炉が1個、焼き物の碗が4個、花差が6個、貝製の灯明が3個みつかった。これらは、土砂とともに流されたものか、おおむね入り口部分に集中していた。

最も残念だったのは、ウブ（イビ）の跡を確認できなかったことである。ただ、入り口部分には、道を清めるように、小さなサンゴのかけらを敷いた跡が二層にわかつて見られ、そのサンゴ道は、入り口から左にまがり、枯れたクバの樹の方向に向かっているように観察された。さらに調査の余地があるが、南側の枯れたクバの樹あたりにウブがあった可能性が残されている。

「クバ御嶽」そのものが語るデータが少いままで、調査が終ったあとの9月9日、このオンの正体を告げる決定的な証言があらわれた。この日、かねてから希望していた、おそらく桃里村ただ一人の生き残りであろう仲道マンダルさん（84歳）と息子さんたちに、桃里村跡や「クバ御嶽」の現場に同行していただくことが実現したのである。彼女は、7歳で宮良にひきあげて以来、はじめて桃里村の地をおとずれるということであった。

その結果、実に貴重ないくつかの事柄があきらかになった。廃村直前の桃里村には、当時、2つのオンが東と西にあったという。西のオンは、村のすぐ南西に近接しており、「サン（申）ヌバ（方）ヌオン」と呼ばれた。これは、現在、村跡のすぐ南にある森のことであり、数年前の県教委の八重山御嶽調査や最近の牧野清氏の『八重山のお嶽』において

て「仲夢御嶽」とされたオンである。だが、私は、このオンが明治20年代の古地図には載っていない<sup>14</sup>ことから、これを「仲夢御嶽」とすることは以前から疑問視していた。

一方、東のオンは浜に近いところにあったという証言から、水浜において、ともかくまず「クバ御嶽」をみていただくことにした。水浜から岩場を歩きながら、村から浜にでる道についてたずねると、現在の村跡からまっすぐ水浜にでる道以外にもう一本の道があったという。それは「田んぼをみながら、その南をとおって浜におりる道」であり、ちょうど「クバ御嶽」に登る地点から50mほど手前に出ることがわかった<sup>15</sup>。さらに、「クバ御嶽」にたどりついた時、私の紹介のまえに「ここあたりに、池があったはずだが・・・」というマンダルさんの話を聞いて、彼女がたしかにこの場所にきたことがあるのを確信したのである。

マンダルさんの話によれば、母親におんぶされて、二度ほどこの場所、「クバ御嶽」にきたことがある。今とちがい、森のようになっていて、石積みのなかにオンヤー（拝殿）があり、そのなかに香炉があったのを覚えている。オンヤーからすこし離れて、ウブがあつたが、今その場所は、はっきりと思い出せない。このオンは、豊年祭などでつかっていた。そばの池は、このオンに来たとき、洗いものをする場合につかったということであった。

残念ながら、「クバ御嶽」を何と呼んでいたかはおぼえていないとのことだったが、このオンが桃里村のオンであり、しかも、以下の若干の点から西の「サンヌバヌオン」よりも古いオンとみなしてよからう。

桃原目差の『日記』の中で、通常、仲夢御嶽には馬で参詣しており、しかもその所在が村からやや離れたところにあったと思われること、それに何よりも「サンヌバヌオン」がその時代に存在した証拠がない（『日記』では仲夢御嶽ひとつだけが桃里村のオンとして出てくる）ことから、浜の「クバ御嶽」が仲夢御嶽であると考えられる。

かくて、1734年「なかゆめ」からこの地に移転した桃里村の仲夢御嶽は、最初、水浜の北に建てられ、津波で破壊されたのち、イン田の南のアゴン山に移され、さらにいつの頃か、現在の「クバ御嶽」として再移転したものと推測される。

石垣島の多くのオンも、大津波による破壊のあと再建、再移転して現在にいたっているが、こうした事情は、仲夢御嶽とまったく同じであり、仲夢御嶽の価値がそれと比べて遜色があるとは思われない。しかも、私の推測では、仲夢御嶽はスク時代にまでさかのぼる可能性をもっている。祀る人と祀る土地が変わっても、連綿として何かが流れているのである。こうした仲夢御嶽の流れと桃里村の流れとを重複させてみる必要がある。1876～8年、『日記』にみえるかぎりで、3月には浜に下り、村人全員でムニンソーズをやり、6月には仲夢御嶽に集まり、「□肴一つ、吸物二ツ、取肴一つ」のささやかな規式通りブーバナアギの結願をおこない、十月には「種子取之前迎ソーズ」として田仕事を休む桃里

村の村人の年中祭祀サイクルの中心に仲夢御嶽があった。しかも、このときの村人は全員でも33～4人であったという数字が胸にしみる。

#### <謝辞>

とくに桃里村ゆかりの人達、宮良の仲道マンダルさん、前花哲雄さん、白保の宮良松さんに多くのことを教えていただいた。また、豊見山和行、黒島爲一の両氏には史料の提供や読解に手を貸していただいた。

註 (1)『八重山嶋年來記』、雍正十年の条。

(2)『參遣狀』雍正十年の条には、「(前略)然者、右とたしたと之儀、地方廣ク、津口有之、用水茂宜キ所=而候間、村立、桃里与唱、(後略)」とあるが、「たしたと」は、村名=桃里との関連から、「たうたと」を誤記したものと思われる。

この点について岩崎卓爾「八重山研究」(『岩崎卓爾一巻全集』1974)では「多宇多」となっているが、彼が依拠する史料は今のところ不明である。

また、この「たうたと」の地がどこにあったかを特定するうえで、「津口有之」の記述が注目される。註⑩参照。

(3)沖縄本島では、トウは平坦な地形、ドウは湾曲した地形をあらわす言葉とされているが(『地名を歩く』1991)、八重山ではドウはトウの転化であり、いずれも「低くなった地形・窪み」の意味をもつ。こうした事例は石垣島にもみられるが、とくに波照間島に多く残っている。波照間では石灰岩が多い畑のなかでも、低くなって土壤が流れこみやすい部分を「トウビテ」といい、高くなって石が多い部分の「ウガリビテ」と区別する。波照間の「トウ」がつく地名の多さについては、C.OUWEHAND,HATERUMA(1985)を参照。

(4)『八重山嶋年來記』、雍正十二年の条。

(5)『參遣狀』、乾隆二年の条。

(6)『參遣狀』、乾隆十八年・二六年の条。

(7)例えば、牧野清『明和の大津波』1968、『新八重山歴史』1972、玉津博克「近世期前半の八重山－人口動態と村落編成を中心にして－」1980。この問題についての参考文献は、『南西諸島農耕における南方的要素』(渡部忠世編)1982のⅧ章、島嶼的環境における人口変動(坪内良博)を参照。

(8)『八重山嶋年來記』、康熙五十年の条。

(9)『八重山嶋年來記』、雍正十年の条。

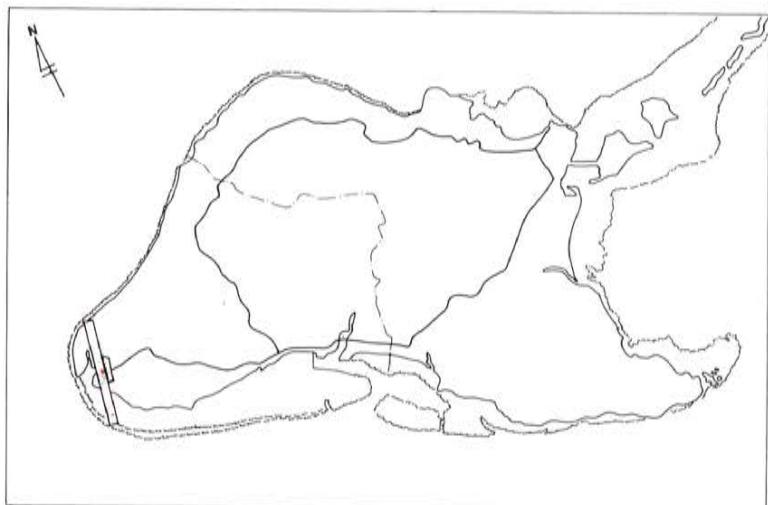
(10)黒島爲一「人頭税」(『新・琉球史(近世編・下)』1990所収)

(11)『大波之時各村之形行書』(牧野『明和の大津波』所収)

(12)『人頭税賦課台帳』(『八重山博物館所蔵文書81』所収)

- (13)『庶務書類綴』(『喜舎場家資料37』所収)
- (14)同上に引用された「御問合写」「御問合扣」による。
- (15)『山陽姓家譜小宗』(『八重山博物館所蔵文書57』所収)中の七世・長演(当時、白保与人)に関する記事に、「乾隆五十七年壬子、桃里村既疲而、不能償租税及諸用物件、又甚怠農業、因是、承令為檢者職……」とある。
- (16)『参遣状』康熙四十三年(1704)の条に、「其嶋ニ有之候から木、弘光弐年在番あらかき、きなわ山々被相改、(中略)三ヶ所ニ七拾四本有之候処、此節各頭取ニ而何連も召列、被相改候得者、宮良之内中よめ山(中略)メ六ヶ所より三百四拾三本被相改候帳被差越、遂被露候(後略)」とあり、おそらくフファン川の北の「中よめ山」が宮良のテリトリー内にある認識が示されている。
- (17)『参遣状』乾隆三年の条。
- (18)『八重山由来記』(『八重山博物館紀要三号』1983所収)の末尾に「丁未四月五日」とあるが、地誌としての性格が宮古の『雍正旧記』と同じなので、雍正五年丁未(1727)に成立したものと思われる。
- (19)その概要については、沖縄県教育委員会「石垣島の遺跡」1979を参照。
- (20)既に触れたが、桃里村は、最初「たうたと」の地に創建された。註(2)の『参遣状』の記述にあるように、この地は「土地が広く、津口もあり、用水の便もよい所」であった。トール川以北には、「トール津口」と「ナカヨメ津口」の二つの津口、川(カーラ)は、トール川とフファン川の二つがあることから、トール川以北の地が考えられる。
- とくに、フファン川を渡ると、坂道になり、左側にキタスクマングー山、そのふもとに、かつて水田であった陥没したような「トウ」の地形が目に入る(図版32)。この一帯から「なかゆめ」の地になるが、このあたりに「トウヤーのター屋敷」と呼ばれる場所があったという伝承が白保にある。また、右側のヌバル崎には、白保の多字家に関する大津波のさいの人魚伝説もある。このことは、この地と白保の多字家との結びつきが強く、多字家の屋号「トウヤー」がこの一帯の地形に関係することを示唆している。こうした点から「たうたと」もまた、この一帯を指すと思われる。
- (21) 笹森儀助『南島探検』1894
- (22)「八重山古地図展—手書きによる明治期の村絵図—」1989の「桃里村絵図」では、村Cの番所の前、現在ある「サンヌバヌオン」の場所は畑になっている。
- (23)村Cから「クバオン」に向かう場合、この証言のように「イン田」と「アゴン山」のあいだの道を通り、浜に出る方が明らかに近道である。現在は、採石場に通じる広い道によって寸断され、様子が変っているが、この道がかつて使われていた形跡があった。

# 久米島空港拡張建設計画予定地内の遺跡分布調査





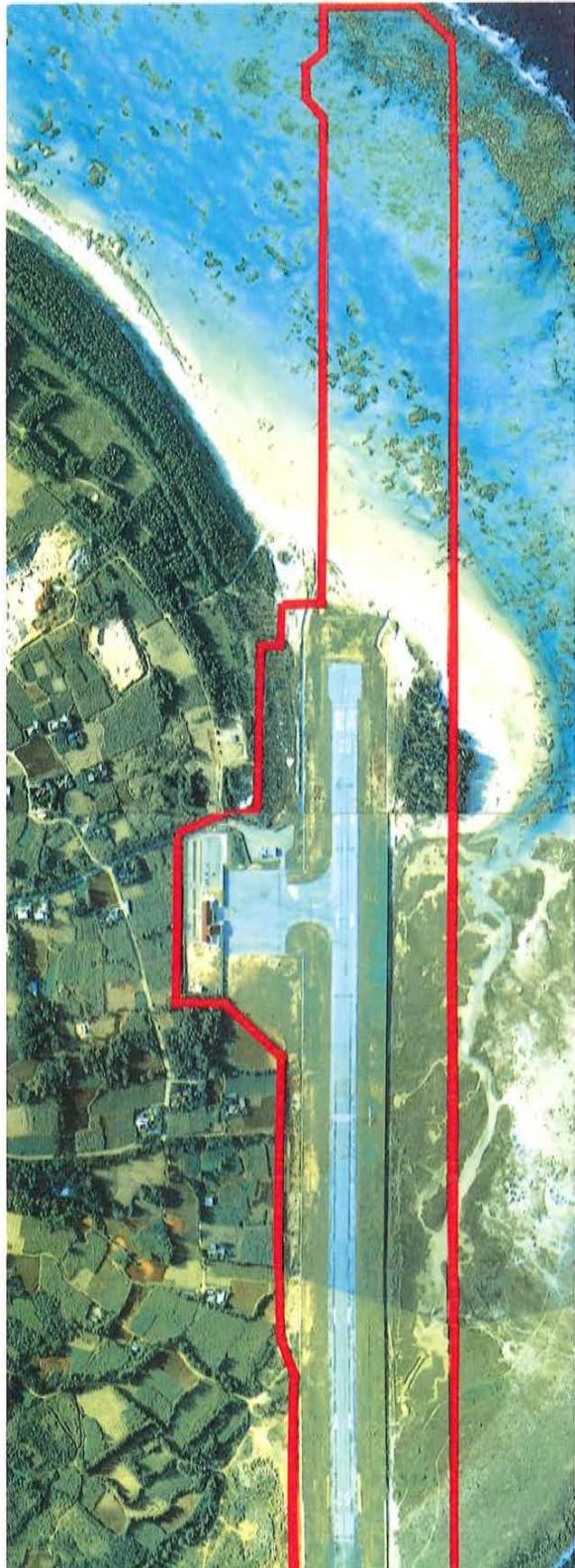
現空港周辺の地形（南西上空より）



同 上 （北側上空より）



同 上 （南側上空より）



久米島空港拡張設計画予定地と周辺の地形

## 第1章 調査に至る経緯

久米島空港は、1963年7月に米国民政府援助資金により現在地に建設され、1965年1月から民間航空により運行を開始している。その後、滑走路などを整備し、1968年よりYS-11型機が運行している。また、1972年の沖縄の本土復帰に伴い、本土の航空基準法に合わないということから、大幅な改修工事を実施し、1977年4月に滑走路長1200mで供用開始され、現在に至っている（沖縄県土木建築部1991）。

近年のリゾートブームに伴い、県外からの沖縄県への観光客は年々増加傾向にある。これと連動するかたちで離島観光も増加の一途をたどっている。久米島も例外でなく、久米島空港は單一路線でありながら、県内では石垣空港、宮古空港に次ぐ三番目の輸送実績をほこっているとともに、この傾向は今後とも需要の増加傾向が見込まれているという（沖縄県土木建築部1991）。

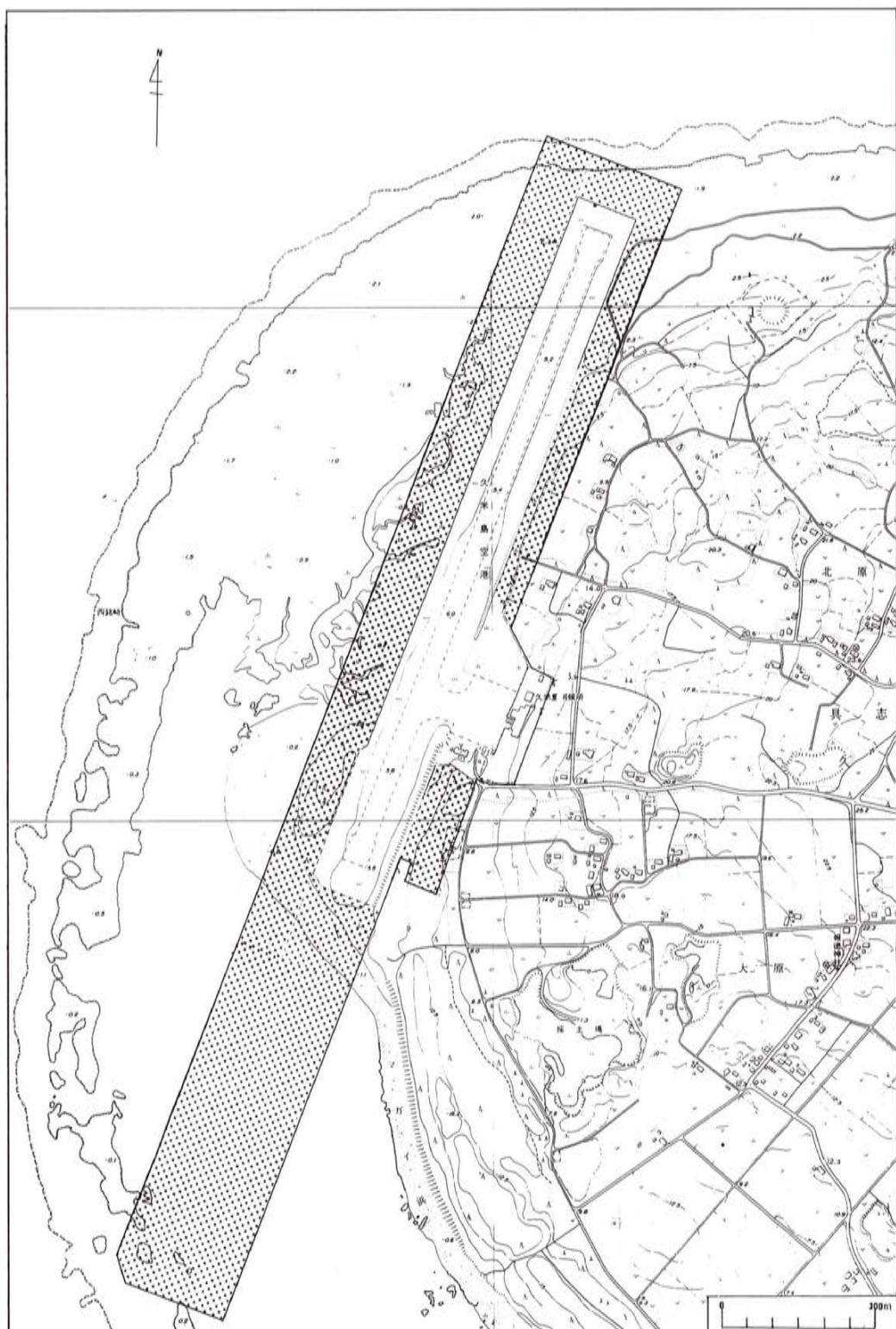
このようなことから、沖縄県では今後の需要増に対処するため、より大型の航空機の導入を図り効率的な輸送力を確保する目的から、現在の1200m滑走路を2000mに拡張する計画を進めていた。その結果、諸点からして既存空港での拡張が最良との結論に至っている（第1図）。

この拡張計画予定地内には、周知の遺跡として北原貝塚が存在するほか、この北原貝塚の立地する砂丘から清水貝塚に至る通称：大原砂丘は、県内でも有数の貝塚の密集地帯として知られる地域である。そのため、県教育委員会（所管：文化課）では、予定地内での文化財の分布調査を実施し、その所在と範囲を明らかにして空港建設設計画側との協議資料に資するとともに、文化財の適切な保護措置を講ずる目的から、国（文化庁）の補助を得て、1989～'91年度の3年度にわたって拡張計画のある予定地内の遺跡分布調査を実施した。

調査組織は、下記のとおりである。

調査責任者 高良 清敏（沖縄県教育委員会教育長、1989～'90年度）  
津留 健二（ 同 上 1991年度）

調査 総括 宜保榮治郎（沖縄県教育委員会文化課課長）  
上江洲 均（ 同 上 課長補佐、1989～'90年度）  
知念 勇（ 同 上 課長補佐、1991年度）  
安里 嗣淳（ 同 上 主幹兼埋蔵文化財係長、1989～'90  
年度）



第1図 久米島空港拡張建設設計画定地図（沖縄県土木建築部）

大城 慧（同	上	埋蔵文化財係長、1991年度）
調査事務 平田 與進（同	上	課長補佐、1989年度）
伊佐 真一（同	上	課長補佐、1990～'91年度）
仲里 哲雄（同	上	文化振興係長）
新垣 昌頼（同	上	文化振興係主任）
仲里 富代（同	上	文化振興係副主査、1989～'90年度）
上間 尚子（同	上	文化振興係副主査、1991年度）

調査指導 河原 純之（文化庁文化財調査主任調査官）  
渡辺 誠（名古屋大学文学部教授・考古学）

調査担当 盛本 烫（沖縄県教育委員会文化課専門員）

調査員 玉津 博克（沖縄県教育委員会文化課充て指導主事）  
大城 秀子（沖縄県教育委員会文化課専門員・臨任）

調査協力者 久手堅稔（具志川村文化財保護審議員・沖縄県文化財保護指導員）、沖縄県土木建築部空港課、具志川村役場空港課。

なお、資料整理および報告書作成にあたっては、下記のメンバーで行った。（五十音順）  
上原園子、大城勝江、我那覇悠子、城間千鶴子、照屋利子、当山慶子、外間瞳、  
仲宗根三枝子、盛本燃。

## 第2章 調査地の位置と環境

### 第1節 調査地の位置と自然環境

調査地は、久米島の西端に位置する（中表紙図参照）。調査地の所在地は、沖縄県久米島具志川村字北原に在する現久米島空港周辺一帯である。

当該地には、1967年の現久米島空港拡張工事によって発見された、沖縄後期の北原貝塚が所在する。貝塚は、発見の契機となった際の滑走路工事によって西側の一部は破壊されるとともに、その後の駐機場（エプロン）工事による記録保存によって消失してしまい、現状では駐機場（エプロン）南側に残存のみである（第2図）。

久米島は、沖縄本島・那覇の南西約95kmに浮かぶ55.69m<sup>2</sup>の略台形状を呈した島である。沖縄諸島域では最も西端に位置する。島の東側には奥武島、オーハ島の小島が隣接する。

行政区画上は、島の西半部が具志川村、東半部が仲里村となっている。

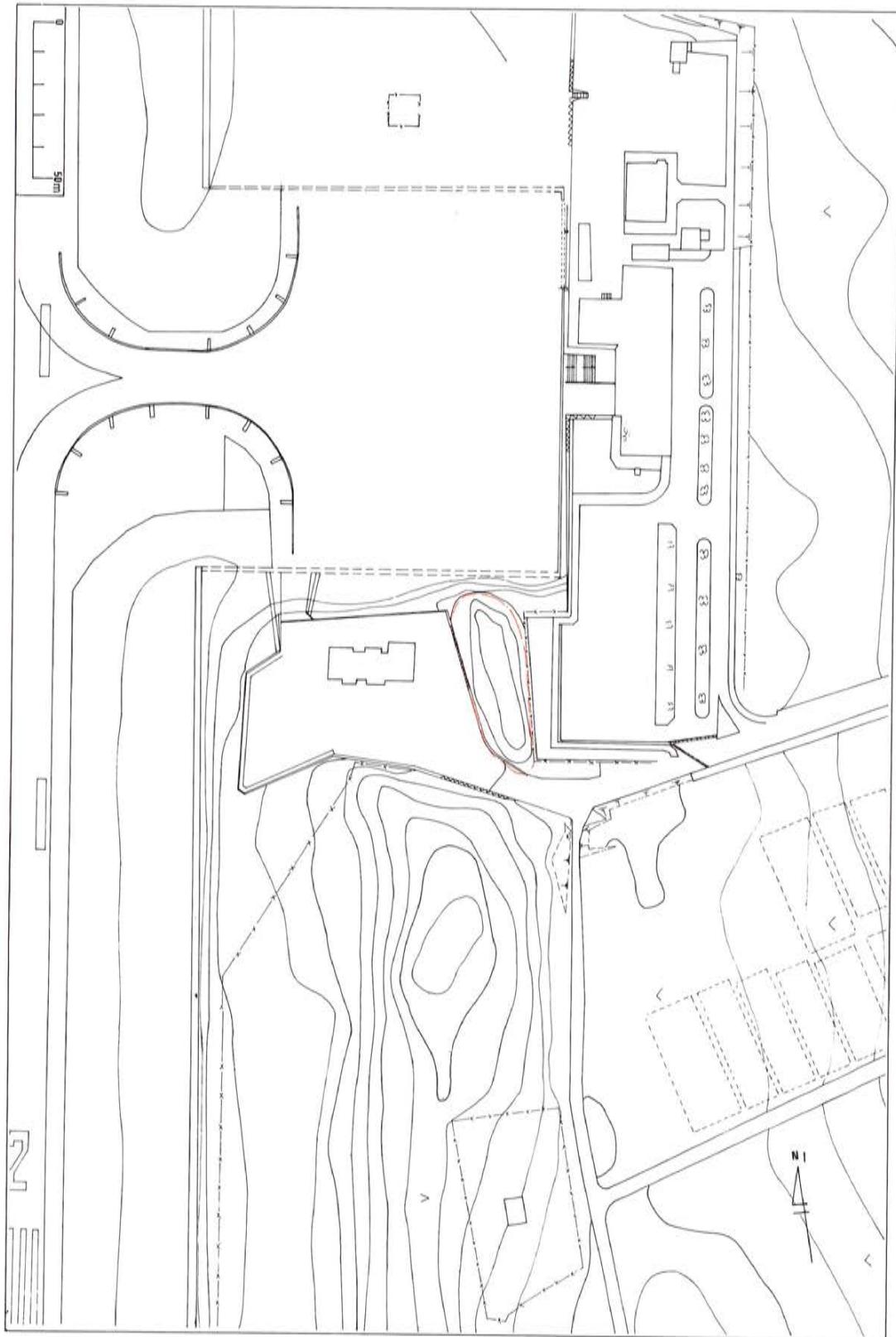
島は地質構造上古期火山区に属し、琉球列島では数少ない火成岩を主とする山地主体の島で、伊平屋島、慶良間諸島、石垣島、与那国島などとならんで高島に属する（目崎1988）。

このため、島は北部と南部の200～300m級の山地形を中心として、それに附着したようなかたちで広がる砂泥質の低地帯と、石灰岩の平地帯から構成される（大城1976）。とりわけ、島の西側には、海拔20～30mの石灰岩が舌状に張り出し、顕著な発達をみせている。また、山岳地帯に源を発して小河川が幾筋か通り、台地を深く刻み込んで、この石灰岩平地帯を経て海へ注いでいる。本貝塚に近い北部の富祖久岳（202.6m）、宇江城岳（309.5m）などの植物群落の垂直分布をみると、山頂付近は小竹で覆われているものの、その下位はシイやカシ類の広葉樹林が繁茂している（関1975）。

また、該島には沖縄地方ではめずらしい堡礁型のサンゴ礁がみられ、東方洋上にはウガンビシが釣針状に突出し、南西部にナンビシ、ハナリグヮーと続き、島尻崎をまわるメビシ、ウクビシ、イリビシと島を囲繞している（木崎編1975）。

このような自然環境に規定されてか、島の遺跡のほとんどは西側の石灰岩平地帯から南西海岸の砂丘地に分布している。このことは、島の北および東南海岸が急崖で海も深く、生活に適しないのに対し、西～西南海岸は上記したように低平な陸地と海岸砂丘、さらには漁撈活動としての必須の条件である礁湖（ラグーン）の発達が顕著であることなど、先史時代の生活を営むうえでの種々の条件を具備していることから首肯されよう。

主な遺跡としては、西側の石灰岩平地内の洞穴に立地する下地原洞穴遺跡（旧石器時代相当期）、ヤジヤーガマ洞穴遺跡（沖縄後期～グスク時代初頭期）、石灰岩台地上の太田辻遺跡（沖縄前V期）、南西から西側の砂丘上に形成された清水貝塚（沖縄後期）、大原貝塚



第2図 北原貝塚の現存範囲と周辺の地形図

群（沖縄前IV・V、同後期）などの沖縄考古学上でも著名な遺跡がある（第3図）。

調査地内に所在する北原貝塚も島の南西海岸から西海岸にかけて発達する、通称「大原砂丘」の北西端部に形成されている。該貝塚は、現空港駐機場を中心とするが、第3章で後述するように、すでに二度にわたる空港建設工事によって破壊を受けており、その正確な範囲は不明である。調査地付近での海拔高度は、10～12mである。

## 第2節 調査地周辺の遺跡

具志川村内の遺跡立地をみた場合、その地形との関係からして2大別される。

その一つは、鳥島集落の前あたりから久米島空港南端部あたりに至る海浜砂丘（通称：大原砂丘）の発達した南～南西海岸と、その背後の石灰岩台地に立地する遺跡群である。

他一つは、空港北側から具志川城跡あたりに至るリアス式状の海岸に面して立地する遺跡群である。

海岸線長は、前者が約5km、後者は約4kmである。さらに、これらは陸海の微地形も異なる。まず、陸の地形をみた場合、前者は背後に20～50mの低平な石灰岩平地を控えているのに対し、後者は海岸線に沿って筋状の石灰岩丘陵が2～3ほど南北に縱走する地形をなしている。

海岸地形をみると、前者は遠浅で沖合い約700mに島尻沖から延びてきたリーフが海岸線を包み込むように横たわっているのに対し、後者はリーフの発達が弱く、海岸線ぎりぎりまで海がせまり、急深になっている。

このような地形の差異は遺跡立地にも表れており、先史時代遺跡のあり方をみた場合、主として沖縄前期や同後期の遺跡は砂丘の発達した南海岸に集中するとともに、その規模も大きく、かつまた群をして途切れなく続いているようである。しかし、沖縄前期でも前V期の段階になると、それまで海浜砂丘上に生活の舞台をもっていた人々は、後背の石灰岩平地帯の開拓地へと移動し、後期になるとまた砂丘地へ戻ってくるようである。そして、前IV期後半～V期の段階になって遺跡が形成され始めるのが、北西海岸の石灰岩台地上である。北西海岸の遺跡をみた場合、1遺跡のみの沖縄後期の遺跡を除いては、そのほとんどが前IV～V期の遺跡である。

北西海岸の遺跡については、久手堅1982に詳述されているので、それを参照して頂くことにし、ここでは調査地に所在する北原貝塚の立地条件と関与すると思われる南西海岸の7遺跡について述べる。

なお、この記述は西里他1968、久手堅1979・1982、安里1974・1975、知念1976、高宮1982、盛本編1989、および盛本の踏査メモにもとづくものである。

## <石灰岩平地上の遺跡>

### 1. 大田辻遺跡

字西銘集落の南西約300～400mの小字大田辻原に所在する、沖縄前V期の遺跡である。遺跡は標高30m前後の石灰岩平地に立地している。一帯は、近年の圃場整備事業により旧地形が改変され、その面影はとどめていない。

遺跡の本格的な調査がなされたことはないが、これまでの採集資料や報告等からする限り、無文化した肥厚口縁（断面が略三角状を呈す）の宇座浜式土器を主体とする遺跡である。

## <砂丘上の遺跡>

### 2. ウルル貝塚

清水小学校の東北部に在する、ウルル御嶽一帯を中心とする沖縄後期の貝塚である。貝塚の範囲については判然としないが、御嶽を中心とした周辺の畑、約50m四方以上にわたって遺物の分布がみられる。

本貝塚も未だ本格的な発掘調査が実施されたことがなく、その範囲については不明な部分が多い。採集資料や報告などからすると、くびれ平底の沖縄後期土器や壺形のグスク土器などがみられることより、沖縄後期後半～グスク時代への移行期の貝塚と思われる。

なお、昨年本貝塚より、1点のみであるが中国古錢の五銖錢（初鑄BC118年）が表採されている。

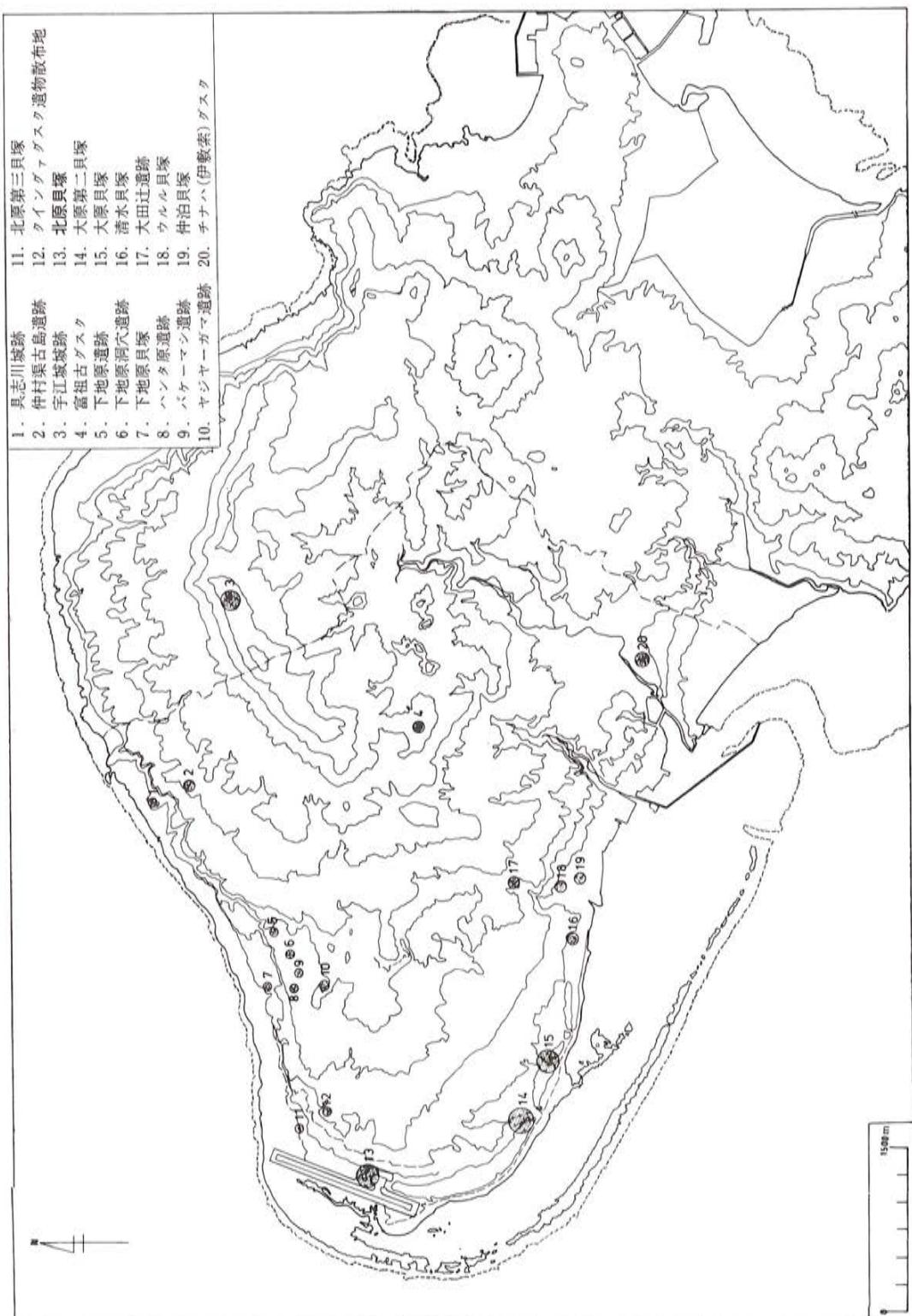
### 3. 仲泊貝塚

字仲泊集落後方の砂丘上に立地する沖縄後期の貝塚である。本貝塚も未だ本格的な発掘調査は行われたことはないが、採集資料や試掘調査（吉浜1976）などからして、底部形態は乳房状尖底やくびれ平底をなす器形の土器群を伴う貝塚のようである。

### 4. 清水貝塚

清水小学校の西側の砂丘上（標高7～8m）に形成された、沖縄後期の貝塚である。貝塚の正確な範囲については判然としないが、かつて運動場西側の切り通し断面にても遺物包含層が確認されたことより、その東限は運動場へも延びていたようである。その西限も判然としないが、1985年に個人畠地の土壤改良に伴って記録保存調査を実施した畠に隣接する畠の西方へ延びていたようである。

1985年に個人畠地の土壤改良に伴う記録保存調査が実施されている。その結果、沖縄後期の貝塚ではまれにみる何枚かの文化層の重なりをもつ貝塚であることが判明している（盛本編1989）。検出遺構としては、イモガイ科集積遺構と石列遺構がある。出土遺物は、豊富でかつまた多岐にわたっている。



第3図 具志川村における遺跡分布図

なお、詳細については、調査報告書に依られたい。

#### 4. 大原貝塚群

通称、大原砂丘上に立地する沖縄前Ⅳ～V期、および沖縄後期の複合遺跡である。貝塚の一部は、1956年に琉球政府文化財保護委員会の指定を受け、本土復帰後は県指定史跡として引き継がれている。

貝塚は、村立総合運動場付近から具志川自動車教習所あたりまでの広範囲に分布し、群をなしている。そして、この群はいくつかの地点貝塚を形成し、各々は時期や性格などからして3カ所の地点に大別されるようである。

第一地点は、指定地を含む周辺である。主として、沖縄前Ⅳ期に属する伊波式や荻堂式、大山式等の土器群を出土する地点である。

第二地点は、指定地の西側部分である。主として、沖縄前V期に属するカヤウチバンタ式や宇座浜式等の土器群を出土する地点である。当該地点は、1979年に圃場整備事業に伴う範囲確認調査が実施されている（当真編1980）。調査報告書によれば、3枚の遺物包含層が確認され、多くの遺物や遺構が検出されている。遺構としては、石列遺構、方形石組遺構、集石遺構などがあり、それらの遺構の性格としては、住居若しくは墓域空間との関連性が考慮されている。

出土遺物は、沖縄前V期に属するカヤウチバンタ式や宇座浜式等を主として、前Ⅳ期の伊波式や荻堂式、および沖縄後期の土器類のほか、多種多様の貝製品や石斧、磨石、石皿等の石器類なども出土している。

第三地点は、指定地の西方にあたる地点である。別称、大原第二貝塚と称されるている。沖縄後期の貝塚である。表面調査によって、沖縄後期に属する土器群が得られているものの、未だ正式な発掘調査がなされたことがないため、詳細な内容については判然としない。

#### 5. 北原第二貝塚

久米島空港北端部の東側に立地する、沖縄後期の貝塚である。未だ本格的な発掘調査が実施されたことがないため、詳細については判然としない。

#### 7. 北原第三貝塚

久米島空港南端の東約500mの標高3～4mに立地する、沖縄後期の貝塚である。貝塚の立地する砂丘は、南海岸から延びてきた砂丘（通称：大原砂丘）の最西端にあたる。本貝塚も、未だ本格的な発掘調査がなされたことがないため、その詳細については判然としない。

## 第3章 調査の内容と成果

調査は、拡張計画との絡みから3カ所の地点において行った。便宜上、各々の地点をI、II、III地点と仮称する（第4図参照）。

I地点は、これまで未周知の遺跡で、空港ターミナルビルの東側の畠地一帯である。II地点は、エプロン（駐機場）に南接した、現存する北原貝塚の範囲内である。そして、III地点は旧旅客ターミナルの南側部分である。

事業計画者である県土木建築部（所管：空港課）は、当初I地点を取り込んだ拡張案を策定し、用地交渉を進めていた。この計画案は、旅客ターミナルビルや庁舎、エプロン（駐機場）などの施設を現旅客ターミナルを取り込んだ東側部分へ、移動するという計画である。この計画案に基づいて、事業計画者は地元具志川村の協力を得ながら、用地取得のため地主との交渉を進めていたが、諸点から交渉は成立せず、結局当該地部分での用地確保は不可能となり、これらの施設を旧旅客ターミナル南側の保安林西側部の村有地に計画を変更したといきさつがある。

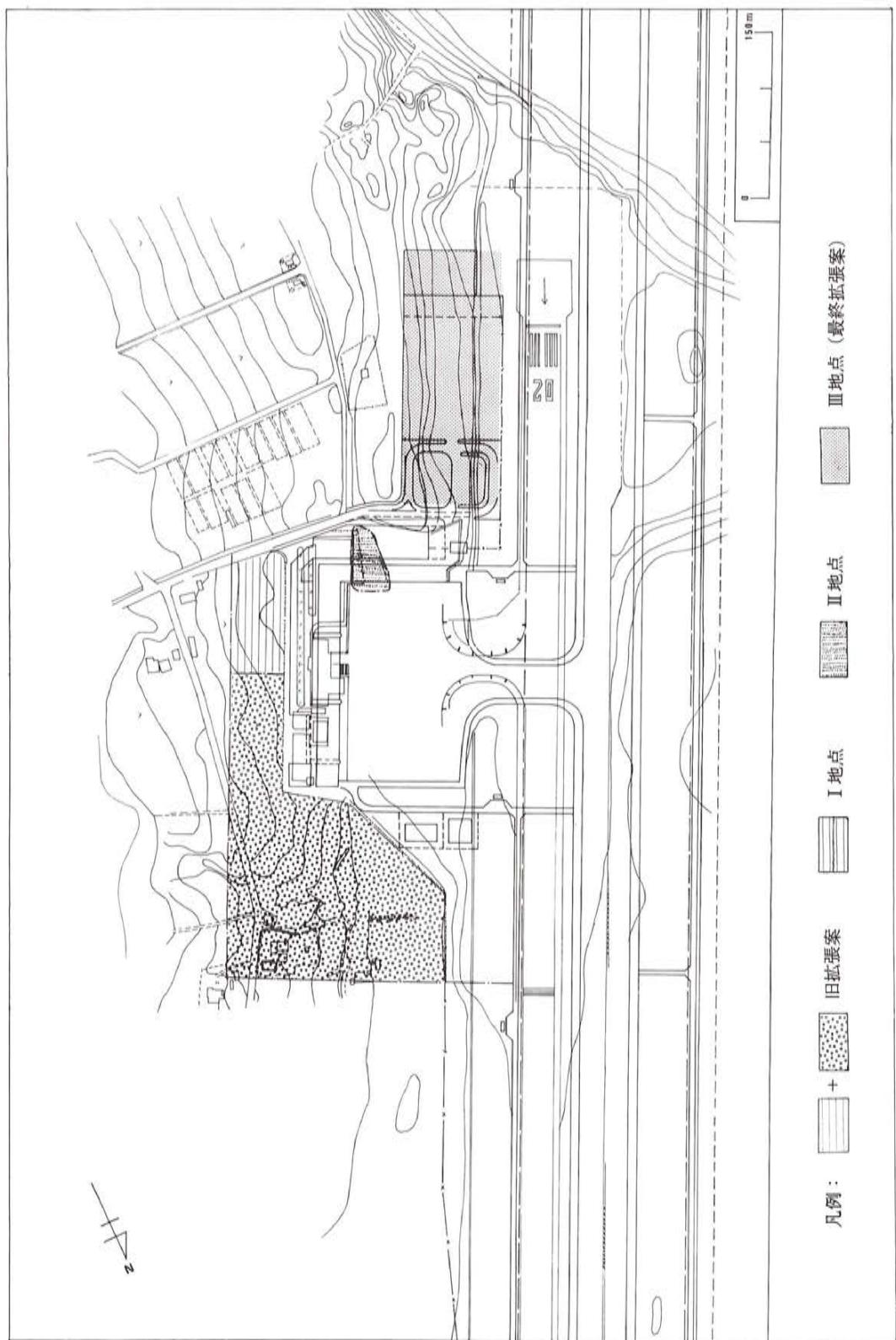
このような経緯から、調査初年度の1989年度の第1次調査は当初案に対応すべく、用地未取得のI地点においての確認調査を行った。その結果、当該地点において周知されていた北原貝塚とは異なった時期の遺跡が新たに発見された。

しかし、後述のようにその調査は制約を受けたものとなり、結果は決して遺跡の内容および詳細な範囲を把握できるものではなかった。何故ならば、用地未取得なため、調査箇所は当然のことながら畠地の境界ラインなどのかなり限定された場所での調査にとどめざるを得なかったからである。このような制約を受けた調査ではあったが、得られたわずかな成果から遺跡の概要を記すと次のようである。

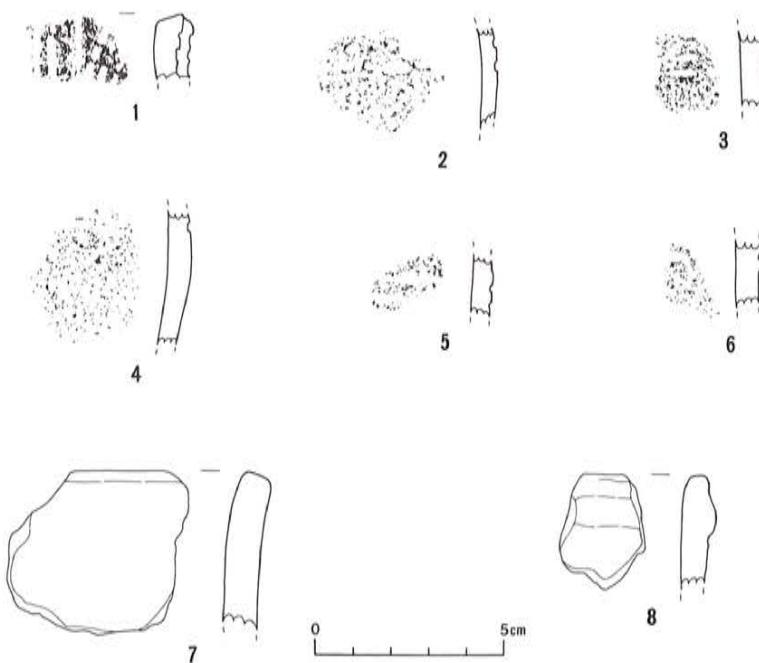
遺跡は、その東部から延びてきた琉球石灰岩の風化土壌であるマージ層の西端部付近に形成されている。その堆積層は、厚さ約30～40cmの耕作土下に、約40～50cm程の黒褐色土の遺物包含層があり、その下位は地山のマージ層となる。

得られた遺物は、わずかの土器片と食料残滓としての貝類遺存体のみである。土器は、その文様や胎土などの諸特徴からして伊波式土器や荻堂式土器、あるいは大山式土器などのいわゆる貝塚時代前期、高宮廣衛氏編年試案の沖縄前IV前頃に属するものである（第5図、図版三）。貝類には、鹹水産のカワラガイ、ソメワケグリ、イトカケヘナタリ、チョウセンサザエのフタ、陸産のパンダナマイマイなどがある（図版三）。

第一次調査を終了した段階の2年度目（1990年度）にいたる時期と前後して、事業計画者の県土木建築部（所管：空港課）は、上記したように現旅客ターミナル東～北側部での用地取得は不可能だと判断の下に、この新発見遺跡を含むI地点部分を取り込む計画案は断念し、付帯施設を旧旅客ターミナル南側の保安林西側部へ変更する計画案を打ち出し



第4図 旧案を含めた拡張計画案と調査地点図



第5図 I地点出土遺物実測図

た。

県教育委員会（所管：文化課）では、当計画地にはエプロン（駐機場）に南接する北原貝塚が延びている可能性があることと、有形民俗文化財としてのシライミ御嶽（図版五）が在することより、埋蔵文化財についてはその有無確認のための試掘調査が必要であるということと、シライミ御嶽については、その計画に取り込まないようとの旨を申し出た。

このようなことから、2年度目（1990年度）の第二次調査は、主としてⅡ地点とⅢ地点の2カ所において実施した。

Ⅱ地点の現状は、防潮林としてのモクマオウと低灌木や蔓性の植物などが繁茂したブッシュになっていることに加え、エプロン（駐機場）南端の切り通し部において遺物包含層の確認が可能であることや、一帯は浮き島状となり貝塚の範囲の確認が容易であることなどから、確認調査は現駐車場との境界ライン付近において実施した。

その堆積層序は、1972年の発掘調査の結果とほぼ同様であった。そのため、試掘箇所およびその範囲を最小限にとどめたため、得られた遺物は無文土器少量のみであった。

Ⅲ地点の調査のねらいは、Ⅱ地点の遺物包含層がさらに旧旅客ターミナルアクセス道路を越えて南に延びているかということにあった。調査地一帯の現状は、Ⅱ地点と同様に低灌木や蔓性の植物などが繁茂したブッシュとなっていることより、人手による調査は困難

を極めるものと判断し、重機（ユンボ）による試掘調査を行った。

調査は、駐車場や庁舎等の付帯施設が計画されている範囲内において、10 m 若しくは20m ピッチで12箇所の試掘を実施した。その結果、表土層（腐植土層）の下位は、約2.5～3m の深度まで白砂の無遺物層が続き、貝塚の広がりは確認されなかった（図版五）。このようなことから、北原貝塚の南限は旧旅客タミナルアクセス道路を境にして南には延びていないということが明らかとなった。

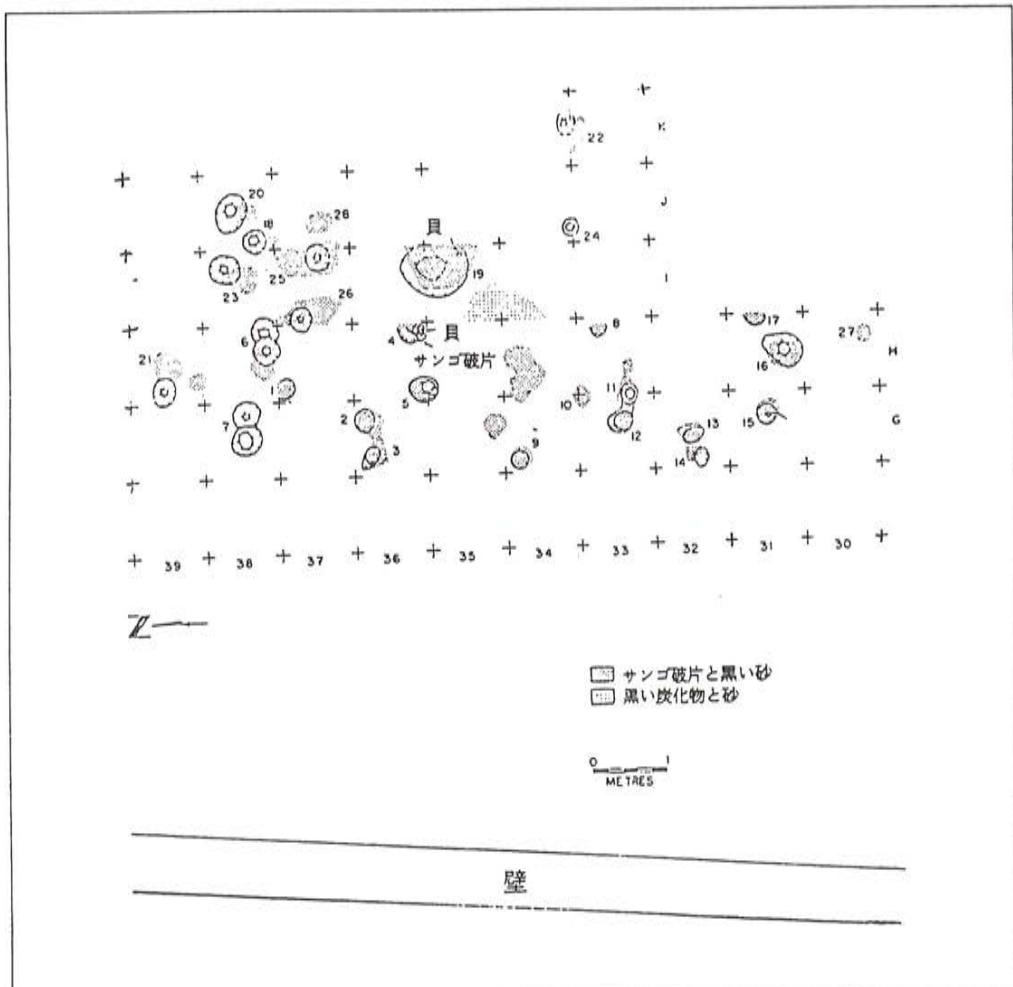
## 第4章 北原貝塚のこれまでの調査とその概要

北原貝塚は、これまで二度にわたって発掘調査が行われている。

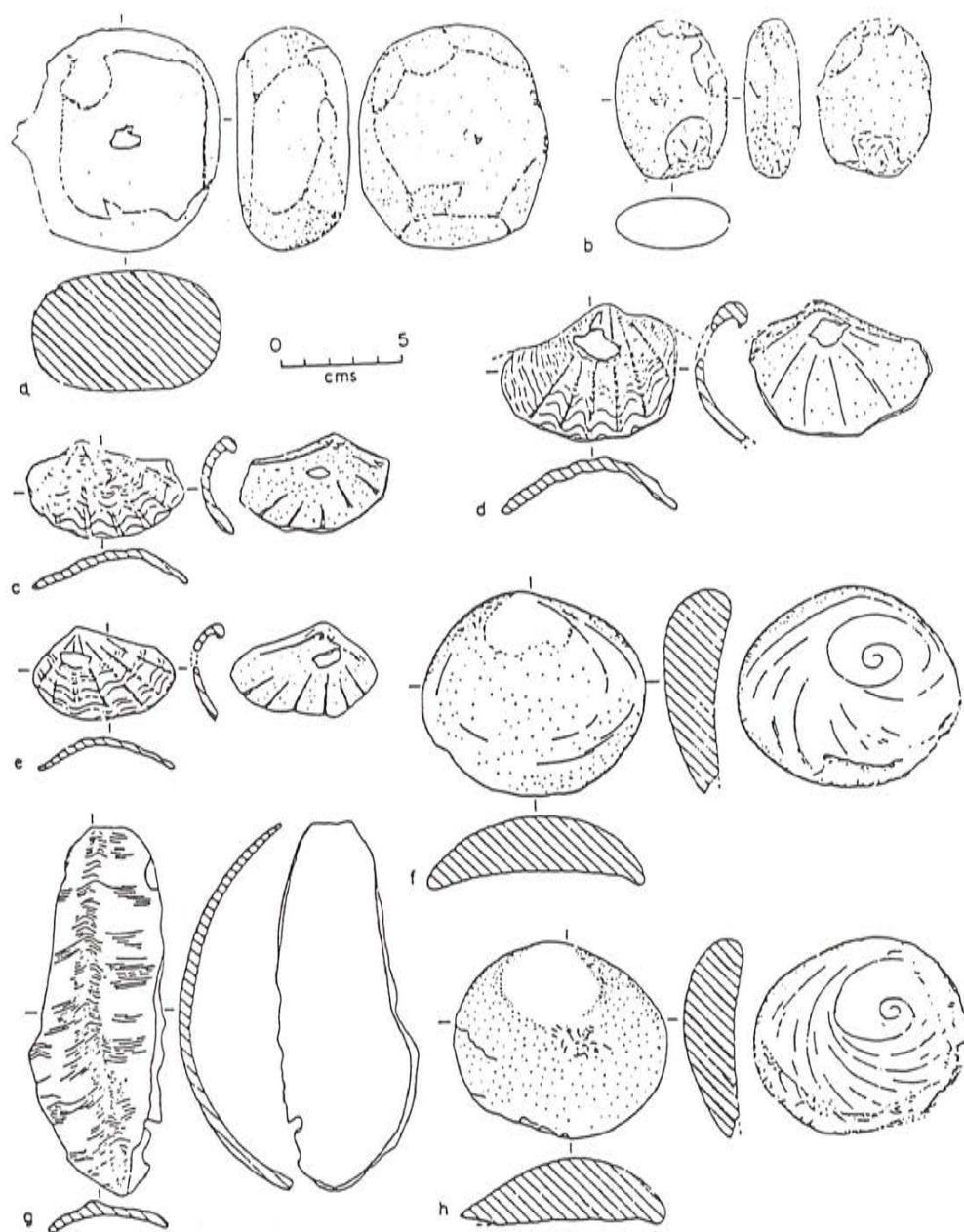
その一度は、1971年のカナダ・ブリティッシュコロンビア大学準教授（現教授）のリチャード・ピアソン氏によるものである（ピアソン・リチャード他1990）。

報告によると、表土下約40cmに遺物包含層があり、沖縄後期の土器を主体に、貝製漁網錘やヤコウガイ製杓子状製品、螺蓋製敲打器、石斧、敲石、磨石などの人工遺物と、食料残滓としての貝類や魚類などのほか、開元通寶を一点得ている。

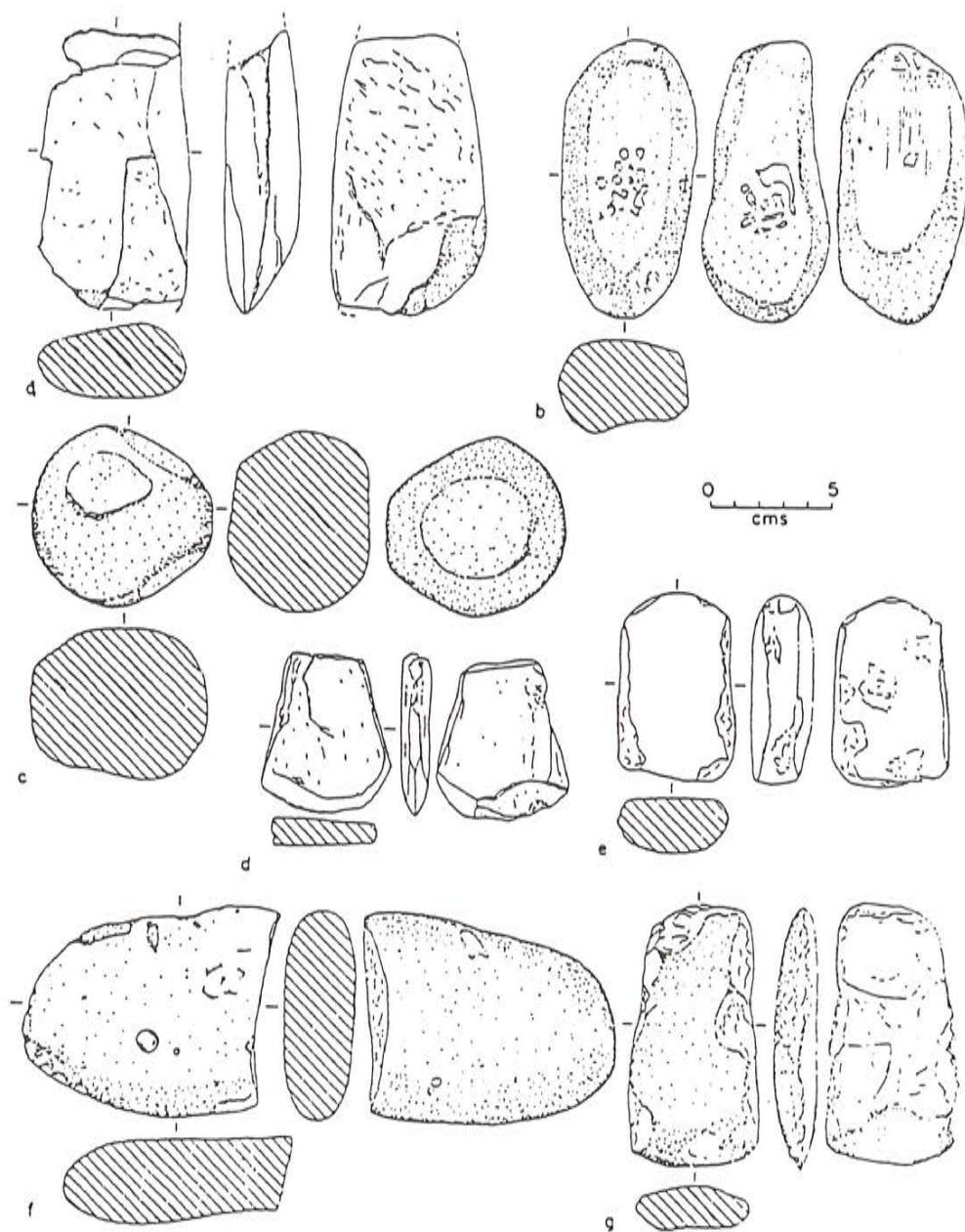
そして、遺物包含層下約10cmの白砂層にコーラルを敷きつめた箇所がみられたことと、柱穴が検出されたことより、住居址であろうとしている。



第6図 第III（底）層の柱穴（ピアソン・リチャード他 1990 より）



第7図 出土遺物・1 (ピアソン・リチャード他 1990 より)



第8図 出土遺物・1 (ピアソン・リチャード他 1990 より)

他の一回は、沖縄県教育委員会による調査である。1972年の本土復帰に伴い、沖縄県の離島空港が本土の基準に合わないということから、その拡張および整備が計画され、これに伴った事前調査であった。

この調査は、本土復帰前および直後を通して沖縄県における初めての破壊を前提とした大規模な緊急調査であり、当時の沖縄考古学会に与えた影響ははかり知れないものがあったようである。

調査期間は、1973年8月1日から9月19日までの延べ50日間という、当時としては長期にわたる調査であったといえよう。

調査は、沖縄県教育委員会（所管：文化課）が主体となり、沖縄考古学会の支援を受け、具志川村教育委員会や久米島高等学校の生徒や父兄を中心とする、地元住民の協力のもとに実施されている。

調査地点は、現エプロン（駐機場）を含めた北側へ延びた地点である。

正式な報告書が刊行されていないため、詳細な内容については判然としない。層序および検出遺構について、調査担当者の知念勇氏の記すところによれば（知念1976、1982）、下記のようである。

#### <層序>

第一層－貝塚の中心部では、厚さ80～120cmもあった。昭和42年の空港工事のおり、滑走路部分の砂丘が崩され、積み上げられたもので、その際、貝塚の西側部分も破壊され、遺物包含層が滑走路東側砂丘上に分散されたものと思われ、地表面上に多くの遺物が散乱していた。

第二層－砂にマージが混入して褐色砂層となったもので、約20～30cm、出土遺物はきわめて少量である。空港建設以前は、この層が表土層であったと思われる。それまで、この一帯は、畑地として利用されていたようで、攪乱をも受けていることを考えると、この第二層は耕作土であった可能性が高い。

第三層－この層は黒色貝層で、厚さは30～40cmあり、未攪乱で出土遺物の量も多かった。この層が北原貝塚の本体である。

第四層－黄褐色の砂層で、第三層から基盤をなす白砂層へ移行する層だと思われる。厚さ、10～25cmで遺物の出土量はきわめて少ない。

#### <遺構>

第三層下部に3m×4mの長方形プランをもつ石組遺構が検出された。この石組遺構は、久米島内に産する安山岩の自然石を主体とするが、磨石片、石皿片など石器の廃棄利用を行っており、この石組遺構の中央部に長さ約1m、幅約50cmの大型の石皿が現れた。この石組遺構の北側に隣接するところには、掘立柱の柱穴と思われる柱穴も数個発見された。

## <出土遺物>

出土遺物には土器を主体に、石器、貝製品、骨製品、古銭などがある。

ページ数などとの関係もあり、以下に、それらの概要を極めて簡単に述べる。なお、これらの詳細については、改めて報告を作成したいと思っている。

土器は、概して無文化の進行した甕形（深鉢形）土器が主体をなすものの（第12～13図）、極少ながら有文土器もみられる（第10図）。また、他器種として壺形土器（第14図）や、遺構内からは片口タイプの注口土器なども得られている（第9図）。主体を占める甕形（深鉢形）土器には、器形の大小やプロポーション、口縁部の形態差などによって、いくつかのタイプに分類が可能のようである。底部形態をみると、くびれ平底をなすタイプ、平底をなすタイプ、乳房状尖底をなすタイプ、尖底をなすタイプなどが含まれる（第14～15図）。

石器には石斧、石皿、磨石、敲石、磨石兼敲石、クガニイシ、球状石器などがある。

石斧はいずれも欠損品で（第19図）、そのほとんどが、敲石へ転用され石斧本来の機能を失ったものである。

石皿は偏平な素材を使用し、周縁から中央部へ向けて緩やかな凹面をなす形態のものである。

敲石は、比較的多く出土している（第20～21図）。使用された礫形態も多種多様である。これらを、使用痕の性格やその形成位置からみると、いくつかのタイプ分類が可能である。

磨石兼敲石は、磨石と敲石の機能を兼備したものである（第22図4、第23～25図）。これも、比較的多く出土しており、礫形態や使用面の位置などからして、いくつかタイプに分類できる。

クガニイシとしたのは、側面観が略半月状をなし、断面形は「みかん割れ状」を呈したタイプの石器である。白木原1978に類似するものと思われたので、この名称を用いた。いずれも、白木原分類によるBタイプに属するものである。使用面は、主として「みかん」の表皮部にあたる弧状を呈した下面部で、上面の細くなった部分を握り部としているようである（第26図1～3）。

球状石器としたのは、厚みのある礫を敲打整形によって、球状に仕上げたものである（第26図4～6）。いずれも、整形時の敲打痕以外、明瞭な使用痕が認められず、その機能や用途については判然としない。

貝製品としては、装飾品と実用品に大別される。前者には、貝符（貝札）（第27図1～3）や札状製品（第27図4）、巻貝製有孔製品（第27図5,6）、ゴホウラ製品の失敗品（第28図2）などがある。後者としてはヤコウガイ製杓子状製品、ヤコウガイおよびタガラガイ製匙状製品、ホラガイ製容器、螺蓋製敲打器、貝製漁網錘などがある。

貝符（貝札）は、イモガイ科の体層部を縦位に長方形状に切りとて板状に加工し、表

面に彫刻文様を施したものである。これらは、いずれもいわゆる広田上層タイプと称されているものに属するものである。

符（札）状製品としたのは、イモガイ科の体層部を縦位に細長く切りとり、その一端に紐通しのための孔を穿ったものである。また、両側縁部には、装飾のためのヒダ状の切り込みを、内面には縦位に沈線を施している。

巻貝製有孔製品は、マガキガイの螺頭部を砥磨し、その中央部に紐通しのための孔を穿ったものである。

ヤコウガイ製杓子状製品は、ヤコウガイの体層部を利用して加工した容器である（第29図1～5）。有柄で杓子の形態に類似することより、この名称を用いた（盛本編1989）。完成品は非常に少なく、多くの未製品や失敗品が出土している。

ヤコウガイおよびタカラガイ製匙状製品としたのは、概して身部が浅くスプーン状をなすものである（第29図6～8）。第29図8は、ホンダカラガイの背面部を利用し、匙状仕上げている製品である。1点のみの出土であり、しかも研磨工程を行っていないことより、製品を意図したものか、あるいは自然なのかということについては確証はないが、とりあえず製品とみなし報告する。

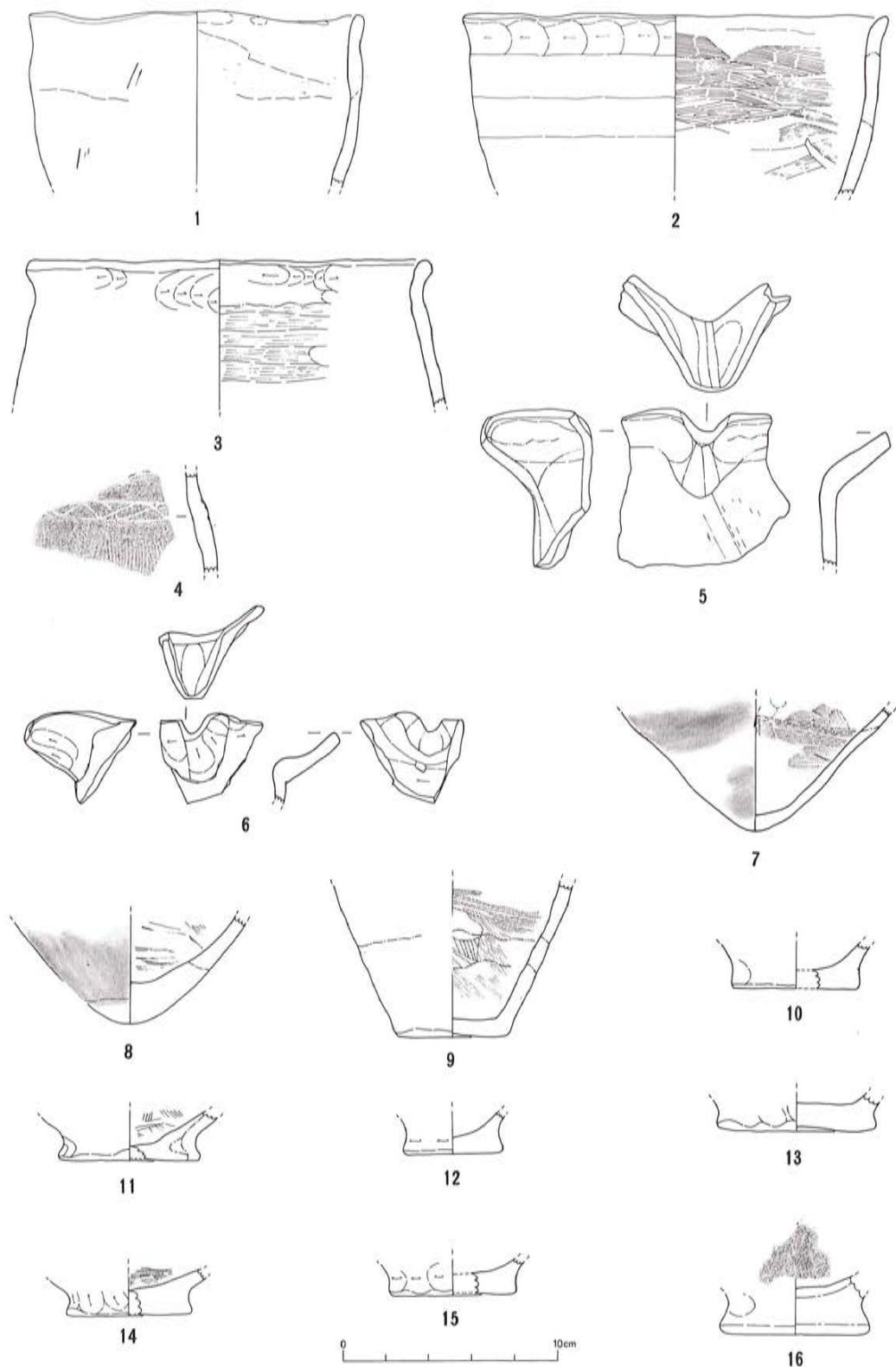
ホラガイ製容器は、ホラガイの殻口寄りの体層部に円い粗孔を穿ったものである（第28図1）。該種製品は、その形態や加工の状況からして、民具資料にみられる「ブラヤカン」に類似するが、これまでに炉址などとの関連で発掘された例がないとともに、個々の遺物の観察においては裏面体層部に火を受けているという報告例もなく、その用途に関しては判然としない。

螺蓋製敲打器（三島格氏のいう螺蓋製斧（三島1982））は、螺蓋（ヤコウガイの蓋）を利用した敲打器である（第30～31図）。主として、その下方の薄い縁辺部の周辺に剥離痕を有するものがほとんどであるが、なかには上方の厚い部分におよぶものがある。また、わずかにではあるが、背面部に敲打痕がみられるものもある。かなりの量が出土しており、その剥離痕の位置と形状よってに4～5タイプほどに分類可能のようである。

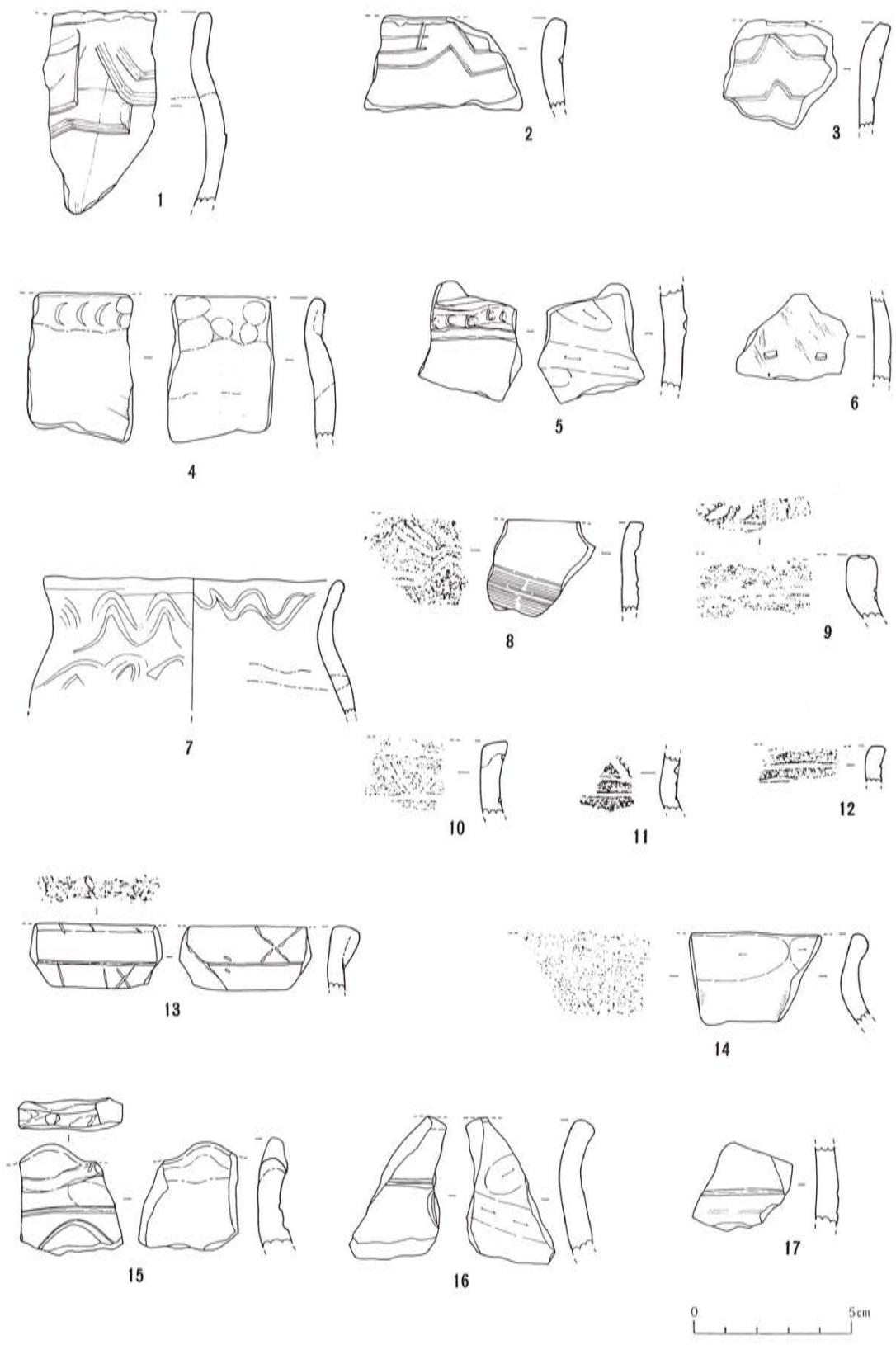
貝製漁網錘は、二枚貝の殻頂部周辺に粗孔を穿った製品で（第32～34図）、名称については拙稿に従った（盛本1988）。これらは、重量や大きさなどからして二大別される。その一つはリュウキュウサルボウやウミギクガイ、リュウキュウマスオガイ、リュウキュウシラトリガイ、カゴガイなどを用いたもので、概して20g以内の重量におさまる貝種の一群である。他の一つは、シャコガイ科のヒメジャコガイやシラナミガイを利用したもので、これの重量には多少のバラツキがあるものの、概ね20～30g前後のものが主体をなす。

骨製品は、リュウキュウイノシシの上碗骨を利用したものである（第27図7・8）。

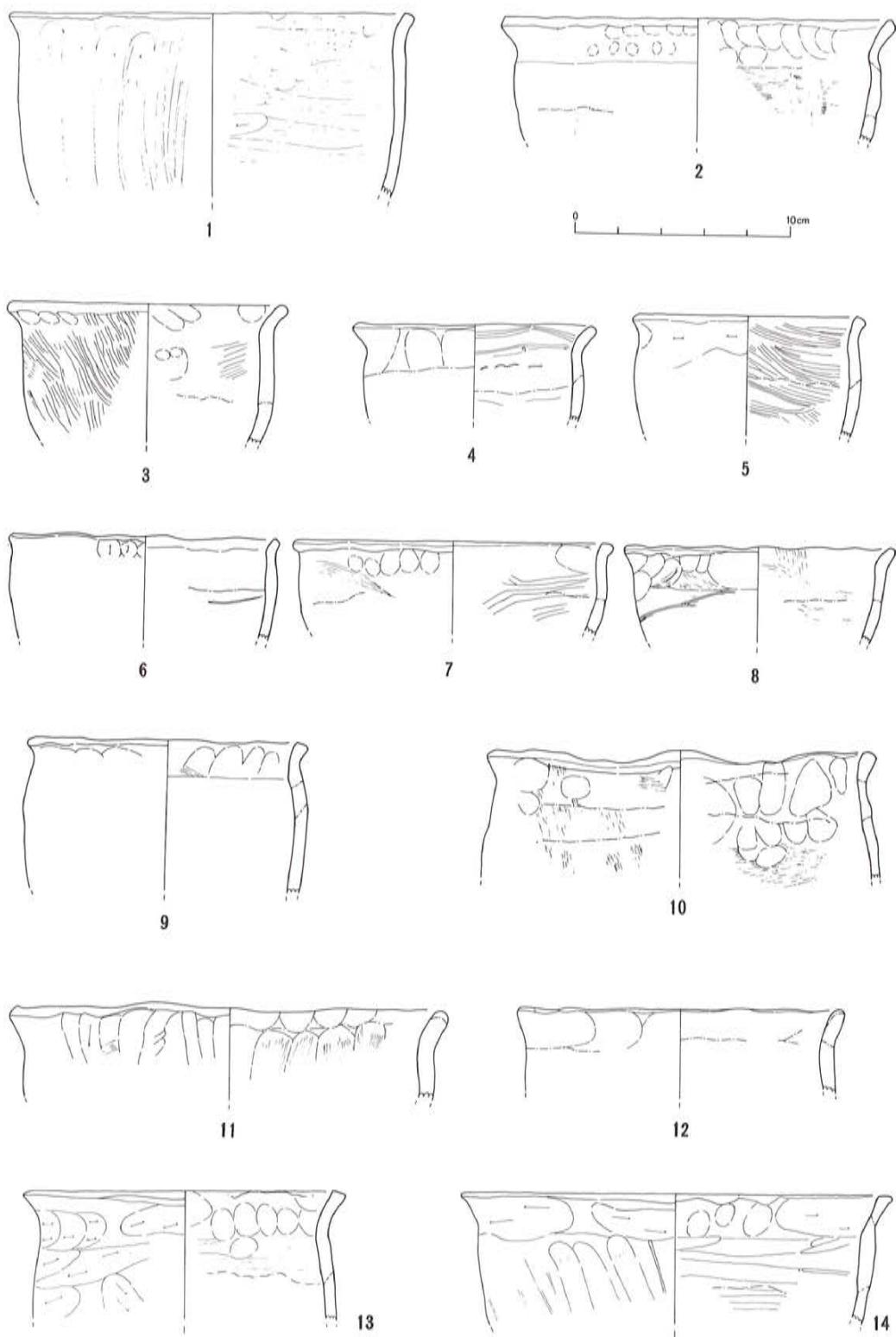
古錢は、中国古代の開元通寶（AD 621～846）が出土している（第35図）。



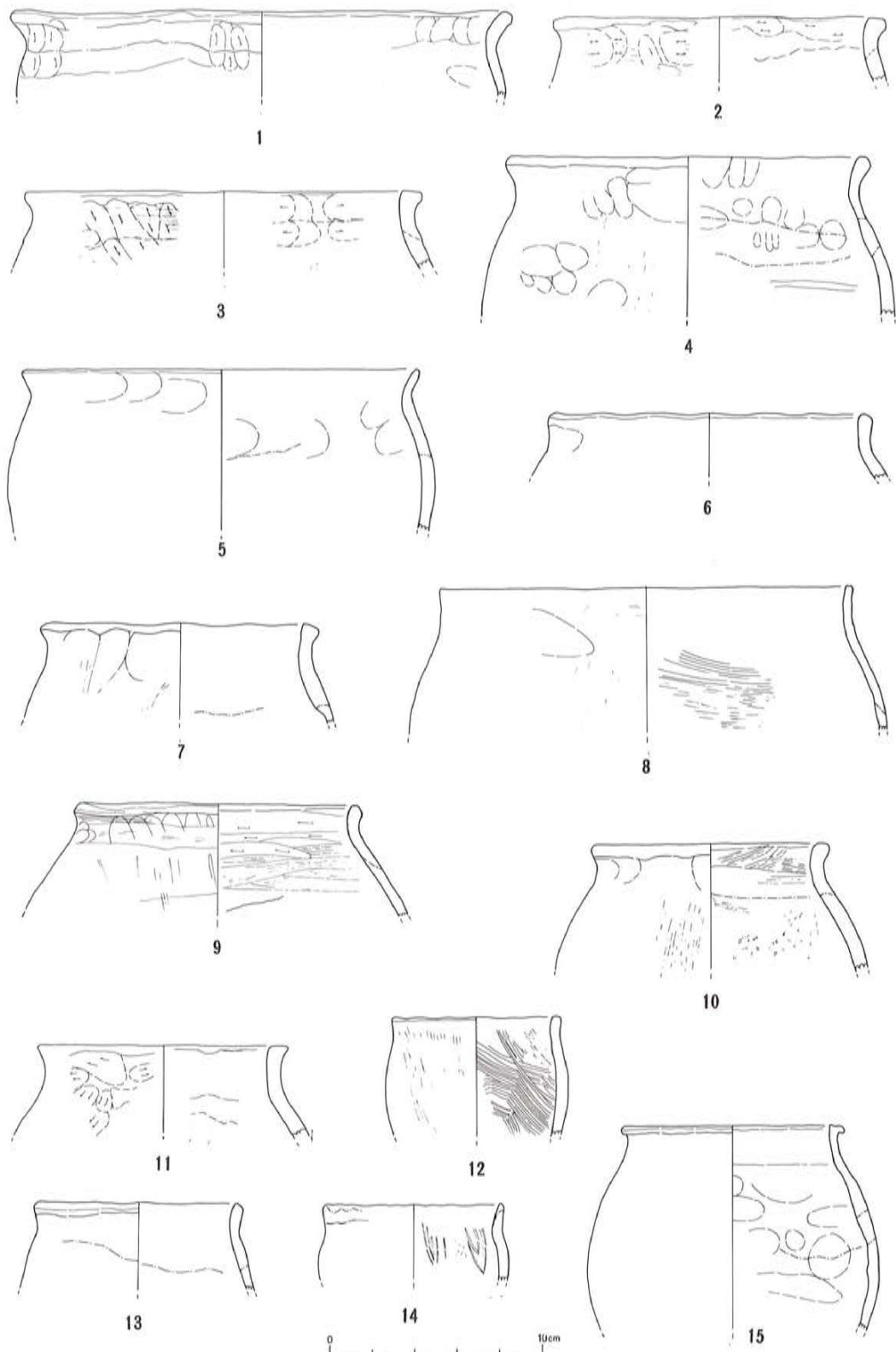
第9図 土器実測図・1（遺構内共伴）



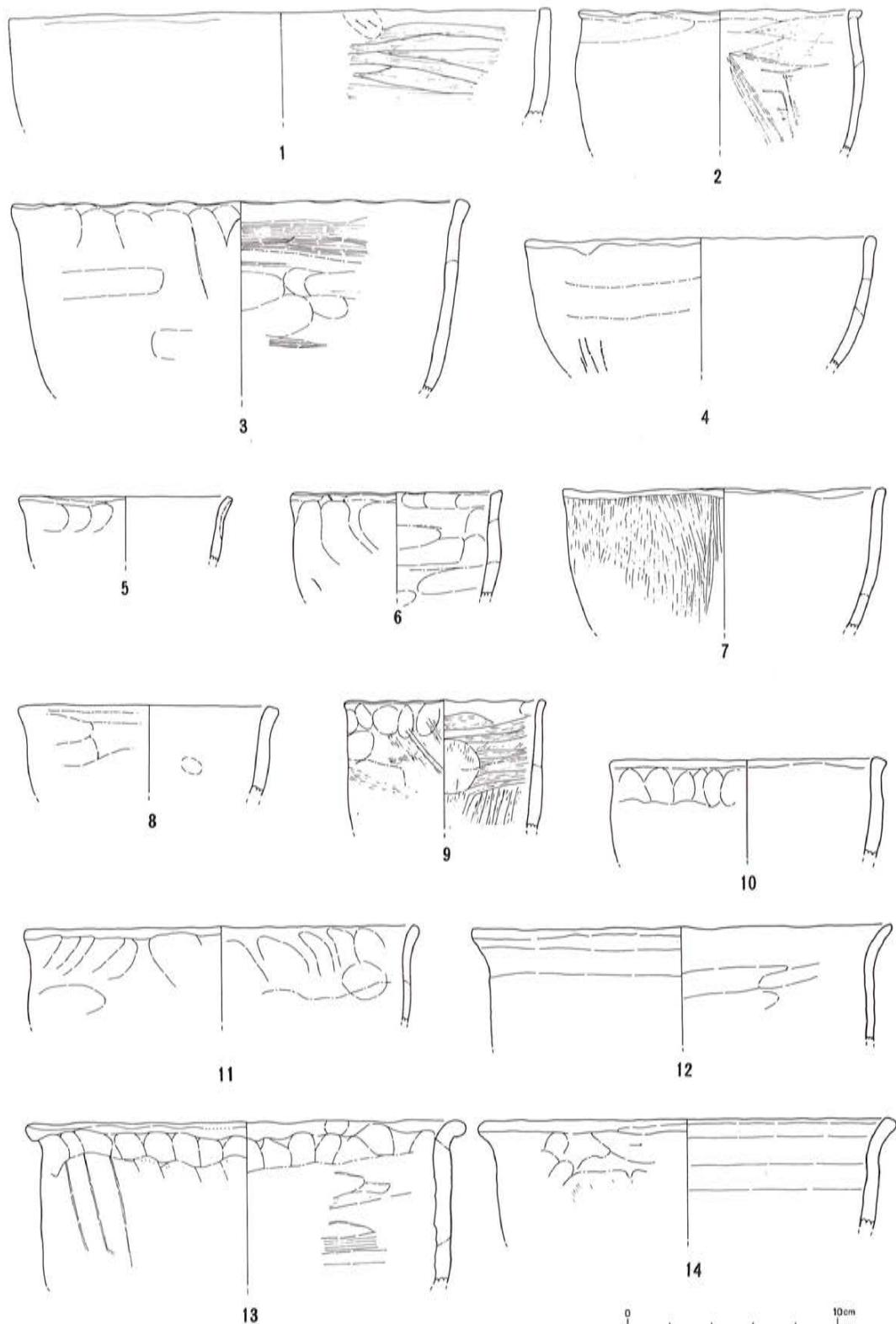
第10図 土器実測図・2 (有文土器)



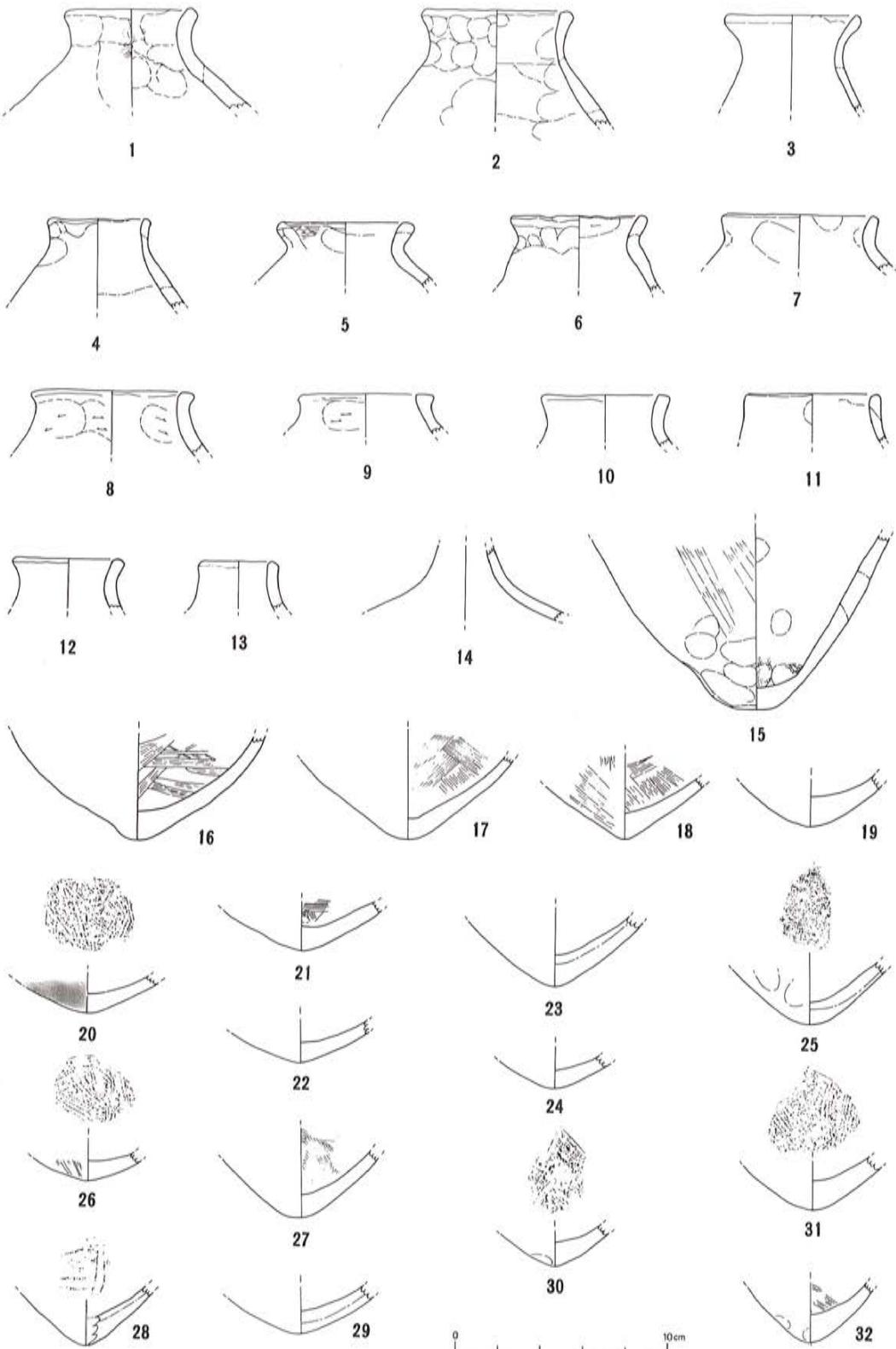
第11図 土器実測図・3（包含層出土の甕形（深鉢形）土器）



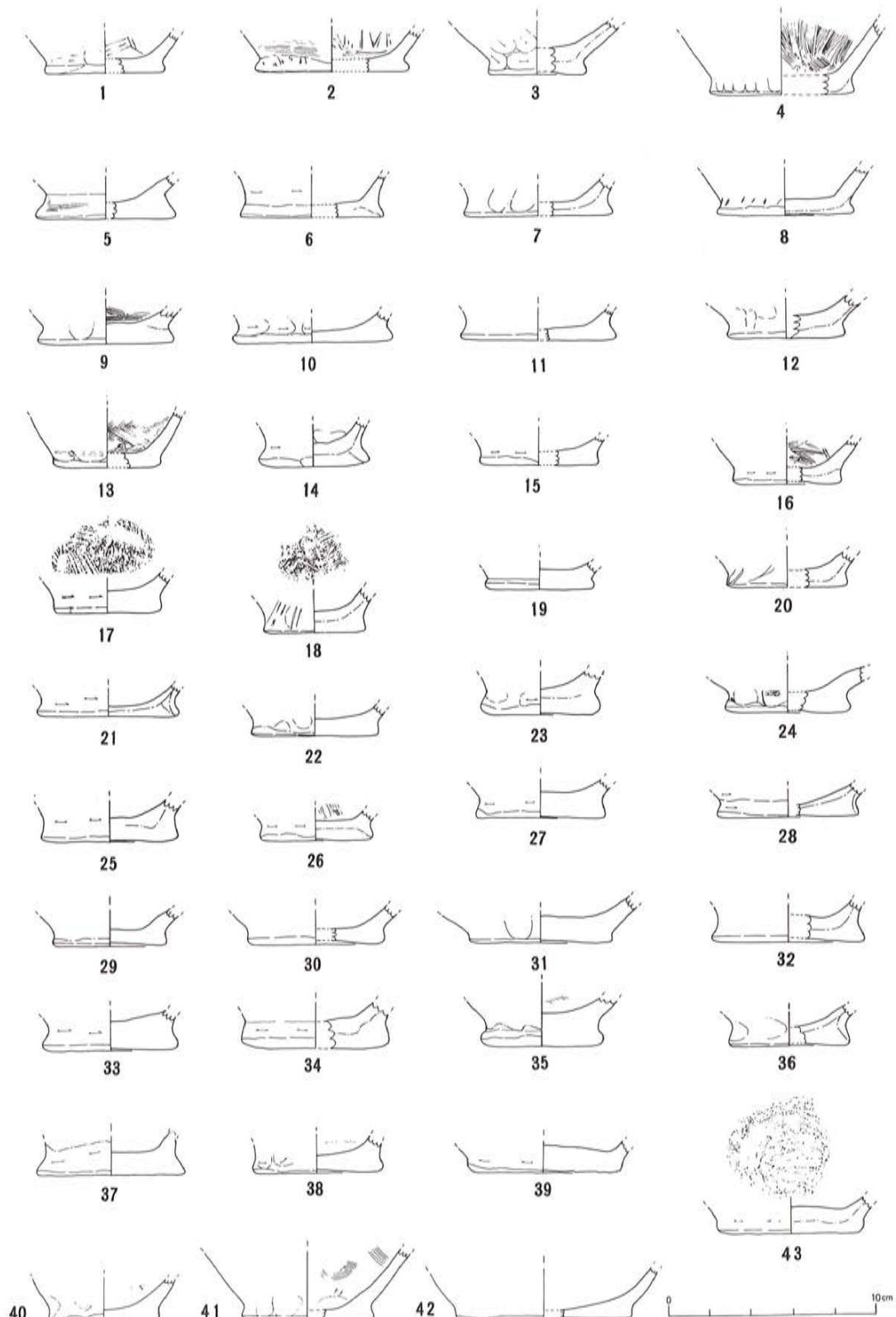
第12図 土器実測図・4 (包含層出土の甕形(深鉢形)土器)



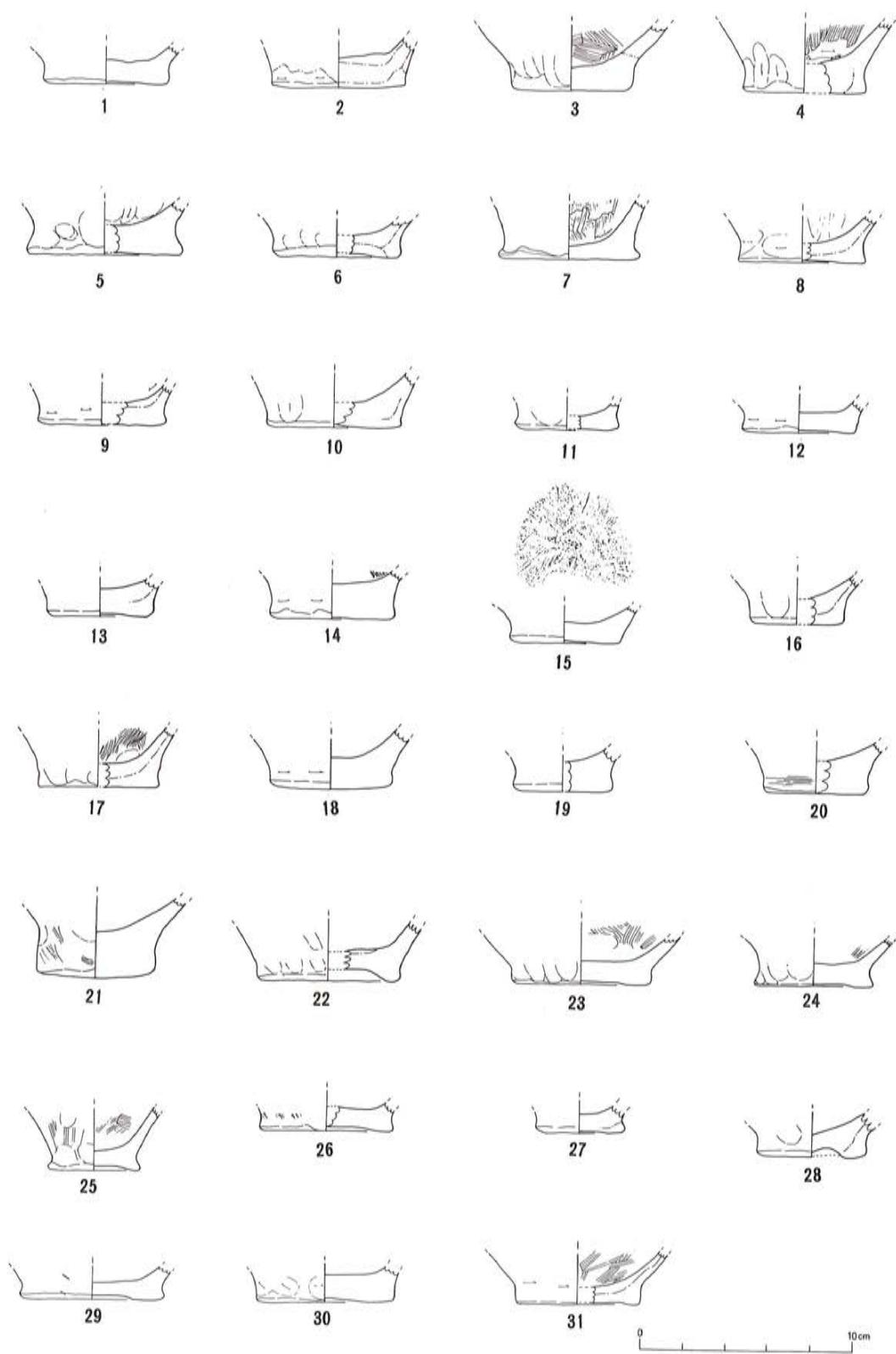
第13図 土器実測図・5（包含層出土の甕形（深鉢形）土器）



第14図 土器実測図・6（包含層出土の壺形土器（1~14）と底部（15~32））



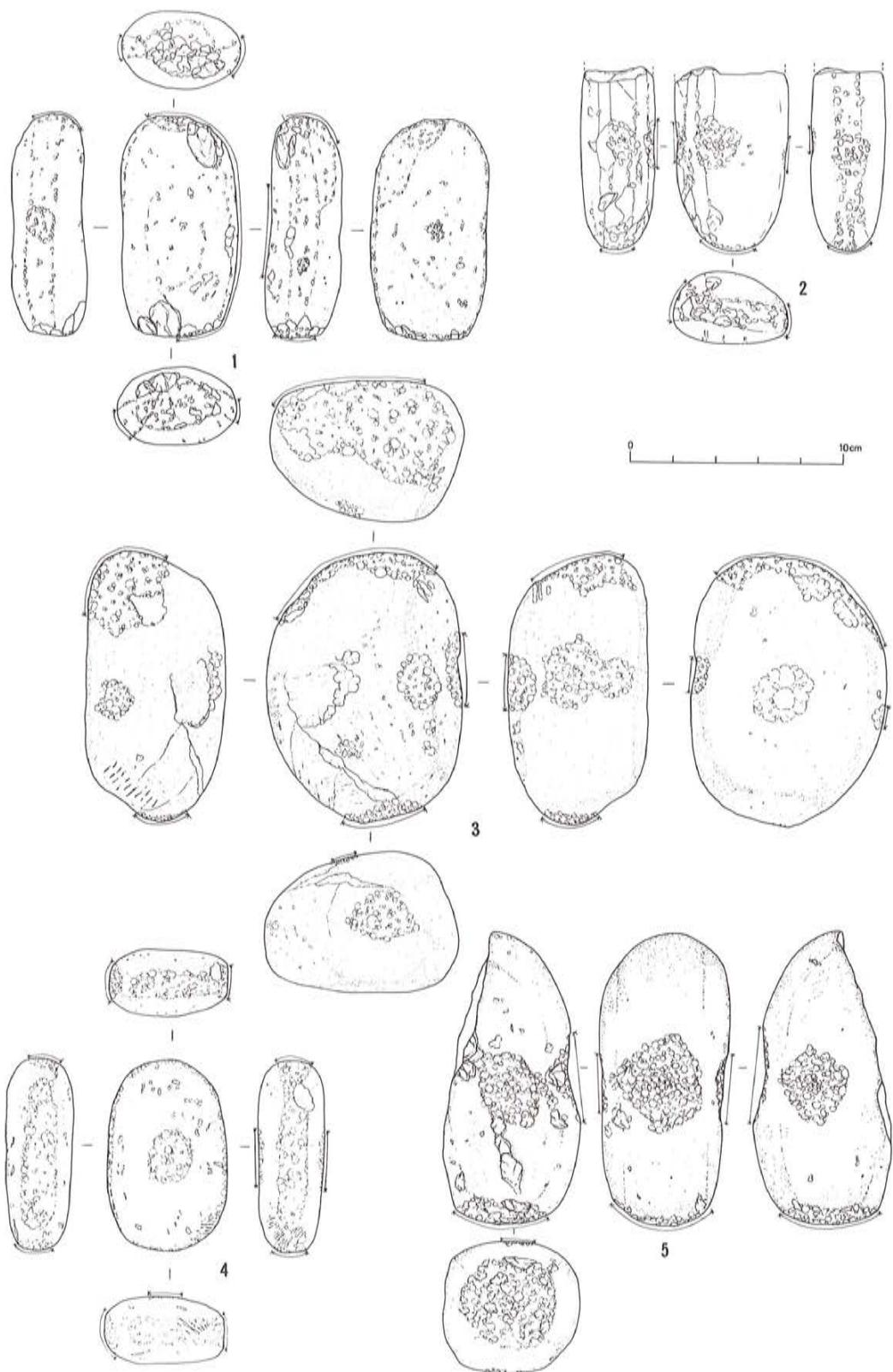
第17図 土器実測図・9 (包含層出土の底部)



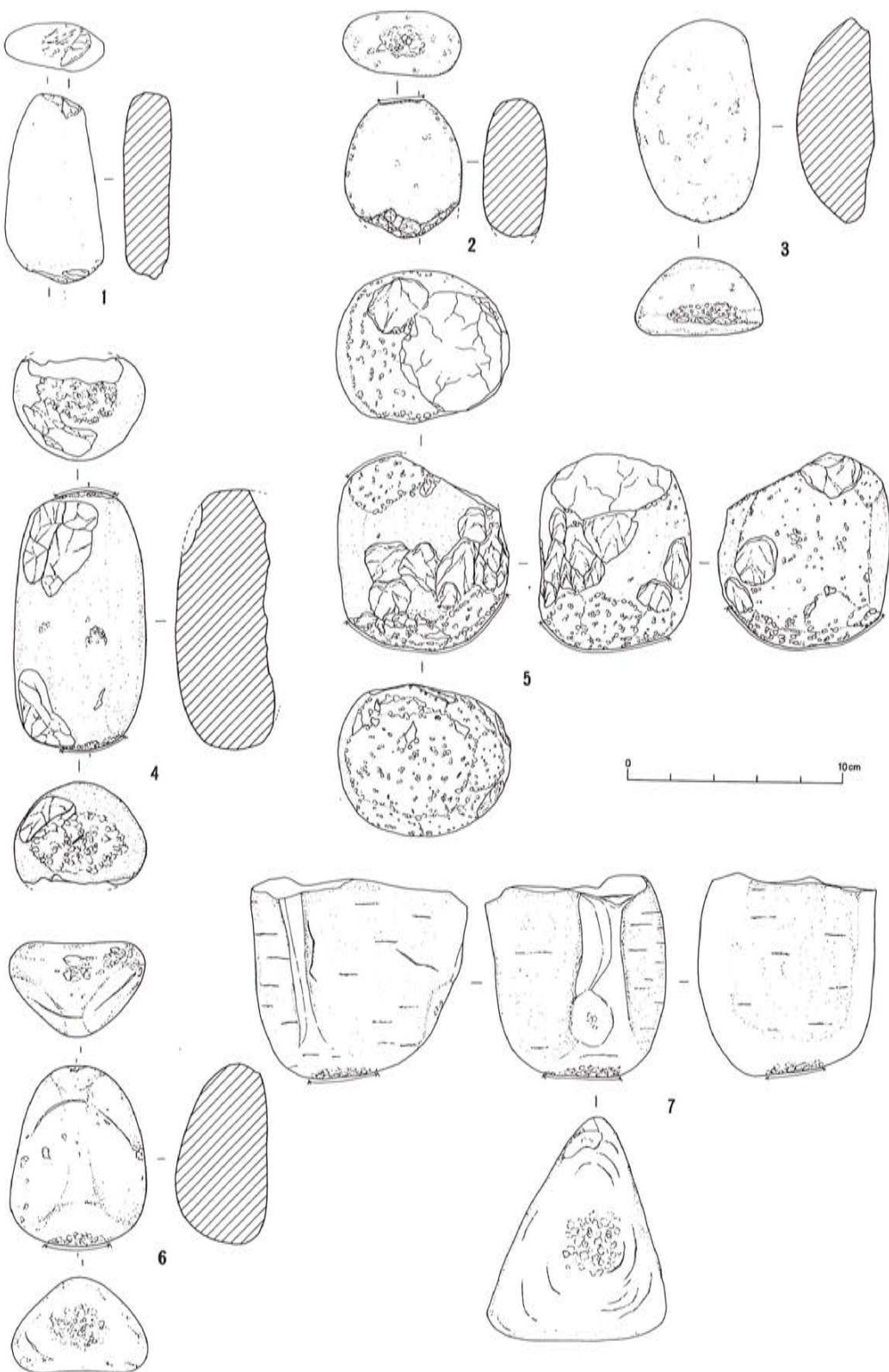
第18図 土器実測図・10（包含層出土の底部）



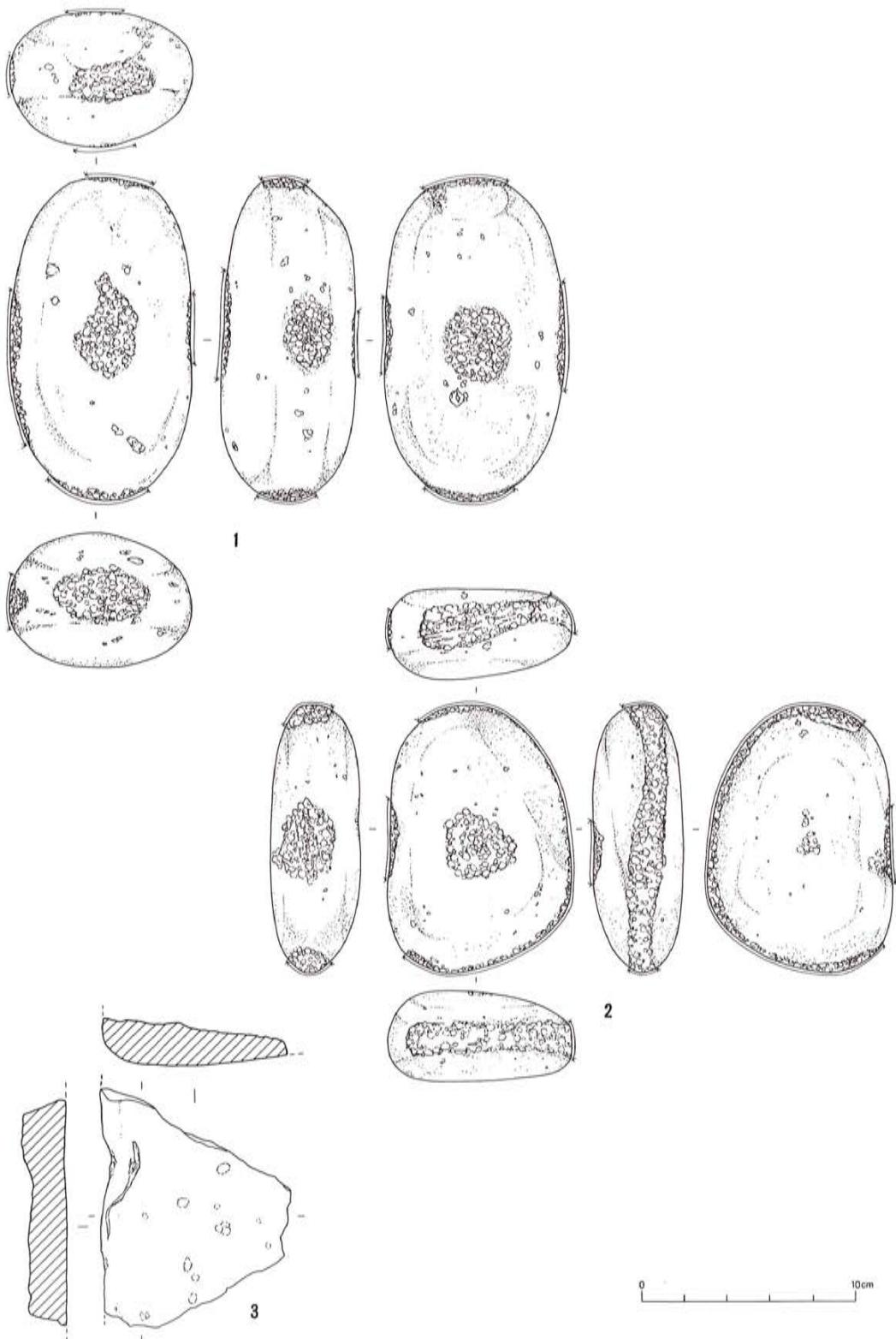
第19図 石器実測図・1 (石斧)



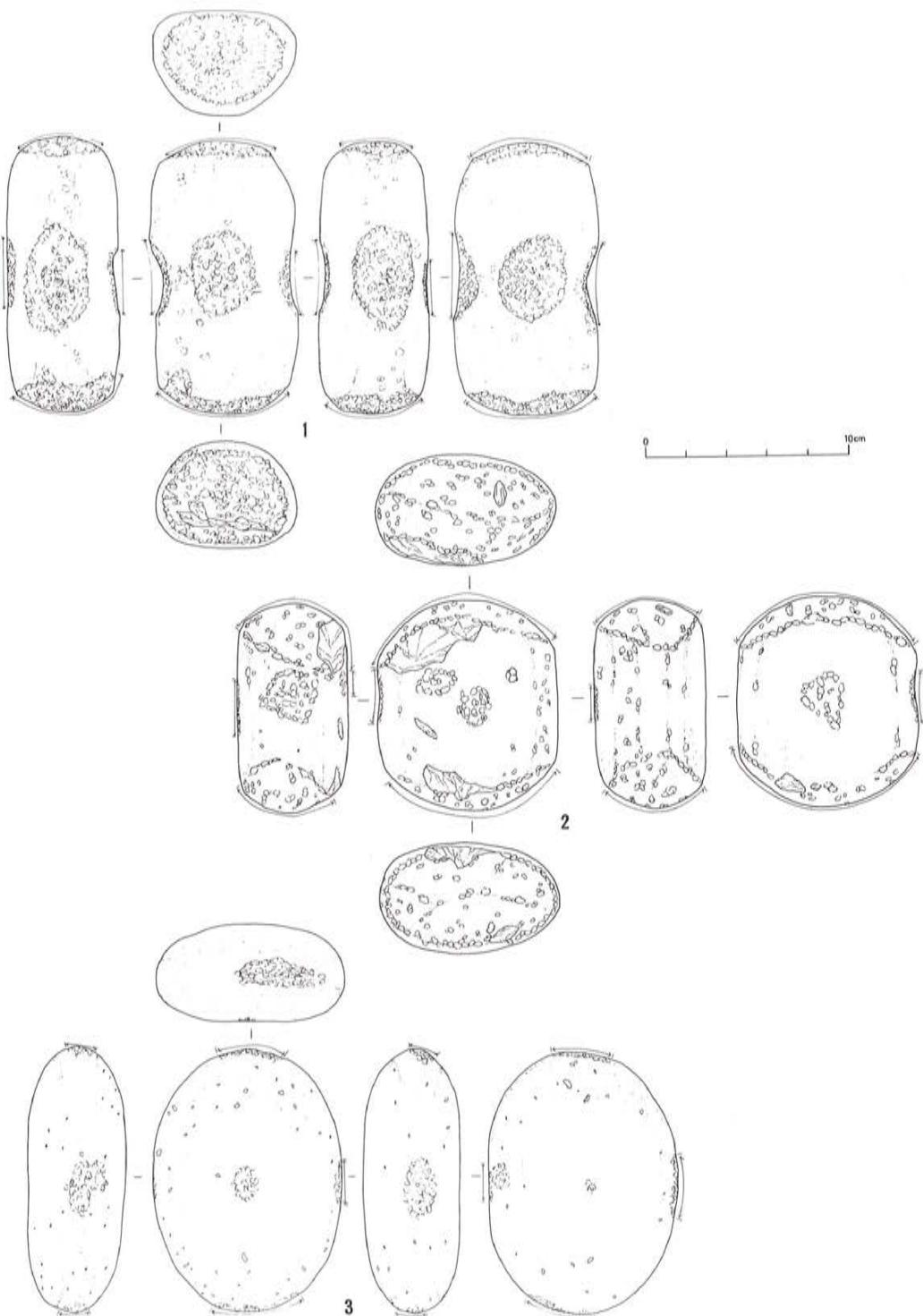
第20図 石器実測図・2(敲石)



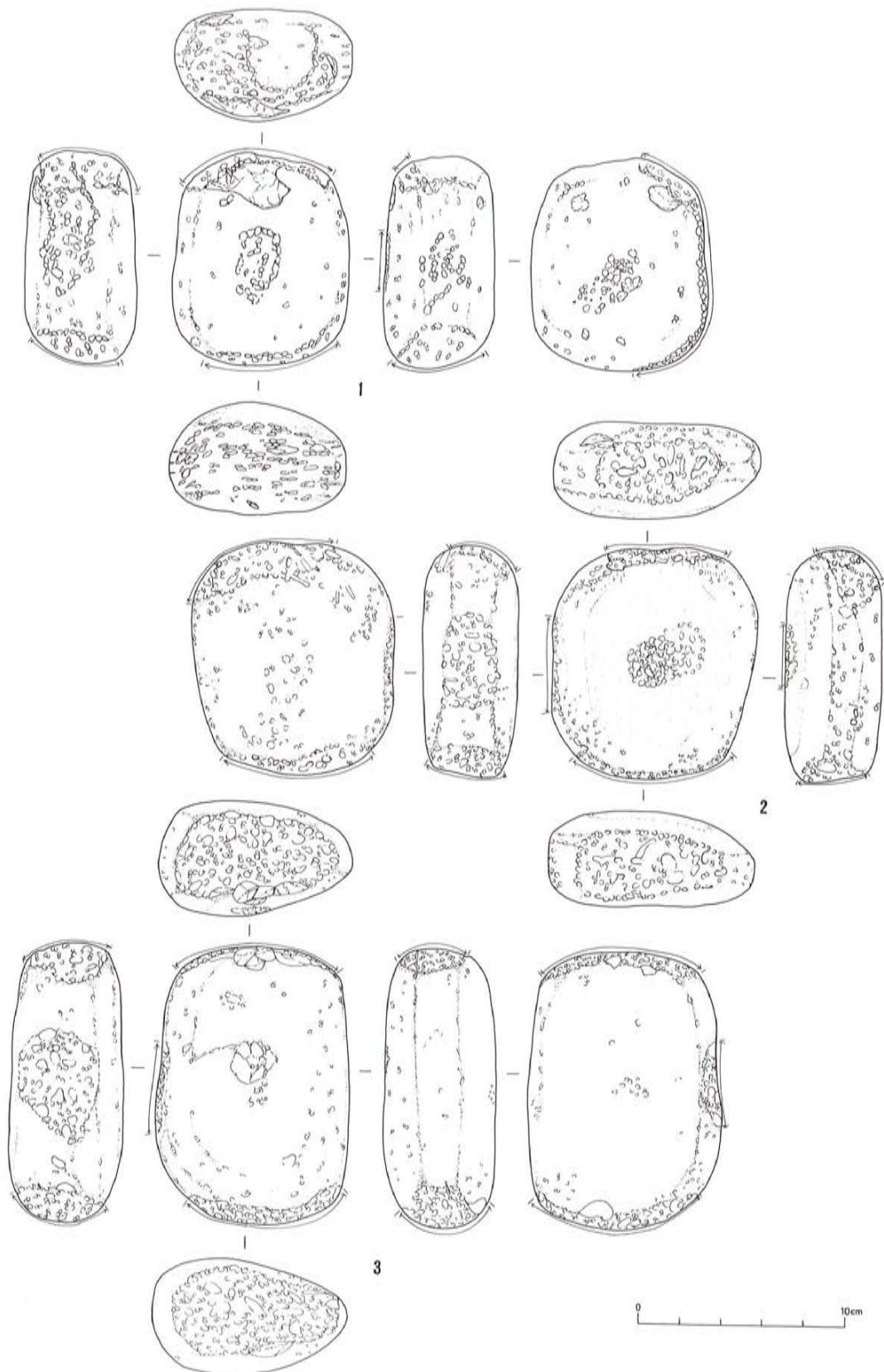
第21図 石器実測図・3（敲石）



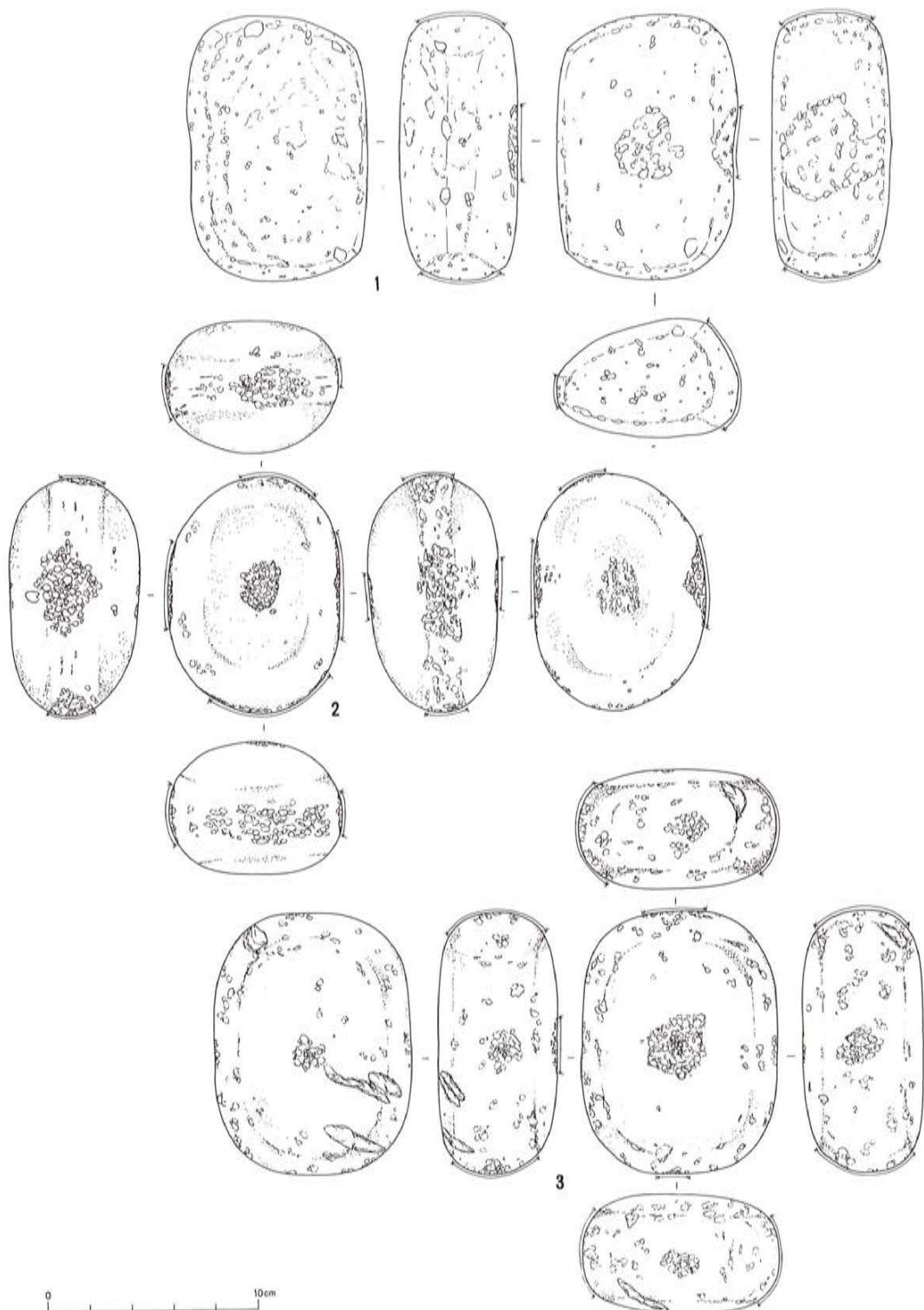
第22図 石器実測図・4 (敲石兼磨石 (1~2)、石皿 (3))



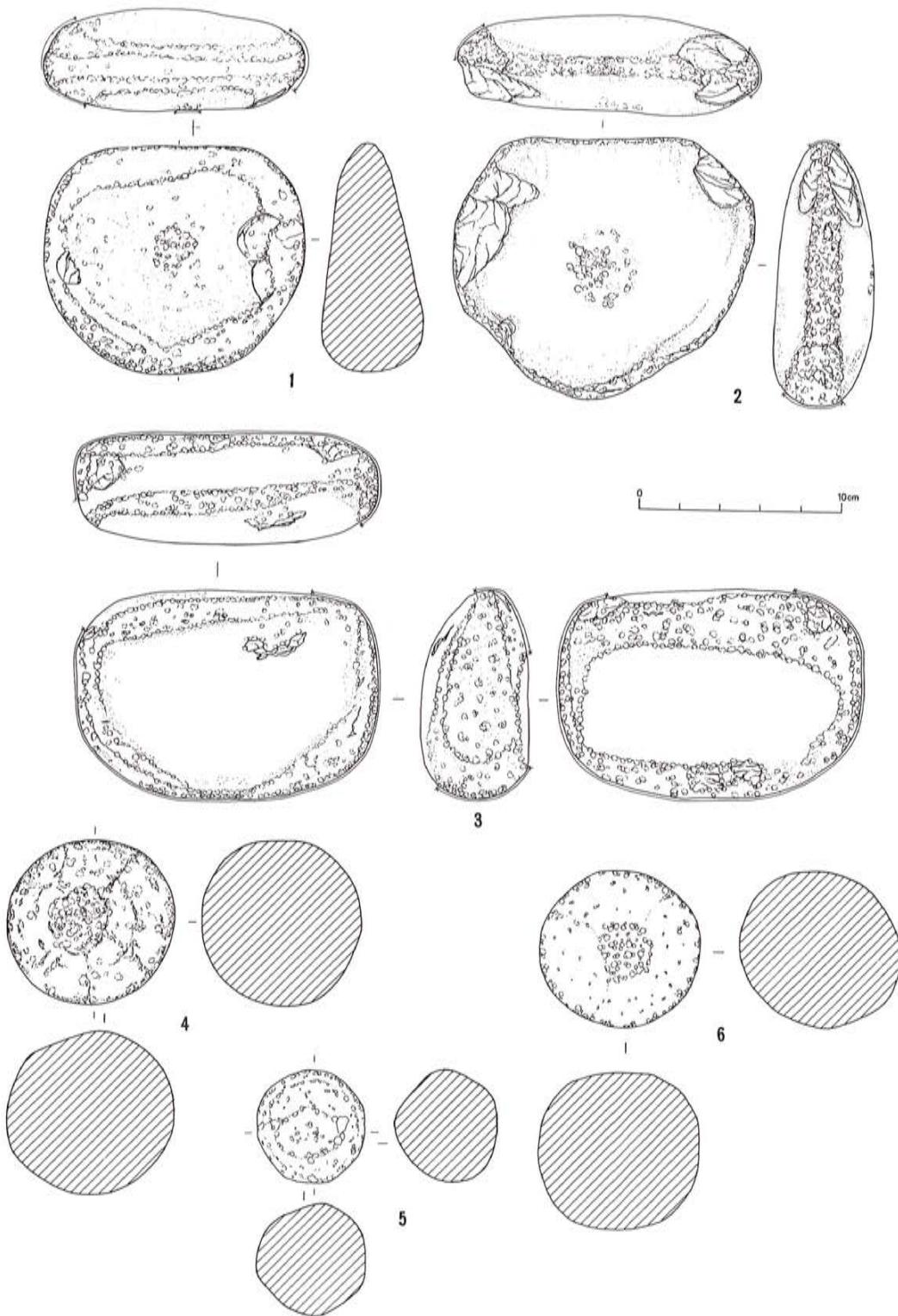
第23図 石器実測図・5（敲石兼磨石）



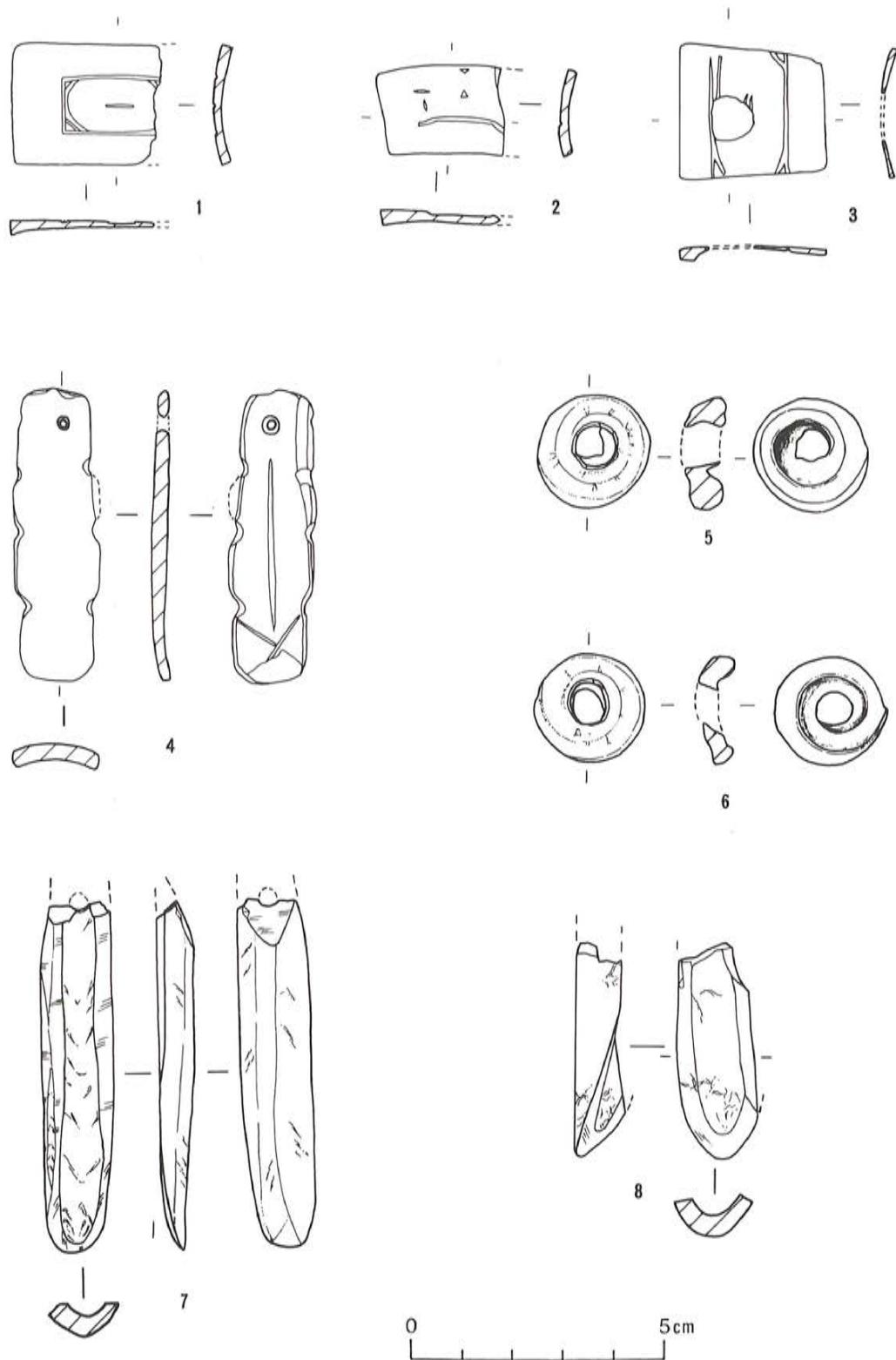
第24図 石器実測図・6 (敲石兼磨石)



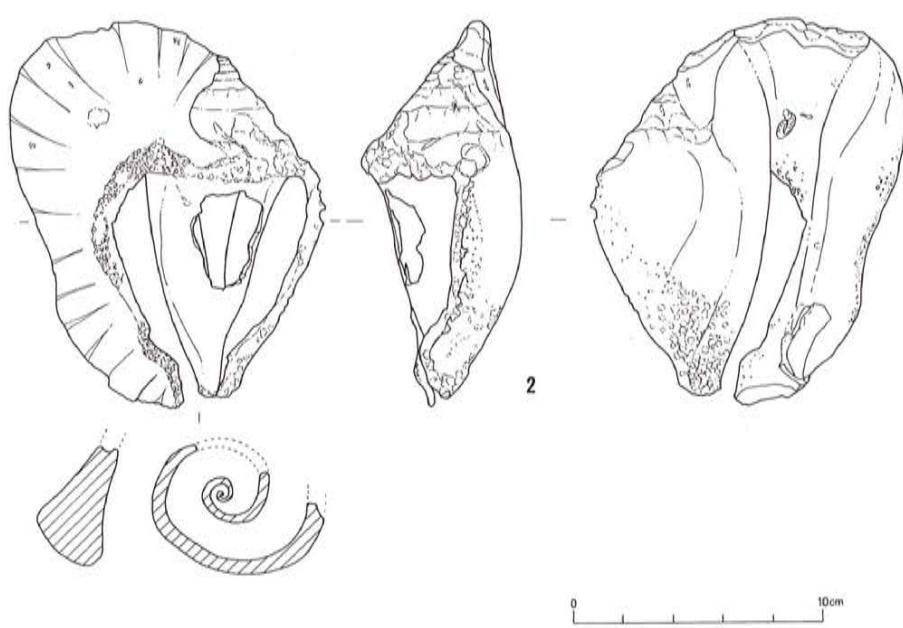
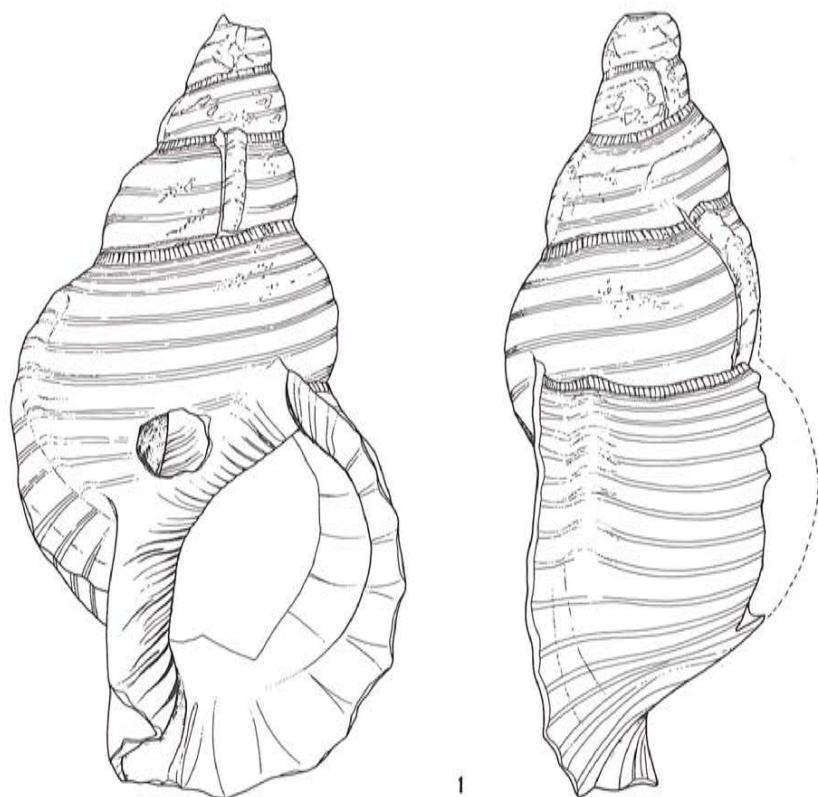
第25図 石器実測図・7（敲石兼磨石）



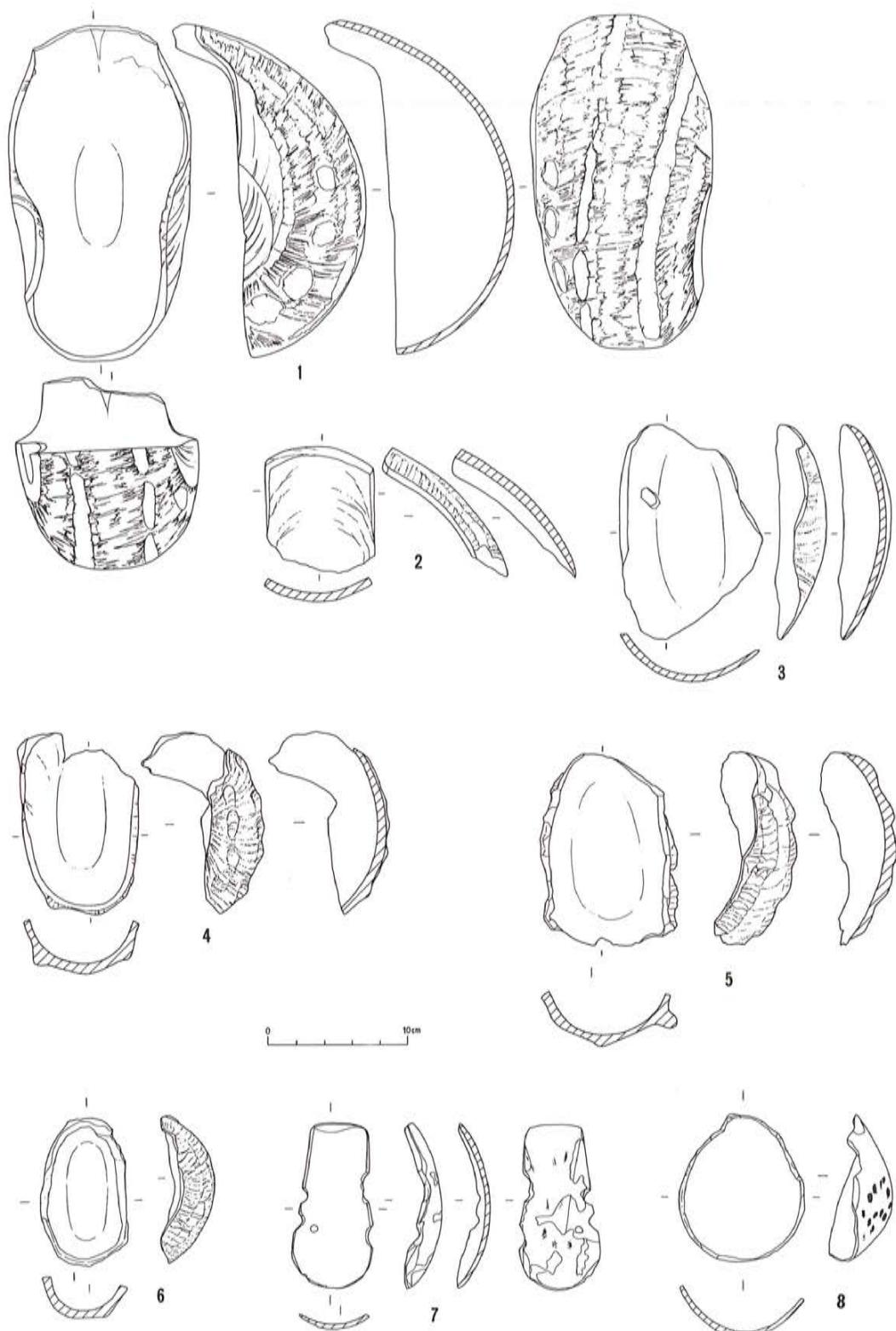
第26図 石器実測図・8 (クガニイシ (1~3)、球状石器 (4~6))



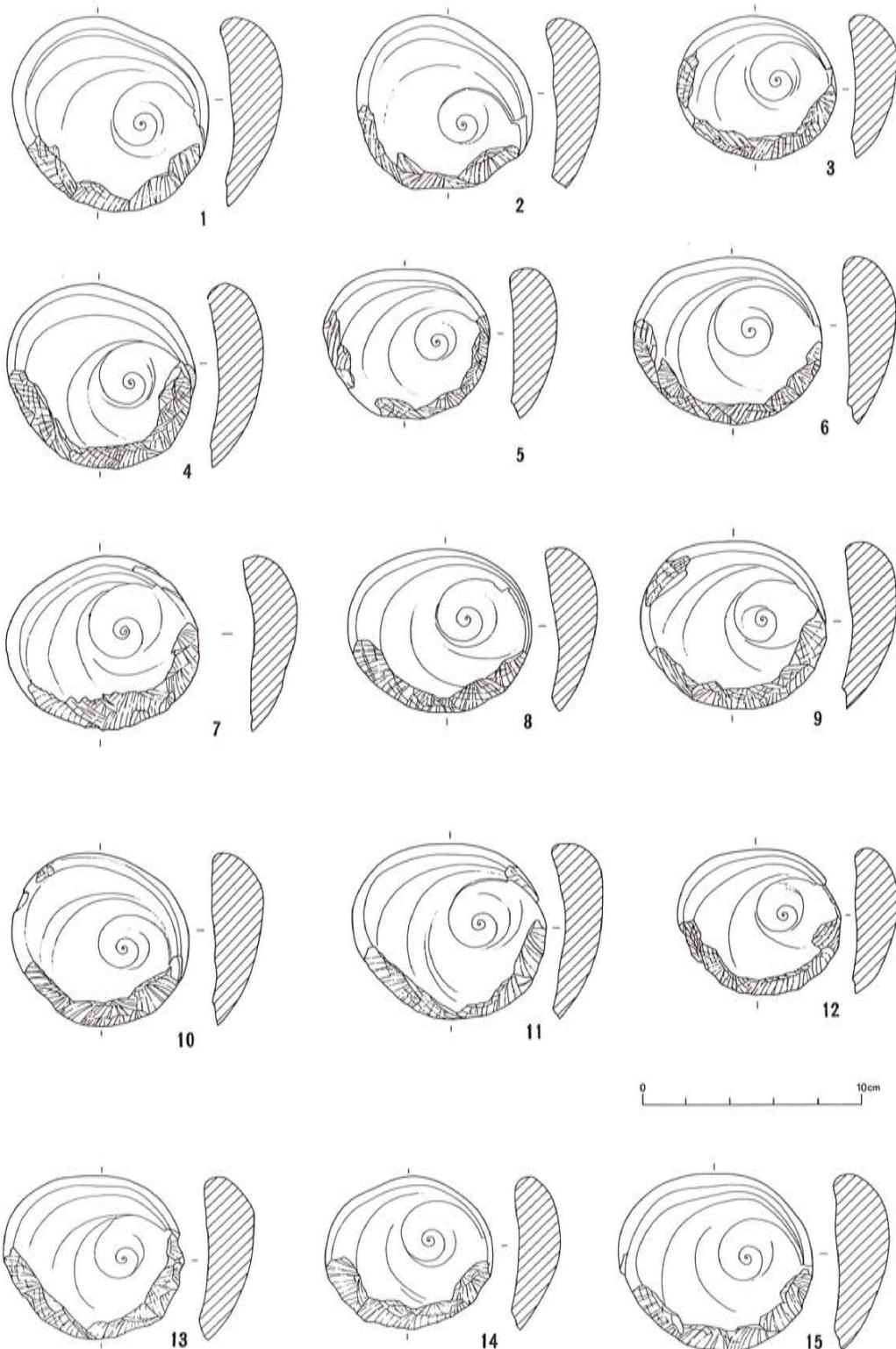
第27図 貝符（貝札）、イモガイ製札状製品、巻貝製装飾品、骨製品実測図



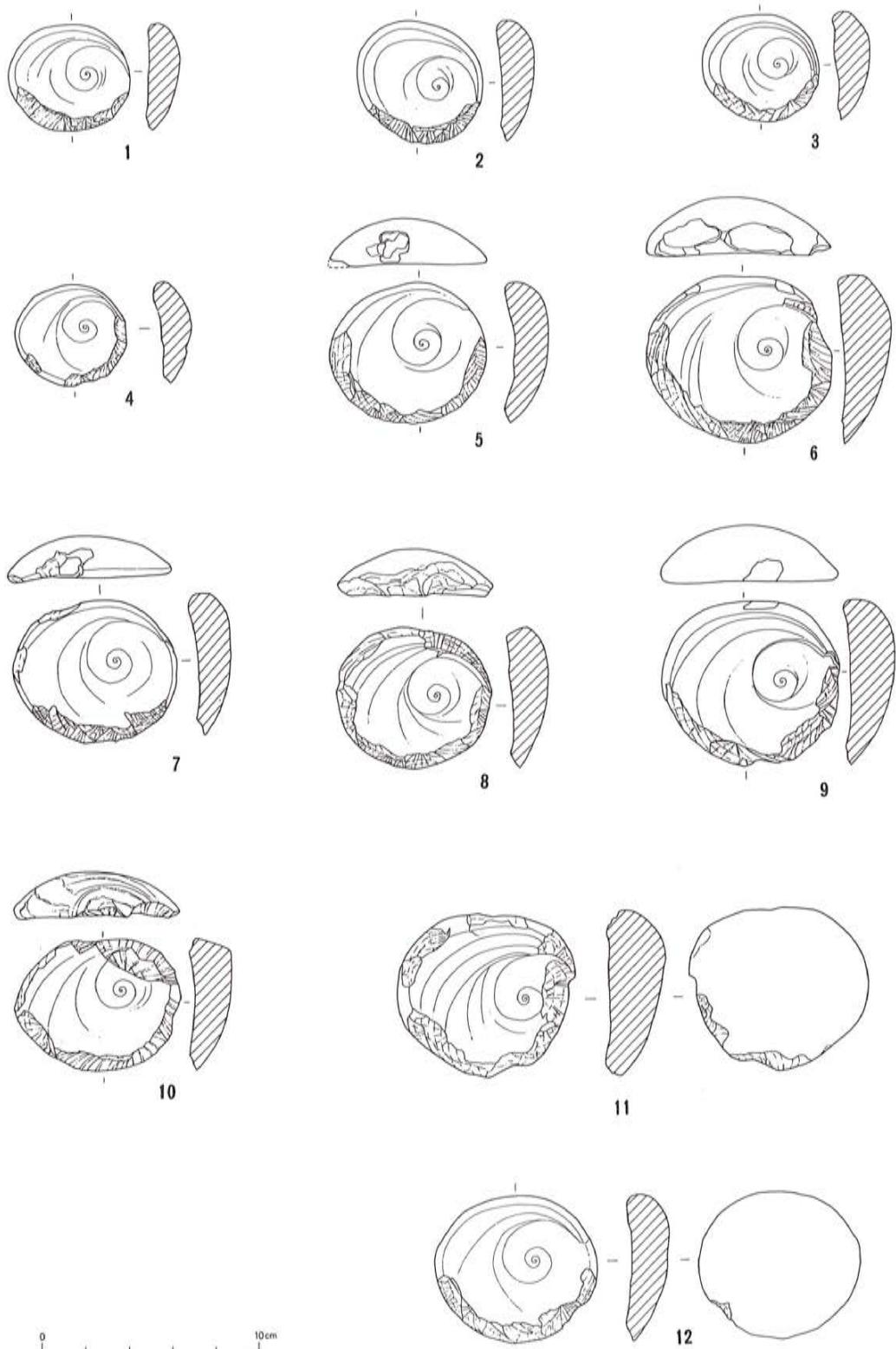
第28図 ホラガイ製器、ゴウホラ製貝輪の失敗品実測図



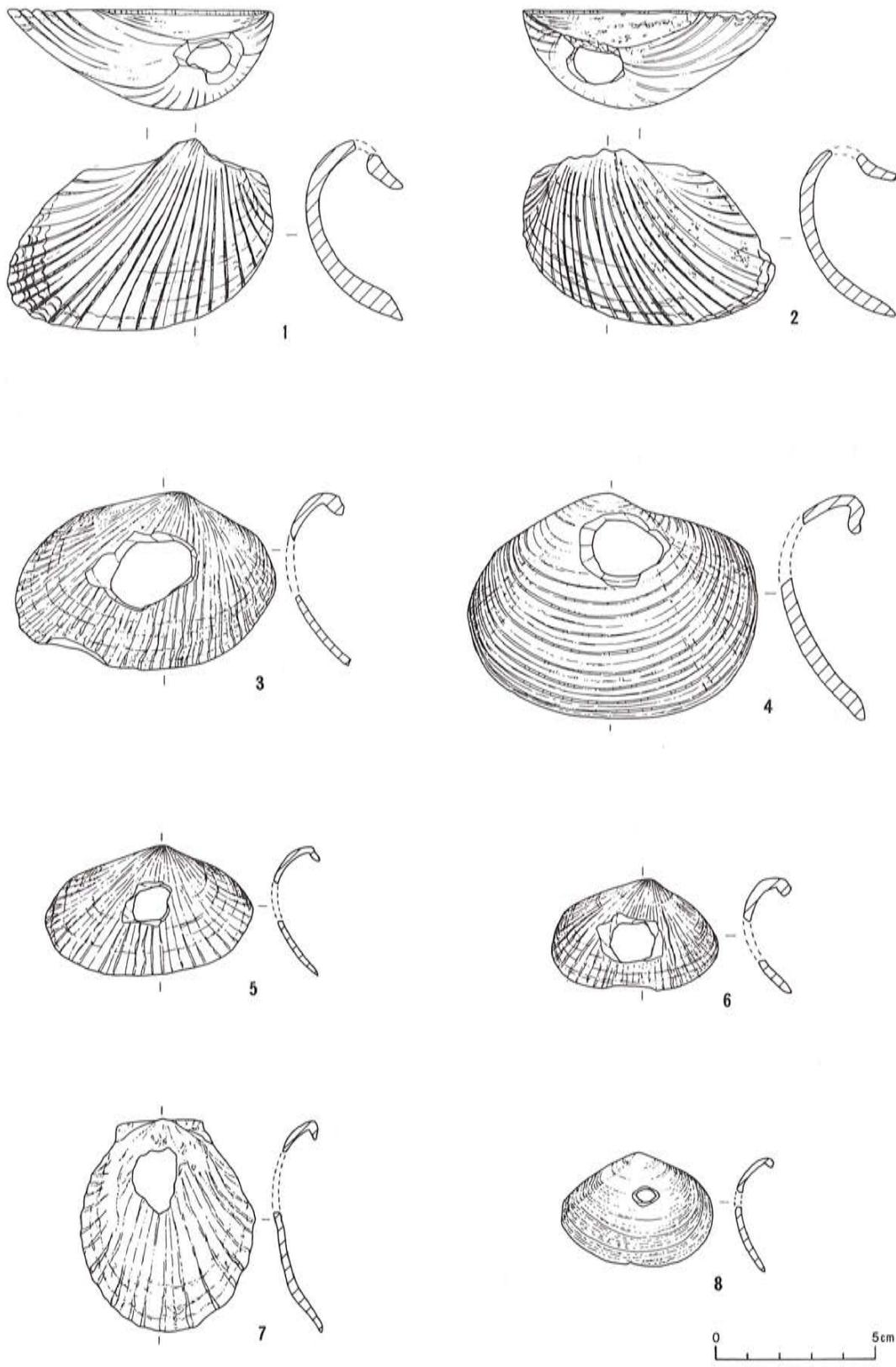
第29図 ヤコウガイ製杓子状製品（1～5）、匙状製品（6～8）



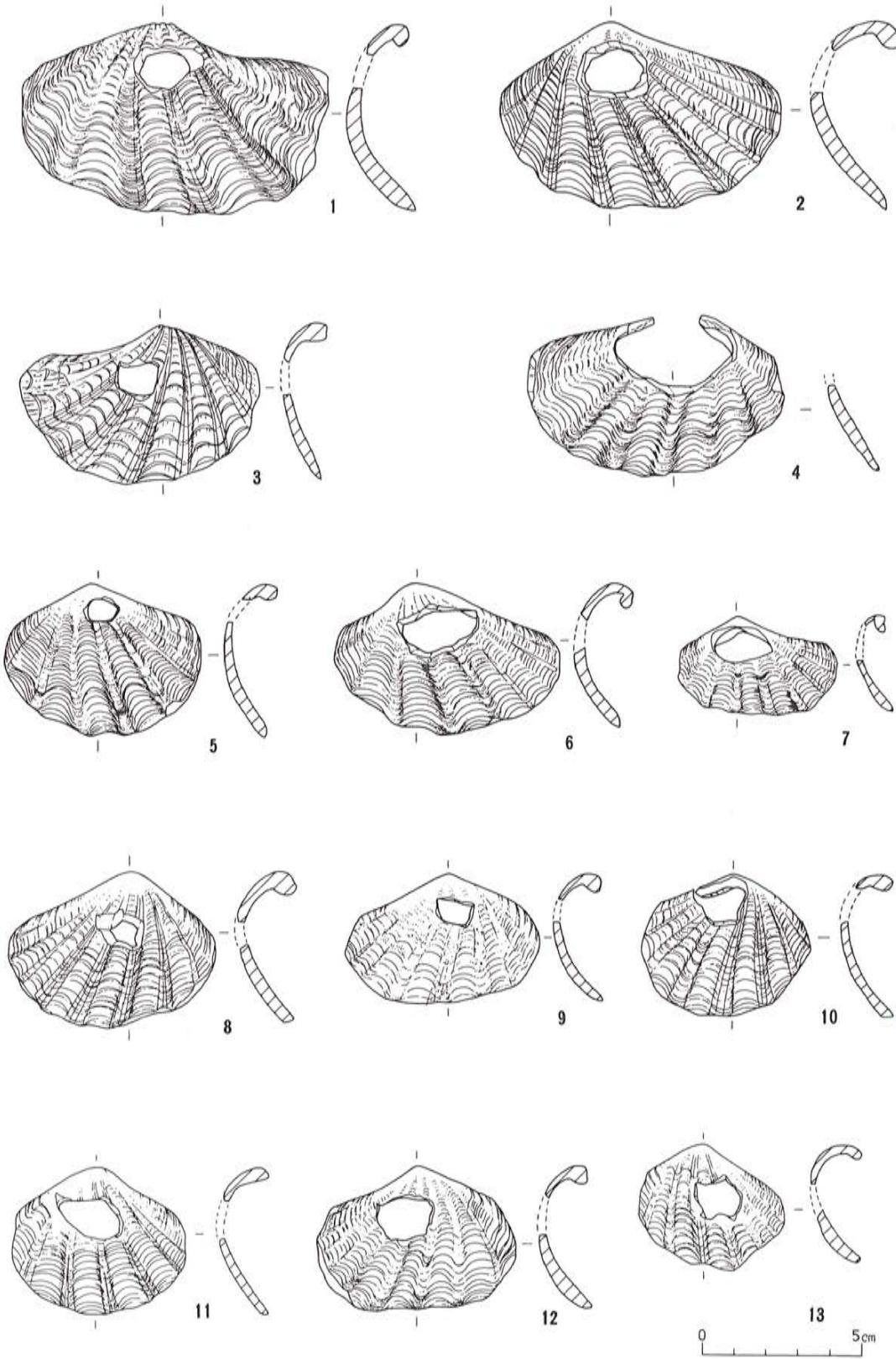
第30図 螺蓋製敲打器実測図・1



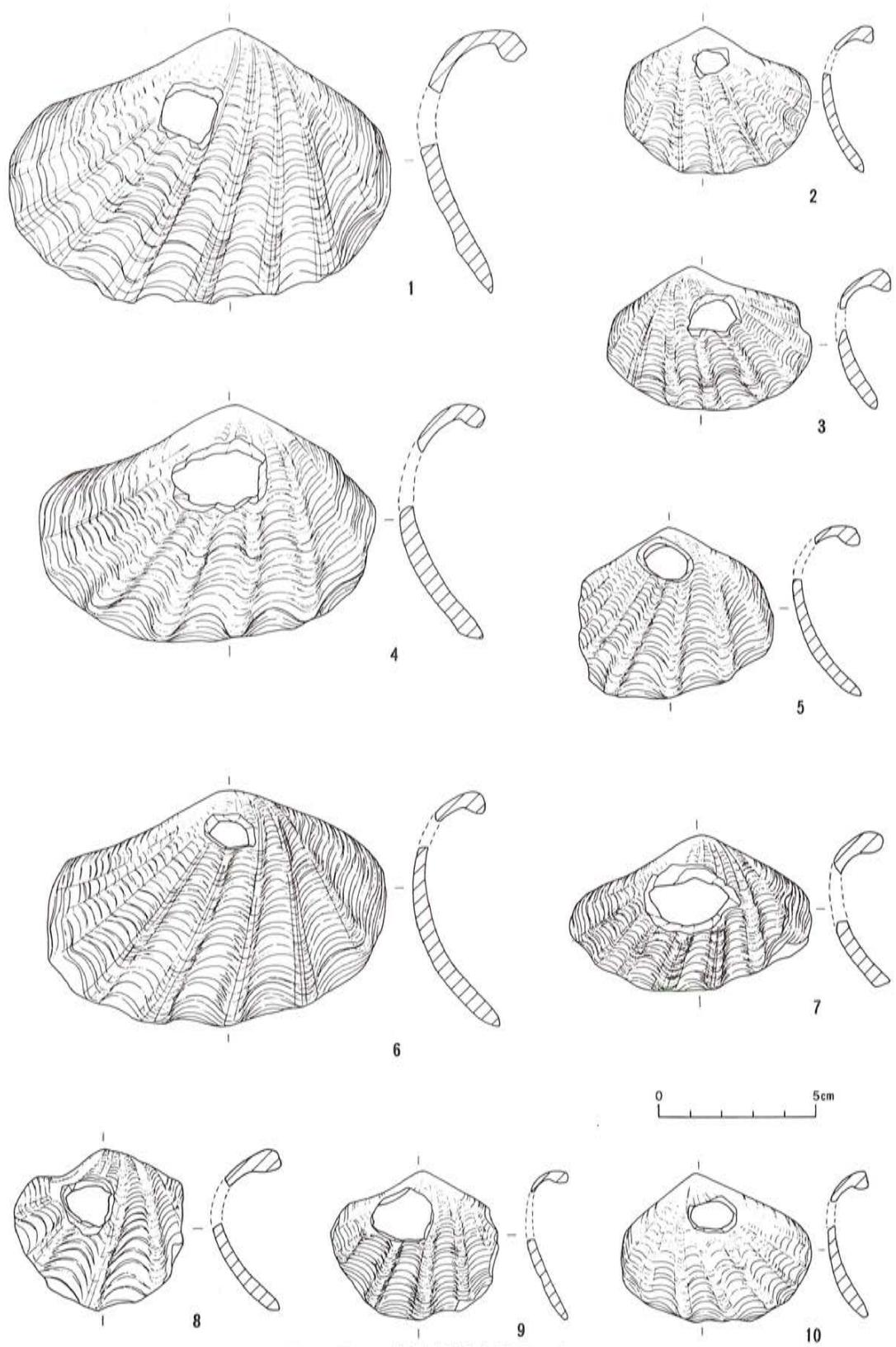
第31図 螺蓋製敲打器実測図・2



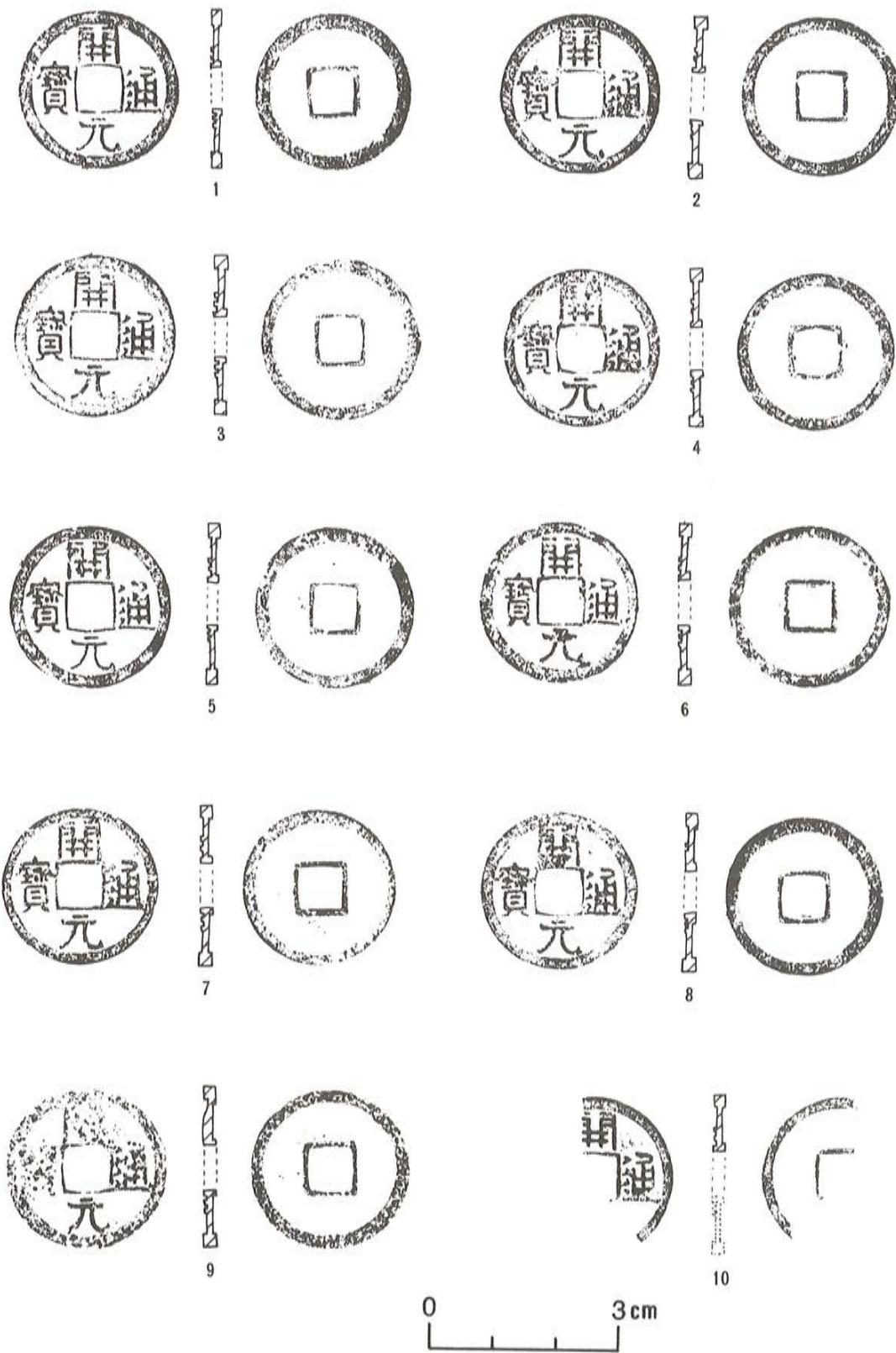
第32図 貝製漁網錘実測図・1



第33図 貝製漁網錘実測図・2



第34図 貝製漁網錘実測図・3



第35図 開元通寶実測・拓影

## 第5章 収束

以上、前章までにて久米島空港拡張建設計画予定地内における分布調査の成果と内容について述べてきた。ここでは、その成果についてふれてみたい。

第3章でも述べたように、確認調査は空港拡張建設計画との絡みから、主として三ヵ所の地点で実施してきた。

調査の結果、当初の計画案に対応するために実施したI地点では、これまで未周知の遺跡が発見された。制約を受けた調査であったことから、調査面積は限定された小範囲のものとなり、その内容は必ずしも遺跡の全貌を把握できるものではなかったが、出土土器などからしていわゆる沖縄貝塚時代前期（高宮廣衛氏編年試案の沖縄前IV期）に属する遺跡であることが判った。遺跡は、島の内陸部から海岸砂丘へ向けて延びてきている石灰岩の風化土壤の赤土（マージ）層の端部付近に形成されている。従来、一帯で当該期の遺跡が未発見であったことを考慮すると、成果の一つといえよう。幸いにしてか、このI地点の含まれる部分は、地主側の同意が得られなかつたことより空港用地としての取得が不可能となり、拡張建設予定地からははずされた。なお、一帯の現況はキビ畑として使用されており、その耕作の際にはこれらの埋蔵文化財に影響のないよう配慮していただきたい。

II地点は北原貝塚の残存部である。本貝塚は、これまでの調査からほぼ空港に並行して南北に延びた砂丘に立地する、沖縄後期の貝塚であることが判明している。貝塚発見の契機も現空港の建設に伴うものであった。第4章でも述べたように、該貝塚はこれまでにも二度の調査が実施され、その大半はすでに壊滅てしまっている。とりわけ、1973年の現空港エプロン（駐機場）拡張建設に伴った調査は、沖縄の本土復帰後、初の大規模調査ということで、記録保存か現状保存かをめぐって、沖縄考古学会をはじめ一般市民に与えた影響は大きかったようである。そして、現在またジェット化へ向けての空港拡張が計画されている。文化財保護当局が分布調査を実施しているのとほぼ並行して、建設計画側は計画を進行させ、その拡張をすでに決定し、すでに今年度（1991年度）から一部の工事を着手している。実施計画図に依ると、現存部分（約997m<sup>2</sup>）のII地点は、すべて建設予定地内に取り込まれる予定となっている。広大な規模をもっていたと推される北原貝塚のなかのわずかな現存部分を開発という名のもとに失ってしまうと、本貝塚は全滅ということになる。これからでも、可能であれば設計を変更し現状保存を切望する。

この北原貝塚の南限を把握しようとしたのがIII地点の調査であった。当該部分は、当初I地点を含めた東～東北側に予定していたターミナルビルや駐車場、庁舎などの付帯施設が計画されている所である。第3章でも述べたように、調査の結果、一帯は表土層の腐植土層下が約2.5～3mもの無遺物の白砂層となり、貝塚の広がりは確認されなかった。このことから、本貝塚の南限は、旧旅客ターミナルアクセス道路を境に南側には延びていないということが明かとなった。

なお、北原貝塚の出土遺物の考察については、再報告の際行うつもりである。

## 参考文献

<あ>

- 安里 進, 1974 : 沖縄における原始共同体の解体過程（試論）－沖縄本島南部・久米島を中心として－。沖縄歴史研究。11号。p 65～83。沖縄歴史研究会。那覇。
- , 1975 : グシク時代開始期の若干の問題について－久米島ヤジヤーガマ遺跡の調査から－。沖縄県立博物館紀要。第1号。p 36～54。沖縄県立博物館。那覇。

<お>

- 大城逸朗, 1976 : 久米島の地質－特に琉球石灰岩と完新世イリビン海岸について－。沖縄県立博物館紀要。第2号。p 1～17。沖縄県立博物館。那覇。
- 沖縄県土木建築部, 1991 : 久米島空港－整備計画概要－。沖縄県。

<か>

- 久手堅稔, 1979 : 字具志川周辺の遺跡。宮里静光編『具志川部落史』所収。p 26～38。
- 久米島具志川村字具志川。久米島新聞社。
- , 1982 : 久米島具志川村西海岸の遺跡。『沖縄久米島－沖縄久米島の言語・文化・社会の総合研究報告書－』。p 105～126。弘文堂。東京。

<き>

- 木崎甲子郎・編, 1975 : 『沖縄の自然－その生いたちを訪ねて－』。平凡社。東京。

<し>

- 白木原和美, 1978 : クガニイシ。法文論叢。第41号。p 104～123。熊本大学法文学会。熊本大学。熊本。

<せ>

- 関 俊彦・訳, 1975 : Complex Adaptive Subsistence Systems in Ryukyu Prehistory / Richard Pearson. Circum-Pacific. 2. p 17～28。環太平洋学会。東京。

<た>

- 高宮廣衛, 1982 : 先史時代の久米島。沖縄久米島調査委員会編『沖縄久米島－沖縄久米島の言語・文化・社会の総合的研究報告書－』所収。p 89～104。弘文堂。東京。

<ち>

- 知念 勇, 1976 : 北原貝塚。具志川村史編集委員会編『具志川村史』。二 具志川村の先史時代1 具志川村の遺跡。p 17～20。具志川村役場。沖縄県久米島具志川村。
- , 1982 : 北原貝塚。掘り出された沖縄の歴史－発掘調査10年の成果－。p 122～123。沖縄県教育委員会。那覇。

- 当真嗣一・他, 1980 : 大原－久米島大原貝塚群発掘調査報告書－。沖縄県文化財調査報告書第32集。沖縄県教育委員会。那覇。

<に>

- 西里武雄・他, 1960 : 久米島における先史及び原始遺跡概要。郷土。第7号。p 92～131。
- 沖縄大学沖縄学生文化協会。那覇。

<ひ>

- ピアソン・リチャード・他, 1990 : 久米島と西表における遺跡の発掘。文化課紀要。第6号。p 79～94。沖縄県教育委員会文化課。那覇。

三島格, 1982 : 螺蓋製斧。『賀川光夫先生還暦記念論集』。p 95 ~ 127。賀川光夫先生還暦  
記念会。別府。

<よ>

吉浜 忍, 1976 : 久米島—その歴史との対話を求めて—。第 14 回学園祭展示資料パンフ  
レット <ガリ刷り>。沖縄県立久米島高等学校 3 年 5 組。

<め>

目崎茂和, 1988 : 『南島の地形—沖縄の風景を読む—』。沖縄出版。那覇。

<も>

盛本勲, 1988 : 琉球列島の貝製漁網錘。季刊考古学。第 25 号。p 71 ~ 78。有山閣。東京。

盛本勲・編, 1989 : 清水貝塚発掘調査報告書。具志川村文化財調査報告書第 1 集。具志川  
村。沖縄県久米島具志川村。



近 景  
(東より)



同 上



試掘調査光景  
(北より)

試掘穴・N O. 3 東壁  
(西より)

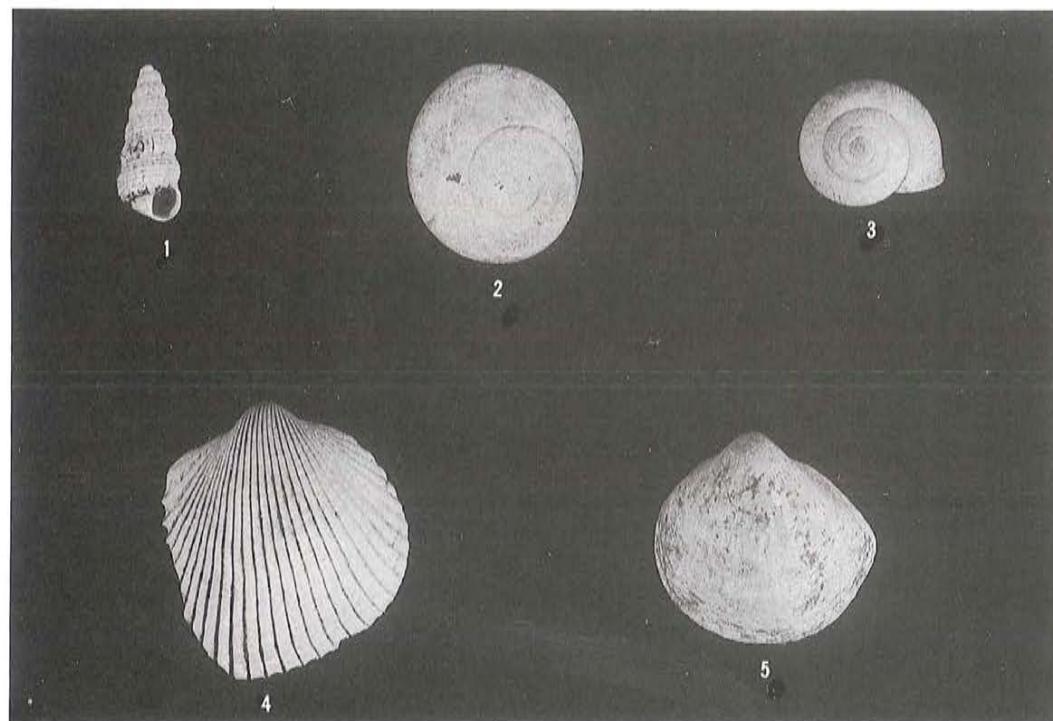
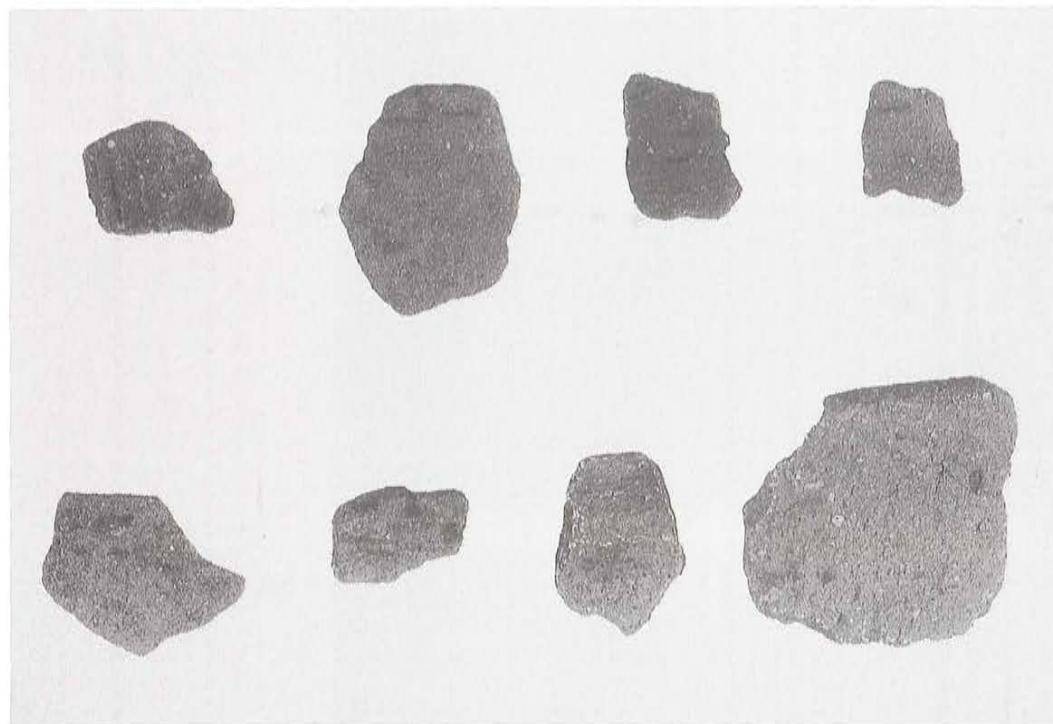


試掘穴・N O. 8 西壁  
(東より)



試掘穴・N O. 9 南壁  
(北より)





上：土 器

下：貝類遺存体(1・イトカケヘナタリ、2・チョウセンサザエのフタ、3・パンダナマイマイ、4・カワラガ  
イ、5・ソメワケゲリ)



近 景  
(中央部のこんもりした部分が貝塚)  
(北東より)



試掘穴断面



同 上



試掘穴断面



シライミ御嶽

---

---

## 沖縄県文化財調査報告書第106集

新空港・空港拡張建設計画予定地周辺の遺跡

－新石垣空港・久米島空港拡張建設計画予定地内詳細分布調査報告書－

発行日 1992年3月31日

編 集 盛本 勲

発行所 沖縄県教育委員会

沖縄県那覇市泉崎1丁目2-2

TEL 098-866-2731

印 刷 (株)南西印刷

TEL 098-884-4321

FAX 098-884-4389

---

---

